

---

# 聖なるかな ~ A lyrical magical eternal ~

炭斗

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

聖なるかな A l l y r i c a l m a g i c a l e t e r n  
a l l

### 【Nコード】

N52980

### 【作者名】

炭斗

### 【あらすじ】

望たちの旅は終わらない。

時間樹から時間樹へ渡る神剣宇宙の旅を繰り返し、目的の半分を達成したかと言う頃、とある時間樹の苗木を発見した事から運命の歯車は動き出した……。

この作品はアルカディアでも連載していません。

## 序章 天 ～この宇宙の果てで～（前書き）

いっつあ処女作。

本作は聖なるかなとリリカルなのはのクロス（来訪）モノになります。

このSSを読むにあたっての注意！

本SSはお読みになる皆様が「聖なるかな」を知っているモノとして進めていきます。ですので、分からない箇所がありましたら、お手数ですが感想板にてご指摘をお願いいたします。なるだけ答えさせていただきます。

設定はナルカナルートに準拠させます。

聖なるかな公式ファンブックになるだけ添わせたいと思います。

作者はファンディスクをプレイしていないのでファンディスクとの矛盾があるかもしれませんがお容赦ください。

## 序章 天　くこの宇宙の果てで

虚なる闇が、流れて移ろう。

神剣宇宙の静かな流転。

そんな紺碧の静寂に漂う、虹綺の輝き。  
闇の中、星に見紛わんばかりの煌めきを放つそれらは、しかし星ではない。

それは『樹』

全ての世界の根幹を成す、大いなる存在……名を『時間樹』と言う。  
世界の剪定、新たな世界の創造、枯れた世界の吸収……全ての作業を己で成し遂げ、時間樹を維持し続ける。

一つの『永遠』を手にした時間樹の目的は自身の維持以外には無く、その無欲もまた、彼の存在の永遠性を助長させる要因となっている。  
その永遠を内包する時間樹の光は綺羅星の如き輝きでいつて、虚無の空間を煌々と照らし続ける。

その輝ける虚空の中を流れる様に進む一つの集団があった。  
否、集団と呼べる程に数は多くない。精々が3、4といった所だろ  
うか。

虚無の空間に樹々が立ち並ぶ中、それらは人間の形を成して飛翔を  
続ける。

闇と煌めきだけが辺りを包む中、人型の存在というモノは酷く浮い  
て見える。

だがしかし、その一団が浮いている事は勿論ながら、その中でも一  
際浮いた存在がいた。

男である。

4人連れでありながら、そこに男が1人しかいないのだ。

男女比1：3なら珍しい話でもないのだが、その比率がそのまま数  
に繋がるのであれば話は違って来る。

だがその集団は騒ぐでもなくはしゃぐでもなく、粛々と空間を進ん  
でいた。

そんな中、一人の少女が不意に静寂を破りその口を開く。

「飽きた」



## 序章 地 く時間樹への誘い

「……ナルカナ、貴女その言葉何回目だと思ってるのかしら？」

呟いた少女の左を飛ぶ赤みがかつた髪をなびかせた少女が溜息混じりに答えた。

名を斑鳩 沙月という。

「だってー、飽きたモンは飽きたんだもん。仕方ないじゃない」

先程「飽きた」と呟いたナルカナと呼ばれた女性が懲りずにその小言に答える。

歳の頃は同じだろうが、その身に纏う気怠げな雰囲気や黒く伸びた艶やかな髪が段違いの色香を醸し出していた。

しかしそんな色気や雰囲気惜し気もなく振り撒こうとも、本人のこの子供っぽさの前では粉微塵である。

「……ちなみに今の二回を含めると四十一回目だぞ？」

二人の前を飛ぶ妙に達観した口調で話す少女……幼女がどうとも言えないコメントを入れた。

「失礼じゃな」

黙れ神性口リ。

その名を聖レーム。とある神剣に宿る神獣にして、先頭を飛んでいるハイ・エターナルのパートナーである。

そんな少女達の言を受け、一番前を飛んでいるこのメンバーの黒一点が口を開いた。

「まあ、分からないでもないかなあ…。かれこれ…？」

言いながら胸元から懐中時計を取り出す。

「四日になるのか…：ナルカナ、どっかに腰を落ち着けるか？」

メンバー唯一の男にしてこのグループのリーダー、そしてとある永遠神剣第一位の担い手。

名を世刻 望という。

「ちょっと望くん、ナルカナの言う通りになんかしてたらいつまで経っても進めないわよ」

沙月がすかさず望に指摘する。しかし、それは意外な所から横槍が入るのであった。

「そうは言うが…：サツキよ、前の世界の滞在期間が些か短すぎたから、吾もそれなりに疲れておる。ここは吾も何処か適当な時間樹で休む事に一票を投ずるぞ」

「レームちゃんも！？ああもう、望くん！主としてもリーダーとしてもココはビシッと……」

「すみません、俺も休むに……」

「……」

沙月はまさかの裏切りに言葉を失う。ぱくぱくと口を動かすだけで、上手く言葉が出てこない。

その隙にナルカナが我が意を得たりと、周りをキョロキョロと見回し始めた。

「よし！！休憩出来そうな時間樹……はなんかつまんないな。ビッと来た時間樹に腰を落ち着けよー！」

「そんなに元気ならまだまだ大丈夫でしょー！！」

「やーだー！景色に飽きたのー！」

ナルカナと沙月が言い合いを始める。

それを尻目に二人で肩を落としながら望とレームは時間樹の群を見渡す。

「おっにさーんこっちらー！」

「待あちなさーい！！」

後ろで中々に派手な光や音が響き始めたが、望は敢えてそれらを意識の外に追いやった。

「…ん？」

ふと、望の視界の端を何かが掠める。僅かな違和感ながら、どうしてもその違和感を拭い去る事が出来ず、気になった物へと近付く。

「……………これは…」

「時間樹の苗木ね」

「うお！？」

いつの間にか傍に来ていたナルカナの言葉に望が取り乱した。だが、それを気にも留めないナルカナはその苗木へと近寄る。

「……………」

するとみるみるナルカナの表情が険しい物へと変わって行くではないか。

その表情の変化を苦々しく見る望は、それでもナルカナに尋ねた。

「…どうした？」

「どーしたもこーしたも、マズイわよこの苗木。放っておいたら丸ごと枯れるわ」

「そうじゃな、かなり切迫しておる」

ナルカナと共に検分していたレーメが、その言葉に同調を示す。当

たつてほしくない予想が的中した望は、思わず頭を抱えこんだ。

「望くん！ナルカナこっち！？………つてどしたの？深刻な顔して」  
どうやらナルカナを見失っていたらしい沙月が光輝を構えながらこちらへ近付き、一拍遅れた反応を見せる。

「サツキの反応の遅さが普段の物腰からは想像もつかんのじゃが…  
…」

レーメが呆れながら米嚙を押す。

そんな中、望は真面目な顔で沙月に宣言した。

「先輩、次の行き先が決まりました」

## 序章 鞘くごうして唄は紡がれる

「じゃあ状況を整理するわね？」

沙月が持ち前の委員長気質を發揮し、時間樹の苗木についての説明を始める。

曰く、

・神剣以外の外的要因によって分枝世界の至る場所に穴が空けられている。

・その穴からマナの流出は今の所は見られないが、ふとした切掛からマナバーストの可能性が考えられる

「とりあえず此処までが現状ね。何か質問あるかしら？」

「はいはい！なんでこの私じゃなくて沙月が取り仕切るのかしらー！？」

「無ければ次に行くわよ？」

「ナルカナ様を無視するなー！永遠神剣第一位なんだぞー！」

沙月がナルカナをスルーする。最近になって身につけた能力だ。

「今は使い手がいるであろうに……」

レーメの呟きに、望が苦笑いした。今は使い手についてはアンタツチャブルなのだろう。

「最近望が黎明ばかり使っててナルカナ様は不満なんですー！」

「神剣としてだけじゃないから余計にねー」

手痛い沙月の追撃が飛ぶ。案の定、ナルカナはその挑発にこの上無い程に食いついた。

「んなっ！あっ…アンタ！言っちゃならない事言ったわね！？」

「フフツ、その発言は認めたも同然ね！」

「身につけたというスルー能力は一体何処に行ったのだ…？」

いつの間にか沙月が以前と同じ様にナルカナに突っ掛かりに行っている。

「まあまあ、先輩もそのあたりで……」

これ以上の事態の混迷化はマズイと判断した望は互いの説得を試みようとした。

が、

「ちなみにブランクで言うならばサツキの方が長かったりするぞ？」

「レーメええ！？余計な事は言わなくて良いぞ！？」

「勝った!!」

「何よ何よ！期間なんかほんのちよっぴり違うだけじゃない。そんな誇らしげにしても大差ないじゃない！胸勝ってるからってそんなに誇張しなかつたっていいじゃない！！望くん、後で覚えてらっしゃい！！」

「ちなみにサツキは知らん筈だが、ノゾムがナルカナと最後に通じたのは三ヶ月前になる」

「なあんですつてえ!?!」

「ますます勝った!!」

「ちなみに吾は先月だがな」

.....  
.....  
.....

「「望<sup>くん</sup>？」」

「ついさつき逃げたぞ?」

「「待ちなさああいつ!?!?!」」

## 閑話休題

「とーにかくつ！今回の時間樹は一筋縄とはいかないわ。少なくとも時間樹内限定とはいええ、世界を自らの意思で渡り歩ける連中がいるという事。ここが一番厄介ね」

元の冷静さを取り戻した沙月が仕切り直しにこれからの方針を打ち出す。

よく分からないボロクズのような肉塊とか、沙月達に付いた『紅黒い染み』とか、周囲に微かに漂う焦げ臭さとかは気にしちゃいけない。

繰り返す。気にしちゃいけない。

「今回も分割行動にする？私は別に構わないけど……」

ナルカナが他の時間樹で行っていたやり方を思い提案する。だがその意見に対し、沙月は静かに首を横へと振った。

「いいえ、今回は固まって動きましょう。相手の規模や正体が掴めない以上、単独で相手取る場合を考えたらリスクが大きすぎるわ」

「そうじゃな。我も今回は集団行動が良いと考えるぞ」

「成程、確かに」

沙月の意見にレーメが同意し、ナルカナもそれを聞いて沙月の言に同意を示して頷いた。

「あら、意外ね？貴女の事だから『このナルカナ様に不可能は無い！』とか言い出すと思ったのに」

沙月のからかい混じりの言葉にナルカナは反応するでもなく、物憂い視線を時間樹へ送りながら独白する様に呟いた。

「…それだけこの時間樹の状態が危ういつて事。流石のナルカナ様も今回ばかりはちょっとサカに来てるのよ」

そのナルカナの横顔に沙月は何も言えなくなり、思わず視線を横にずらす。

「とにかく集団行動は決定ね。で、侵入に際してなんだけど……ナルカナ、レーメちゃんも。神名を極力封印した状態にして欲しいのよ」

「んむ？何故だ？」

レーメが沙月の言葉に首を傾げる。

「確かにその方が良いでしょうね。今見て分かったわ」

理由がイマイチ分からないレーメを無視しながらナルカナが同意する。そんなレーメに沙月からのフォローが入った。

「あのね、レーメちゃん。この時間樹見てちょうだい？」

沙月の言葉に従いレーメが時間樹を見してみる。

「む？……んー……？……なんと!？」

やがてその疑問は驚愕へと変わり、しきりに納得したように何度も頷いた。

「うむう……この時間樹、その規模に比べて保有しているマナが余りに大き過ぎる……そういう事じゃな？」

「そういうコト。いいえ、それだけじゃない……そのマナですら余りに一部の分枝世界に偏りすぎてる。どんな影響が起こるか想像もつかないからこそ、なるべく神名は自己封印。神性強度も修正した方が良さそうね……んー、でもこの感じだったらいっそ……」

沙月の中で計画が組み上がる。そしてその計画が一通りの完成をみる。

「んじゃ、行動指針も決まったから説明するわねー。レーメちゃん、悪いけど節操無し（ノゾムクン）起こしてきて?？」

「何やらとんでもない字に当てられた気がするのじゃが……まあ行ってくるぞ」

そう言ってレーメは肉塊（望）にふよふよと近寄る。

暫くして、

「……あれ、先輩？どうしました?？」

先程の記憶をすっかり亡くした望がよろけながら近づいて来た。

同情はしない。リア充エターナルめ。

改めて全員になった所で沙月が説明を始める。

「じゃあこれからを説明するわね？まずはさつき集団行動って言うんだけど、改めて調査したらどうも望ましくないみたいなの。これを撤回するわ」

「あら、どうしてかしら？」

沙月の突然の撤回宣言にナルカナが疑念を投げ掛ける。その問いに沙月は冷静に答えた。

「この世界の穴、仮にマナホールと呼びましょうか。そのマナホールなんだけど、見て」

そう言いながらマナホールを指し示す。

「あの辺に集中してるだけで時間樹の幹まで行ってないのよ。だから…」

「根源回廊に潜って、時間樹のプログラムチェックをする係を派遣する感じか」

沙月の言葉を望が引き継ぐ。

「まあ、そんな感じかしら？で、その根源回廊へ行く係なんだけど……私とナルカナにしようと思うの」

「……？」

全員が疑問を表す。プログラムチェックだけなら沙月だけで十二分に事足りる筈だからだ。

「私が根源回廊でチェックした時にバグがあっても、私じゃ修正出来ないでしょ？外から見ても分かる様な異常なんだから、バグが無い訳ないじゃない。だから修正出来るナルカナと行動すれば、手間が大きく省けるの」

「なるほど、分かりました。その間の俺とレーメはどうしますか？」

「マナホールが密集してる分枝世界の一带に向かってちょうだい。中心は相手の総本山だろうから、なるべく近くでマナホールの影響が少ない分枝世界がベストなんだけど……ナルカナ、そんな場所は有りそう？」

沙月がナルカナへと尋ねる。ナルカナが枝を吟味しながら、眼光鋭く見据える。

「………あつた！あそこらへんのが理想じゃない？」

どうやら理想的な地点を発見したらしい。

「うん……距離もそれなりだし、良さそうね。望くん、頼めるかし

ら？」

「まあ、有り得ないだろうけど……やられたりしない様に気をつけなさい！！！」

行動指針を示し、それぞれから激励を送られる。それを受け止めた望もまた、激励を返した。

「分かりました。先輩もお元気で……ナルカナも無茶するなよ？」

「お互い様よ……行くわよ、沙月！」

「ええ！」

そうして二人は根源へと吸い込まれる様に飛んで行った。

望はその様子を眺めると深く息を吸い、気合いを入れるかの如く大きく頷く。

「じゃ、行くかレーメ！」

「おっっ！」

そして、唄は紡がれる

遥か遠く、限りなく近く

響きあい、謳え継ぐ

これは、いのちのうた

## 序章 鞘くさつして唄は紡がれる (後書き)

さて、これにて序章は終わりです。これから物語がどうなるか、作者にすら分かりません……………

リアルでとんでもない事態が発生したので更新が停滞するかもしれませんが、投稿した以上は完結させます。それが俺のジャステイス!!!

長い目で見守りつつ、ふとした時にこのSSを開いて「ああ、更新してたんだ」と思いながら流し読みして頂けたら、それが最高の幸せなんだと思います。

長くなってしまいました。これからも不肖の作者と、本SSをよろしく願います。

……パソコン投稿ってどうやるのかなあ……

## 第1章 〽開幕の鐘は夜更けに〽

「……………うおっ！」

多少よろけつつも着地を果たし、辺りを見渡す。

そこは闇夜に包まれた閑静な住宅街だった。まだそこまで遅い時間では無いらしく、電光があちこちの家々から漏れ出ている。

「レーム、大丈夫か？」

望は己の相棒である神獣へと声をかける。その返事はすぐ傍から聞こえてきた。

「うむ、何の問…だ…いい…」

途中で切られていくパートナーの言葉に不審を覚え、声の方へと振り向く。

そしてお互いの現状に愕然となる。

「……………何で……………」

「何で大きくなってるんだ!？」

「何故そこまで縮んでおるのだ!？」

「「!?!?!?」」

慌てて自分の姿を確認し合う。

そして、住宅街に二人の声が木霊した。

「「んなあああっ!?!?」」

~~~~~

「…詳しくは分らんが、封印した神名が何らかの影響を受けた…  
のだろうな」

「……俺の中から神名を抜いたから体が縮んで、その神名をお前の中  
中で管理してるからお前が大きくなった…と？」

「まあ、そんな辺りであろうっ……詳しい事は分らん……」

「「はあ……」」

二人して胡坐をかき、大きな溜息をつく。

そう、二人は今通常からは考えられない外見をしているのだ。

そのまま縮尺を大きくして少しだけ成長させたかのようなレーメに、遙か昔のまだまだガキと呼ばれていた頃まで幼くなった望。

そしてそんな二人は、体格的にこの上なく釣り合いが取れていた。

徐にレーメが口を開く。

「此処で腐っておつても事態は進まん。サツキ達からの連絡を待ち、吾らが出来る事を成すとするぞ」

思考の渦からいち早く脱し、望へと声をかける。

望もそのレーメの言葉に同意し、立ち上がる。

「そうだな、ひとまずは…衣は最悪戦闘装束を展開すれば何とかなるか。食もエターナルだからマナさえあれば一応問題ないし……住が最大の懸案事項だな」

己の置かれた状態を紐解き、今まで旅をしてきた経験知識から自分に必要な物を選別していく。

「うむ、町の文化を見る限り、ノゾムが生まれた世界に非常に近いのではないか？」

レーメの指摘に、望が頷きかけて…そのままとある思考にぶち当たりリリースする。

「…まずい……この文化だと…」

その焦りように、レーメも不安になり望に尋ねる。

「ノゾム…どうしたと言うのだ…?」

「レーメ、聞いてくれ。この文化レベルだと俺たちには何も出来る事が無い」

「なに!?!」

「この手合いの世界だと治安がそれなりに安定してるんだよ。だから子供は保護対象として扱われる。俺たちのこの外見だと出来る事が限られてくるんだ」

「た、確かにそうだな…その辺りも追々考えるところでしょう。今は現状把握に努めるべきか…此処はどんな世界のどのあたりになるのか、想像だけでも判るか?」

レーメが望へと問う。すると望は辺りを見て断定した。

「どんな世界かはまだ分からないが…此処は間違いなく日本だ」

そう言って親指でアスファルトを指す。そこには白い塗料で大きく『止まれ』の文字が書かれていた。

「……懐かしむべきなのかな」

「それは汝が決める事だろう。吾は何処までもつき従うだけだ」

「それもそうか……」

呟くように告げる。少しばかり目を細めて町並みを見渡し、望は改めてレーメを見た。

「何も感じないって事は、そこまで懐かしい物でも無いんだろうなあ……」

「思っていたより反応が薄いな……」

レーメは少し拍子抜けした様だ。

「……あの日々に……未練が無いって言えば、嘘になる」

「……………」

レーメは黙って先を促す。この望の言葉には、途撤もない重さがある。

これからの望にとって、とても大切な事のように思えた。

「きつと、自分が考えてる以上に……俺はこの景色を胸に刻みつけてる」

でも、それでも……

「この景色を見ても何もこみあげないのは……」

大切な仲間が…友達が……

「この景色には、いないから」

大切だったアノヒトも……

「この中には……いないんだ……」

そう呟いた望は静かに目を閉じる。

最後までその名前を呼ばなかったのは彼なりのケジメだったのだろ  
うか。

その在り方があまりに寡黙すぎて、その背中があまりに雄弁すぎて……

レームは声をかけられなかった。

……キーン……!!

「……!!」

しかし余りに唐突に、その沈黙は破られる。

「レーム！」

「分かっておる！こっちだ！」

~~~~~

「レイジングハート！セットアップ！」

掛け声と共にとある少女が光に包まれる。やがてその光は納まり、中から一人の『魔法少女』が姿を現した。

そして、

「わきゃっ!?!」

その少女は、

「ひゃあっ!!」

グオオオオオオオオオツ!!!!

絶賛逃走中だった。

「はっ…はあっ…はっ…!!」

「落ち着いて!あなたの心にある魔法の言葉を探すんです!」

下からイタチがアドバイスを送る。

「フェレットです」

お前みたいな淫獣イタチで十分じゃい。

「…魔法の…言葉…」

そう言って少女は足を止めて心を鎮める…

ガアアアアアアア!!!!

最早、自分たちを追いかけていた黒い影はすぐそこまで来ている。  
それでも少女は心の均衡を保ち続けた。

そして、

「……見えた!!」

杖を一気に構え、少女はその言葉を叫ぶ!!

「リリカル・マジカル!!」

「封印すべきは悪しき器、ジュエルシード!!」

「ジュエルシード、封印!!」

少女の言葉に導かれ、幾筋もの光が影へと伸びる!

ギシッ!!

光の帯がその不定形の身体を抑えつけ、影と光が拮抗しせめぎ合う。

やがて……

ビリビリッ、ブチン!!

その影を抑えつけていた桜色の帯は千切れ飛び、跡形もなく砕け散った。

「ふえっ!!?!?」

「そんな!?!?」

驚愕の声を上げるも、脅威はそこまで迫っている。

「...や...いやあ.....」

極限状態から解放され集中の糸が切れてしまった少女に冷静さは最早残されていない。

巻き込んでしまった失態を後悔しながらも、事態の原因となったフレットは特攻の構えを取っていた。

「いやああああああああああああつ!!!!!!!!!!」

絶体絶命の中、恐慌状態に陥った少女が遂に悲鳴を上げる。

それを合図にしたかの様に黒い影が少女に襲いかかる!

「レーム!!!!」

「うむ! 『クウルトクウル界の稲穂』 限定四パーセント解放!」

「隙なく縛れ!“グラスプ”!!」

ギシイッッ!!!!

今度こそ影が動きを止める。

大地に縫い付けられたが如く、影は白金に輝く光に縛りあげられる。少女は声も上げられない。フェレットは縛りあげている魔法の質と、その密度に絶句している。

やがてその魔法は影に食い込み……

ギチギチ……ッ

グチンッ!!!!!!

「なあっ!!!!??」

フェレットもまさかそこまでの威力があるとは思わなかったのだろ  
う。

締めあげていた縄状の魔力がそのまま影を擦じ切ったのだ。

「ふう…間に合ったか…」

もはや立つ事もままならず声も上げられない少女に対し、突然現れた少年は呟きながら自然に近づく。

そして、右手を差し出しながら、

「大丈夫か？」

ここに二つの翼が入り交る

桜と黒白の邂逅は、我々に何をもたらすのか

答えはまだまだ、教えない。

## 第1章 く開幕の鐘は夜更けにく（後書き）

時間が無いって大変ですね。

負けませんよ！

次回投稿は11月になると思います。

拙作をお読みいただきありがとうございます。また、気が向いたら「ぼちっ」とお願いします。

## 第2章 く夜明けと星光の邂逅く（前書き）

…何とか10月に投稿完了……。

反動は絶対くるよなあ…

死にかけてます。作者です。

なんといきなり500ユニーク突破と言う事で、ありがたいやら恥ずかしいやら…

でも期待されてるなら、気合入れたくなっちゃうじゃないか！

前書きも後書きも余り長いのは自分でも好きじゃないのでこの辺で。

…願わくば、この作品が読者の皆様の知識欲を少しでも満たす事を祈りつつ…

## 第2章　く夜明けと星光の邂逅く

何が起きてるのか、何も分からなかった。

ただ、圧倒的な力。ただ、絶対的な暴虐。

ただ……決定的な無力……。

不思議な力だと、確かに浮かれていた。

新たな可能性だと、確かに憧れていた。

でも違う。その不思議な力には先達がいて、

その新たな可能性は既に他者に掴まれていたのだ。

それに気付いた時には……目の前に黒い牙が……

少女は漠然と悟る。ああ、此処で自分は死ぬのだと。

厭は無かった。不用意に片足を突っ込んだ代償としては当然の事だと、何故か納得出来た。

恐怖は無かった。そこにあっただのは、一種の諦観。ああ、自分は良い子に成り切れていなかったのだ、と。

そう考えると、少女の眼前に迫る黒い牙は何処か断罪の刃に見えた。

何故、これ程迄に己を誅す刃が愛しいのか。その理由は分からない。

少女は微笑み、自らの喉元を晒す様に少し上を向く。

刹那、

カアアアアッ！

突如として視界を強烈な光が包む。少女は思わず目を閉じ、光が収まったのを確認すると、ゆっくりと目を開けた。

そこには……

「大丈夫か？」

~~~~~

「……………ッ！！」

望の背中に乗った少女がビクリと大きく身を震わせる。

それを感じた望は慎重に言葉を選びながら少女へと声を掛ける。

「…おはよう。目は覚めた？」

「……選び抜いた言葉がそれか？」

横を歩くレーメから小さいながらも痛烈な野次が飛ぶ。

その事に一々反応してしまうのも望の特徴だった。

「……口下手なのは今に始まった事じゃないだろ」

「何を言つておるのだ。閨ではあれだけ甘い言葉を紡げる男が……」

「子供の前だぞ！？いきなり何言い出すんだよ！！」

言いながら若干焦りつつ、自分の背におぶさる少女を見遣る。

幸いにして半分は夢を見ているのか、何処か焦点の合わない目ではんやりと辺りを見回していた。

「ちゃんと状況くらいは見極めておる。まだまだ修行が足りんぞ、ノゾム」

言いながらレーメはカラカラと笑う。

前を茹だった顔のまま進む小動物は眼中に無いようだ。

無然とした望はそのまま歩を速めた。すると少女の意識が明確になつて来たのか、望たちに声をかけてきた。

「……あなたたちは…？」

「目が覚めたか？」

「……ここは？」

「帰り道だよ。今、君のペットに案内させてる」

「僕はペットじゃありません！」

フェレットが反論する。

「ペットでなければ野良イタチか？」

レーメから更に深い一撃を見舞われる。

「……ペットで良いからイタチ扱いやめて下さい……」

がっくりとうなだれながらその言葉を何とか搾り出す。

「悪いけど、君の家の場所教えてくれないかな？」

落ち込んだフェレットに目もくれずに、望は少女に自宅の場所を尋ねる。正直な所、フェレットは臭いを辿っていただけなのでスピードがイマイチだったのだ

「あ…うん、あっちなの」

少女は指で家の方角を示す。その向きに従いながら望たちは歩を進める。

「ノゾムも一々律儀だな、あの場に寝かせて置いても罰はあたらんぞ？」

「何いつてるんだよ。この子の親御さんが心配してるんじゃないか？ だったら放っておける訳ないだろ」

そんな会話を聞きながら段々と少女は意識を覚醒させ、その身の状態を把握していく。

そして少女は己の現状に気付いた。

見ず知らずの男の子におんぶされている自分にだ。

「もっ、もう降ろして貰っても大丈夫なの！」

「つと!?!」

言いながら少女は唐突に暴れ出す。虚をつかれた望は思わず腕の力を緩めてしまう。

「え? きゃっ!?!」

ガッ、…ペたん…

望の手から離れた少女は地面に片足を付け、そのままその場に座り込んでしまった。

「え？あれ？なんなの！？」

少女は自分のそんな状態に戸惑うばかりだ。レームが呆れた様に溜息をつき、望は苦笑いしながら改めて少女に手を差し延べる。

「完全に腰が抜けてるんだよ。いいからそのまま力を抜いて？」

言いながら望は改めて少女を背負い直す。次の瞬間、下腹部から太股の付け根辺りにかけて、ヒヤリとした感覚が襲って来た。

まるで水を含んだ布を押し付けたような…

「……………！！……」

思い当たる限り最悪の予想に、少女の顔が一気に青ざめる。

そして、連鎖の如く先程の恐怖を思い出す。

奇妙な甘美を伴う、身を引き裂くような恐怖を。

レームが表情の変化に気付いて、努めて冷静に告げる。

「仕方ない事だと思うぞ？あれだけの恐怖は普通に生きていればまず出会う事は無い」

「……………つく、えっ……く……」

少女からしゃくりあげる声が聞こえ出す。望たちはどうしようも無

くなり、取り敢えず原因を作ったらしいフェレットを睨む事にした。  
フェレットにしても自覚はあったらしく、しょんぼりとうなだれる  
だけだった。

誰も言葉を発する事無く、ただひたすら静かな夜道に、少女の微かな泣き声が響いていた……。

~~~~~

「ううなの」

十五分程歩いて少女の自宅にたどり着く。

その頃には少女もそれなりに落ち着き、若干恥ずかしさに身をよじりながらもなんとか普段通りには振る舞っていた。

「わざわざありがとうなの」

「なに、礼には及ばんぞ」

「レーム、お前運んでないだろうが」

「なにー！？ついて来てやったではないかー！」

「それだけでか！？それだけでお前は感謝される基準にまで入るのか！？」

「細かい事を一々うるさいのだノゾムは！その場の空気を弁えよ！」

「俺が悪いのか！！？」

ヒートアップしていく主従コンビにフェレットは頭を抱えて「もう知るか」と言わんばかりにそっぽを向き、少女は、

「とりあえず、お家入りたいの……」

と、小さく呟いた。

~~~~~

「高町…さん、か」

玄関の表札を眺めて望は呟くように確認した。

「なのは」

「え？」

「私の名前、高町なのはなの」

「そっか、じゃあ高町さん」

「な・の・は！」

「いや、だから……」

「……」

「……」

「……」

「……なのはちゃん」

「うんっ！」

「……その押しの弱さはノゾムの命題の一つだな……」

心底呆れたと言わんばかりにレーメは首を振って肩を竦める。

残念ながら神性ロリよ、その命題は彼が主役である限り解決する事は無い。

言いつつも望は高町家の呼鈴へと手を延ばした。

桜と黒白は邂逅を果たし

今、運命の分かれ目へその男は立たされる  
先に出ずるは、夜叉か般若か……

答えは既に、決まってる。

第3章 〱来訪、高町家。その1〱（前書き）

なかなか思う様に進まない……

でも質はこれ以上は下げられない……（既に最低辺的な意味で）

板挟みになりながらも続きます。

### 第3章 く来訪、高町家。その1く

ピー…ン…ポーン……

「はい！」

インターホンから若い女性の声がする。

「すみません、高町さんのお宅で間違い無いでしょうか？」

「ええ、そうですが……」

「実はそちらの娘さんが路上で倒れてまし……」

ドタドタッ！！

『娘』の言葉を聞いた瞬間に複数の足音が玄関口まで慌ただしく鳴り響き、もどかしそうに鍵が開けられる。それを聞いた望は“ああ、やっぱり心配されてたんだな”と自分の行いを少し誇らしく思ったりもした。

バタンツ！！

出てきたのは男性二人と女性が一人。男性の方は体格などから父親

と兄かと予想はついた。女性は見た目が若すぎて少し判断し辛い。

女性は頬に手を当てて微笑ましい物を見るような生暖かい視線を送り、

男性陣の二人は、

望たちを見て、

なのはを見て、

改めて望たちを見て、

一息をつき、

「「なのは貴様娘に何をしたア!!!」」

次の瞬間、修羅と化し望へと襲い掛かって来た。

「は、ええっ!?!」

戸惑いもそのままに、取り敢えず望は二人の突進を右に回避。

「ッし!」

が、その回避も相手は予想済みだった様で、勢いそのままに青年の

左脚が望の肩口を捉えようと伸びる。

「……！」

咄嗟に望は己の右脚を出して青年の蹴りを絡め取り、踵落としの要領で地面へとその攻撃を叩きつけた。

流石にこのカウンターは予想外だったらしく、青年はそのままバランスを失い、地面に片手をつく。追撃を避ける為に青年はその場に留まらず、両手足を駆使して望のリーチから離脱した。

（闘い慣れてる！？）

警戒もそこそこに、望はその事実には戦慄する。今の青年の足運び、判断、離脱……全てに於いて凡そ並の鍛え方では到底至れない。

……それこそ、命のやり取り、ないしはそれに準ずる事を経験しない限りは今の動きは有り得ない事を望は容易に察せた。

不意に月影が暗やむ。次の瞬間に望の全身が粟立ち、そして重大な事実を思い出す。

襲撃者は二人ッ！

本能の叫ぶまま後方へ跳び、前を見る。

視界に飛び込んで来たのは、今さっき自分がいた地点に肘の半ばまでを地面へとめり込ませた、もう一人の襲撃者だった。

「ノゾム……！」

レームが叫ぶ。だが、望は危なげなく体制を立て直すと、改めて男性を見た。

青年はアウトレンジから気配を伺っているが、殺気を飛ばして牽制している。

男性の気配を油断なく探り、そして知る。

先程の青年も、今日の前にいる男性も、よくよく気配を探り見れば

ほんの微かにだが、神気を纏っているのだ。

「……………ッ…!!！」

此処へ来て望たちの疑念はいよいよ確信に変わる。この時間樹は決定的に何か狂っている、と。

転生体しか持ち得ない筈の神気。それを彼等は持っている。しかし、それはほんの僅かに過ぎず、最低限の転生体が持ち得る筈の神気の二割足らずだが。

その二割が望たちにとっては大問題なのだ。

転生体の二割しかないとは則ち、彼等が転生体ではないという決定的な証明である。

一瞬ではあるが、思考の海に埋没しかける。だがこの二人を相手取ったの一瞬とは、十二分に敗北を想起させる物だった。

「…フツ!!!」

望の元へと手刀が伸び

「やめなさいっ!!!!!!」

切る前に全ての動きを止めたのは、玄関口にいた女性の一喝だった。

「あなた、恭也…少しお話があります。こちらへ」

口元に笑みを浮かべ、それ以外は全くの無表情という不安極まりない顔をした女性に、二人は真っ青になりながら何とか弁明しようとして口を開く。

しかし、女性の対応は迅速だった。

「なのは、そろそろその子の背中から降りてあげなさい？君もわざわざこんな遅くにありがとだね。良かったら上がっていつてちょうだい。あなたと恭也は早くあちらへ。都合がおしてるわ」

早口で一氣にまくし立てると、女性は望へと向き直り、頭を下げて

きた。

「主人と長男がいきなり失礼しました。私の名前は高町 桃子…その娘、高町なのはの母親に当たります。あちらは主人の高町 土郎と長男の高町 恭也。後は長女が家の中にいます…。娘をわざわざありがとうございます。もしご迷惑でなければ家へ上がって頂けませんか？」

言いながら、一段と深く頭を下げる。その腰の低さに若干戸惑いつつも、望は何とか言を返した。

が、ここで思わぬボロが出る。

「…ご丁寧にも。せっかくですが、お断りさせて頂きます。まだ旅の途中ですし、少し確かめたい事なんかもありますので…」  
ピクリ、と桃子の頬が引き攣る。

「…あらあら、二人だけでかしら？」

「今は、ですかね。ちょっと別行動でして、再会がいつになるかは分かりません」

「…その別行動のお友達と同じくらいの年頃なの？」

「ええ、まムグツ」

言いかけて突如として口を塞がれる。見るとレームが必死の形相をしていた。

「…愚か者！今の我等を忘れたか！？このような法治国家だと子供は守られる存在だと言ったのは汝ではないか！！」

言われて、気付く。

今、俺達は子供なのだ。

焦りを抑えつつも、望は桃子へと向き直る。

「……………」

先程見せた口だけの笑顔を張り付けた桃子がいた。どうやら先程のレームの言葉も筒抜けだったようだ。

「…えっと」

「あがるわよね？」

「……………その」

「あがりなさい」

「……………はい」

こうして、望の高町家来訪が決定した

逃げ道塞ぐは、己の無策

墓穴を掘るのは果たして誰か

彼の者の夜はまだまだ長く

夜明けはまだまだ、訪れない

第4章 〱来訪、高町家。その〱（前書き）

分けようかと思ったけど纏めて投稿。

お楽しみ下さいませ。

#### 第4章 〱来訪、高町家。その2〱

「しかし…運命とはどう転ぶか分かった物ではないな」

通されたリビングのソファの上でクッションを抱えながらレーメがポツリと漏らした。その呟きに応える為に、望は軽く頷く。

ここまで案内してくれた女性が座る様に促したが、望は丁寧に断っていた。

なのはを背負っていた望はソファが汚れる事を善しとせず、結果として所在なげに立ち尽くす事となったのだ。

その後、家に入ろうとした段階で望はなのはを降ろし、結果としてなのはの失禁が桃子に露見してしまう。その事実を受け、土郎と恭也が修羅から鬼神へとクラスチェンジを遂げるが、桃子の眼光により二人は石像と化し、弁明もそこそこに桃子に連行されて行った。

なのはは桃子に言われて風呂へと向かい、望とレーメは高町家長女である美由希に家の中へと案内され、現在へと至る。レーメは出された紅茶を飲みつつ美由希と軽く会話をし、望は腕を軽く組みながら待っていると、程なくして桃子がリビングへと入って来た。

「あ、お母さん」

美由希が思わず反応を示す。

「ごめんなさいね、待たせてしまって」

「いえ、お構いなく」

謝罪の常套句であるやり取りもそこそこに、桃子は小脇に抱えた衣服を望へと差し出して来た。

「…これは？」

「なのはおんぶしてたのでしょう？今立っていたのだったってウチのソファァーが汚れる事に遠慮してたから…違うかしら？」

桃子は的確に望の考えを見抜く。

「だからその服、洗濯しておきたいの。着替えて貰えるかしら？」

有無を言わせぬアノ笑顔。だが元々、望自身も濡れ湿った服を着ていて気分の良い物ではなく、素直に好意に甘えて衣服を受け取った。サイズがだいたい合っている事から、大方あの長男のお古だろうとアタリをつける。

すると桃子はレーメへと向き直り、

「ついでに貴女のも洗っちゃいましょう。着替えならちゃんと有るから」

そう言っつて服を差し出す。

レーメも素直に応じ、二人して着替える事となった。

二人が着替え終わると同時に、リビングに土郎と恭也が姿を見せる。二人は望を見遣ると、頭を下げ、謝罪をしてきた。

「先程は失礼したなごめんなさい」

「つい熱くなりすぎた。許してほしいごめんなさい」

「……謝罪については別に何とも思ってますが……どうしたんですか？」

訝る望がつい二人に問い掛ける。

「何でも無いさごめんなさい」「」

そのあっけらかんとし過ぎた対応に、望は追求を諦めた。恐らくアシは開けてはならないタイプの箱だ。長年かけて培った望の危機防衛本能が悲鳴を上げている。

「……分かりました。では」

望は佇まいを改める。

「自己紹介をさせて頂きます。俺の名前は世刻 望……こちらは俺のパートナーである」

「レームだ。よろしく頼むぞ」

言葉の先をレームが引き継ぐ。一方の土郎たちもその紹介を受けて己を改め、

「高町家の亭主、高町 士郎だ。よろしく頼むごめんなさい」

「長男の高町 恭也だ。先の無礼、重ねて謝罪させて貰いたいごめんなさい」

「高町 士郎の妻、桃子です。娘を連れて帰って頂きありがとうございます」「  
ございました…こちらも改めて感謝させて下さい」

「長女の高町 美由希です。よろしくお願いします」

美由希は若干苦笑い気味に自己紹介する。

望もつられそうになりながら何とか口元を引き締めて、桃子の出方を伺った。

徐に桃子が口を開く。

「少し、質問したい事があります。よろしいかしら？」

空気がピリツと張り詰める。望はそれを肌で感じながら頷く事で先を促した。

「娘を助けて頂いたそうですが…あれだけの恐怖を抱くような直接的脅威は…この海鳴には無い筈です。主人の元々の仕事柄、そういった事にはある程度精通しているという自負があります」

桃子のその言葉に他の三人も剣呑な目つきになる。それを見ながら望は、やはりこの人達は荒事に馴れているんだなと、少し場違いな感想を抱いていた。

桃子は一息置いて、

「その編目をかい潜り、この街に脅威が近付いた。もしその脅威の正体をご存知でしたら、是非とも教えて頂きたいのです。まずは、それが一つ目の質問になります」

探るような桃子の目に、望は言葉を選ぶ。

「その質問ですが、明確な回答を持ち合わせていない、と答えさせて頂きます」

「それは何故だね？」

その望の回答に、僅かに殺気を込めながら土郎が問いを重ねる。

「今回、そちらのお嬢さんを襲った脅威。その正体を俺達は知っています。しかし、それが人を襲う事はまず有り得ない」

含めるような望の言い方に土郎は眉を潜める。言葉を選ぼうと唇を濡らした矢先、恭也が激昂した。

「ふざけるな！こっちは家族が襲われてるんだぞ！！」

対応の仕方では失格も良い所だが、恭也の言い分は最もだ。大切な娘が襲われて、トラウマになってもおかしくない恐怖を刻まれているのである。

そんな危険な存在の正体を知りながら、その札を伏せる。家族としては到底許容できる物では無かった。

望は激昂を見ながら、これからの対応を考える。ある程度組み上がった所でふとレームを見た。何も言わずにレームは首を縦に振る。

元々の口調も相まって、レーメはこの手の交渉には向いてないのだ。全て汝に任せる、と目で語ったレーメは何も言わずに静かに眼を閉じた。

さて“此処からが本番だ”と望は自らに気合いを入れ直す。どこまで手札を晒し、どれだけ相手に信憑性を持たせられるか。そこが今回の鍵となる。

……永きにわたる旅の中、最初から全ての手札を晒す事の愚かしさを望は知り尽くしていた。

「……それを皆さんに話すには、まず“ある事象”を認めて頂かなければなりません」

真剣な望の様子に、激昂していた恭也も冷静さを取り戻す。

「……聞いてから判断しましょう」

桃子が答える。

その回答に望は頷き、そして口を開く。

「皆さんは“魔法”の存在を信じますか？」

「……………“魔法”？」

「ええ、よくお伽話やファンタジーなんかで語られる不思議な力と

いったイメージを抱くあの魔法です」

「……ふむ、続けてくれないか？」

士郎が思案顔になりながらも先を促す。

「今回、お嬢さんにその魔法の力が襲い掛かったのです」

若干の戸惑いがありながらも、高町家の面々は一応の理解を示した。

「…なるほど？で、先程の“人を襲う筈が無い”というのは？」

恭也の問いに対して、望はレーメへと視線を送る。

「レーメ」

「うむ」

服から外した小さなポーチの中から先程拾った宝石の様な結晶を取り出す。

「それは？」

士郎の問いに望は簡潔に答える。

「まあ、魔法の電池みたいな物です」

レーメが取り出した結晶をしげしげと眺める士郎。不意に結晶を机に置くと、独白する様に呟いた。

「そうか……で、話の筋から察するに……この魔法の電池とやらが娘に牙を剥いた訳だ」

ヒュッ！

唐突な風切音。桃子が慌てて土郎の方を向く。

そこには、何時の間にかとりだした小刀を机に突き立てた土郎と、これまた何時の間にか土郎から結晶を取り上げた望が睨み合っていた。

「……ただの電池とは語弊がありましたね。ガソリンのような、危険を伴う電池なんですよ」

「……失礼したね。中々に血が上っていたようだ」

そう言いながら小刀を仕舞う。剣呑な目つきを更に細めて、土郎は望を試す様に尋ねた。

「ふむ……私からこの流れのまま、ひとつ尋ねる事としよう。今の動き、私ですら捉え切れなかった。先の玄関での動きもそうだ。君のような少年がそれだけの動きを見せる事など、まず有り得ない事を私は知っている………君は一体何者かな？」

「……それは……」

答えに詰まる。この場面においては最もしてはならない悪手だった。だが、この事態そのものが望にとっては今までに未経験である。

望が答えあぐねていると、横からレーメの思わぬフォローが入った。

「それは汝等がまだ知らぬ領域に吾らがいる。それだけの話だ」

士郎の表情に疑念が灯る。

「私もそれなりに“裏”に通じている。先程に述べた通りにね」

その士郎の言葉にレーメは薄い笑みを浮かべる。

「汝の言う“裏”に魔法の様な力があつたか？」

その返しに、士郎は言葉を失う。

「汝の言う“裏”と、吾らの“裏”はその方向性が全く違うのだ。少なくとも、吾らは吾らの裏で生きてきた」

そう言いながら、レーメは冷めた紅茶を口にした。

「……………貴女達は……………」

桃子が何かに耐える様に俯きながら口を開く。

「……………貴女達は、その生き方で……………いいの？」

「“いい”と言う尋ね方がそもそも間違っておるな。吾もノゾムも元より覚悟の上でこの道を歩んでおる」

桃子は縋る様に望を見遣る。

だが、悟る。望の瞳を見て…悟って、しまつ。

疲弊し、傷付いて尚、己の目標へと至らんと足掻き続ける強い意志。全てを受け入れ、それでも進む覚悟。

きつと何度も裏切りにあつただらう。幾度も傷付いて倒れた事だらう。それだけの体験をしてきた事を、その目が何より雄弁に語っていた。

それでも、決めた道ならば。

ならば、桃子には最早出来る事など有りはしない……いや、そんな事はない筈だ。まだ、何かできる事が有る筈だ。

「……貴女達の事情は一応は把握しました。今日はウチに泊まっていきなさい」

桃子が提案をする。

「いえ、そこまでお世話には……」

「いや、私からも頼もつ。是非泊まって欲しい。今の話を聞く限り、行く宛ては無いのだらう？愛しい娘の恩人をそのまま見送るのは忍

びないのでね」

士郎も桃子に賛同してきた。

望は困りながらレームを見る。

「別に良いのではないか？相手のためになるのであれば断る理由は無いし、そもそもサツキ達から連絡が無ければ情報収集以外に吾らがする事など有りはしないぞ」

それならば望には断れない。

嬉しそうに桃子が手を合わせる。

「決定ね。丁度なのはもお風呂から上がったみたいだし、準備してくるわ」

桃子の言葉によって張り詰めた空気は霧散し、和やかな雰囲気が高町家を包む。

その後、なのははその日の疲れや恥ずかしさから寢床へと直行してしまい、末っ子を欠いた一家の団欒に望達も混じって、その日は床へと就く事となった。

「……………僕の扱いがあんまりだ……………」

「……あなた」

「分かってるよ。今夜は徹夜だな」

差し出されたる蜘蛛の糸

手繰った先には果たして仏か

搦めし女郎は何を思い

夜明けを待つは星ひとつ



第5章 く家族への誘いく（前書き）

更新速度が落ちた……（、；、；、）

それでもでも頑張っていきます。

ではお楽しみ下さい。

## 第5章 く家族への誘いく

「.....」  
.....  
.....は？」

「だから、戸籍よ戸籍！高町家へようこそ、高町 望くん！」

朝一番、嬉しそうに桃子が望に話しかけて来た内容がコレである。  
ちなみにレームは久々のベッドにご満悦らしく未だに夢の中で羊を  
数えている。

桃子曰く、

世刻 望の名前を徹底的に調べた

が、そんな名前の人間は存在しない

いないのなら作ってしまえ。

折角だから高町家の養子として戸籍登録してしまえ。

戸籍獲得成功 今ココ

「ちょっと待って下さい!!」

「あら、どうしたの？」

桃子は何か手落ちがあったのかと、少々考え直す。

「あ」

そして思い当たる節へと辿り着く。

「望くんの旅の仲間だったわね！大丈夫よ、呼んで貰って問題ないわ」

「違います!!」

言われて桃子は再び首を傾げる。

「……？」

望はその様子に若干の苛つきを覚えながら、桃子へと質問を投げかける事にした。

「戸籍を作った理由は？」

「望くん達が此処で動くのに何かと便利でしょ？」

「何故、姓を高町に？」

「望くん達の歳だと後見人より養子の方が自然でしょ？」

「…見た目通りの年齢だと思ってます?」

「まさか、昨日の交渉術を見てそうは思わないわ。理の“裏”で生きていく以上、そんな事もあるんでしょう。でも今の貴方は子供なのよ?」

それを言われるとぐうの音も出ない。

仕方なく望は最後の質問を繰り返した。

「……繋ぎ止める為ですか?」

「ええ」

悪びれも無く桃子は即答する。

「…貴女達へのメリットが見えない…!」

吐き捨てる様に望が言う。

そんな望の頭に桃子は手を置きながら、諭す為に言葉を紡ぐ。

「…私達にメリットなんて要らないのよ。こんなのは只の自己満足でしかない…でもね?そんな自己満足が何物にも替えられない幸せだと思ってる人もいる」

言われて、気付く。自分達の旅も、半分は自己満足に塗れているのだと。

「ずっと旅して来たんでしょう？だから、少し羽根を休めなさい」

桃子の言葉に頷きかけ、望はそれでも首を横に振る。

「……お気持ちは嬉しいです。けど……俺にはまだ、この世界でやるべき事がある」

そんな望の言葉に桃子は肩を落とす。

「だから、羽根を休めるのはやるべき事を終えてからにさせて下さい」

「……！！……ええ、こちらからも是非お願いするわ！」

一転、満面の笑顔でもって望の言葉を受け入れた。

「……うみゆ………ノゾム？」

レーメが寝ぼけながら台所へと入って来る。望と桃子は顔を見合わせ、互いに笑い合った。

「……望くん？」

「いえ、桃子さんの口からお願いします」

そう言って望は台所を後にする。

「そうね、じゃあそうさせて貰うわ……あのね、レーメちゃん………」

…」

~~~~~

「

………は？」

直後、高町家に二人分の笑い声が響き渡るがそれは別の話。

~~~~~

携帯電話のアラームで目を覚ます。

「……う」

朝はやっぱり眠い。どう足掻こうとこの眠気には勝てはしない。

それでもなのは無理矢理に体を起こすと、彼女の一日を始めるべく身仕度を始めた。

「…あれ？」

ふと、彼女は違和感を覚える。

おかしい、何かを忘れている。

違和感が徐々に強くなっていき、なのはは周りを見渡した。

見慣れた机、ついさっきまで寝ていたベッド、まだ空きスペースが多い本棚、その本棚の上に乗ったルビーの様に紅い珠……

「あっ！！！」

パジャマを脱いだ瞬間に目に入ったそれを掴み、慌てて庭先まで走る。

「あら、なのは？」

「ん？おお」

「ああ、おは…」

誰かが何か言っているがそんな事も気にならない。なのはは庭先に顔を出してその名前を口にした。

「フェレットくん！！！」

だが、返事は無い。まさかそのまま姿を消したのか？

だったらこの宝石は回収しないと駄目な筈だ。思わずなのははその場でぺたりと膝をつく。

……………？

妙に足元が湿っぽい。いや、じめじめしているといった方がしっくりと来るだろうか。気になったので、そつと軒下を覗いてみる。

そこには、

すっかり腐った生物ナマモノが横たわっていた。

「いいんだよもう……………僕は才子要員で弄られキャラとして位置付けられたんだ……………弄れよもう……………上も下も前も後ろもさあ……………弄ってもほじっても何も言わないからさあ……………」

「……………えつと……………フェレット……………くん……………？」

「ああ……………おはようございます……………貴女は前を弄りますか？それとも……………後ろをほじりますか……………？」

「……………十二言ってるのかわかんないよ……………？」

その後、なのはがユーノの説得に十分程かけて何とか軒下から連れ出すと母親である桃子から改めて声が掛けられた。

「おはよう、なのは」

「あ、お母さん！おはよう！」

「あのね、なのは…」

「構わんぞ、モモコ。吾らから言っただ方が分かりやすかるう」

余り聞き慣れない声が母の言葉を遮る。桃子の横に視線を移すと、昨夜に出会った少女が立っていた。

「おはよう、だな。吾の名はレーメ。今日からこの高町家で世話になる事となった。今後ともよろしく頼むぞ」

言いながら右手を差し出す。なのはも連られて右手を出し、

「今日からなのはの新しいお姉ちゃんになるのよ」

桃子からの爆弾発言を聞いて飛び上がらんばかりに驚く。

「にゃっ！？お世話ってそっちの！？」

「まあ、そついう事だな。よければ汝の口から名前を聞かせ願いたい」

レーメはそうなのはに言ったが、当人はそれどころではない。

昨夜の恐さやら恥ずかしさやら憧れやらで頭の中が飛びかけていて、名前を尋ねる部分を辛うじて聞き取れただけである。

「あつあ、えつと…！た、高町つにゃのひやでっ！あっ…！？」

噛み噛みになった自己紹介をやり直す為に深呼吸を繰り返す。

が、

「うむ！ニヤノヒヤだな。よろしく頼むぞ、ニヤノヒヤ！」

満面の笑み（悪意6割）を浮かべたレーメがなのはの固まった右手を取る。しばらくはそれで呼ばれそうだ。

ふと、それは唐突にやって来た。

今、目の前にいるのは？

昨夜助けてくれた人だ。

昨夜、この人は一人だったか？

否、二人組でいた。

では、そのもう一人とは？

私を救ってくれた王子様だ。

話の流れから察するに？

.....

油の切れたゼンマイの様に首を横へと回す。

すると、

そこには、

「おはよう、昨夜は自己紹介できてなかったね。俺の名前は……今日から、高町 望だ。よろしくね、なのはちゃん」

王子様が右手を差し出してくる。

そこがなのはのキャパシティの限界だった。

「%\* !ゞ」

「……なのはちゃん？」

「+ ?」

「……桃子さん？」

「……………私にも予想外ねえ……………」

望は桃子に視線を送るが、冷汗をかきながら眼を逸らされた。

望は溜息をひとつつくと、レーメへと向き直る。

「……………どうする?」

「とりあえず叩けばよからう」

言いながらレーメはなのはに近寄り、その頭をはたく。

「……………つたあ!」

「ほれ、目覚めたぞ」

「……………まあ、いつか」

「……………あれ?キミは……………」

再起動を果たしたなのはが改めて望へと向き直る。その視線を受けた望は軽く咳ばらいをすると、もう一度自己紹介をした。

「改めまして、今日から高町 望です。今後ともよろしくね」

「あ、高町 なのはです……………今後ともよろしく……………望くん……………」

まだ完全には動いてないらしく、どこか虚ろな様子だ。流石にこれ以上は学校に差し支えるため、桃子が手を叩きながら大きめの声で

なのはに指示を出した。

「はい、なのはもいい加減シャキツとなさい！」

「にゃっ！はいなの！」

「あと！その格好！いくら望くん達が今日から家族になるとはいえ、少しだらし無いわよ！」

瞬間、なのはの刻は凍る。

スツと、何気なく視線を下げて自分の姿を確認する。

キャミソール一枚に可愛らしい白のパンツだけを纏った自分の姿を。

「……………」

なのはは完全な無表情と化す。

そして肩幅に脚を開き、自然な体勢をとりながら視線は斜め上四五度を向く。

「…すううー…」

大きく息を溜め、気を限界まで鎮める。



## 第6章 く或る少女の目醒めく（前書き）

先日、レーメの一人称を訂正し、それに伴い一部加筆致しました。報告が遅れてしまい申し訳ありませんでした。

どうも、作者です。

感想板にて「望が弱すぎないか？」とのご意見を頂き、それについての説明を<sup>イイワケ</sup>させて頂きたく思います。

まず望の強さですが、「時間樹への影響を抑える為に神性強度を）強制的にレベルを）下げる状態」です。

なので、現在の望のレベルは1.2前後、オリハルコンネームは無い状態まで弱体化しています。

………単に一方的すぎる無双が嫌いなだけです、はい。

力はストーリーが進むにつれて戻っていかせる予定なので気長にお待ち下さいませ。

では、少しだけではありますが、お楽しみ下さい。

## 第6章　く或る少女の目醒めく

「行ってきます！ー！うわーん！ー！！」

あの後、いつもより格段に遅い時間になってしまったのはだが、家族の誰もが驚愕する速度で顔を真っ赤にして泣きながら走って出て行ってしまった。

あの速さなら間違いなく間に合うだろう、とやや呆然としながらものはを見送り、高町家は普段の穏やかさを取り戻す。

くくくくく

「翠屋？」

「ええ、私達が経営してるの。だから家の中には誰もいなくなるから…出来れば一緒に来て欲しいんだけど…」

言いにくそうに桃子が望へと相談する。

「俺は別に構いませんよ。レームは？」

「うむ、吾も行こう」

それならばと、士郎が提案する。

「だったら、午前中はまだ客足も少ない。その間に昨夜話してくれたアレについて、もう少し詳しく教えてくれないか？」

「……そうですね。ですが、これだけは約束して下さい。それらしい物を見かけたら、絶対に手を出さずに俺に教える事。あれはヒトの手に負える物じゃない」

「…分かった。善処しよう」

「善処ではありません。『絶対』です」

やや語気を強めて望は念を押す。士郎はそれに気圧されながらも了解の意を示した。

「いやわかった。約束しよう」

その返事を聞き、望は威圧を解く。その間に桃子の準備が終わったらしく、士郎達を呼ぶ声がしていた。

「詳しい話は、行ってからにしましょう」

望はそう言つと、レームを呼んだ。

望の外見にそぐわない迫力に、内心冷汗をかいていた士郎は思わず一息ついていた。

そんな士郎を尻目に、望はレーメにある事を伝える。

「アレの詳しい説明をする。だから一緒に持って行ってくれ」

「吾は構わんが……」

レーメは士郎達を見遣る。その目は少し胡乱気だ。

「あの人達が何故神気を持つてるのかもついでに調べる。どっちにしろ必要だ」

「…分かった」

皆で、翠屋へと向かう。

一日が、始まる。

~~~~~

『……これで粗方の説明は終わりですね。何か質問は？』

『…特には無いな』

昼も過ぎ、店の中の盛況ぶりも随分と落ち着いた翠屋で、望は話の内容を鑑みて一郎と筆談で会話をしていた。

ここからは核心には触れないので、一郎は普通に声を出す。

「…しかし、俄には信じられんな」

「…得てしてそんな物ですよ」

「己が知らないだけの世界などいくらでも存在する。たまたま今回はその一端を垣間見ただけの話だ……汝とて分かっぺおろつ。そんな世界を見た時の対処法など、な」

アンタツチャブル。

レーメは言外にそう告げていた。

「そつ……か……」

やや肩を落としながら一郎は呻く。裏の世界でその名を轟かせた『不破 一郎』が、自分の無力を久々に突き付けられたのだ。その悔しさは計り知れない。

「ならば……君に託す他に手は無いのか」

「……………ええ、元よりそのつも……ッ……!」

…キーン………

昨夜のあの感覚が再び訪れる。跳ね上がる様に立ち上がった望は己の相棒を見る。

「レーム、行くぞ！」

「うむ！」

弾かれた様に飛び出した二人を眺める事しかできない土郎は静かに拳を握り締めた。

~~~~~

グルルルルル………

少女が昨夜の悪夢を思い起す。

「あ、あう………」

「なのは！気をしっかり保って！！」

ユ一ノが檄を飛ばしてもなのはは呆然と突っ立ったまま、小刻みに震える事しか出来なかった。

ゴオアアアアアアアア！！

「ひっ！！」

黒い獣の咆哮に、なのはの身がすくむ。

昨日のソレよりも更に具体的な形を以ってなのはに迫る異形は、無理矢理例えるのであれば犬に似ていた。

その獠猛なる牙は目の前の存在を噛み砕かんと、なのはへ迫る！！

「……………けて……………」

「なのはッ！！」

「…たす…けて…………っ！！」

そして、恐怖に身を侵され切った彼女の胸に去来するのは昨日の光景。

さらに恐怖へ割り込んで来るのは、死に瀕しているにも関わらず、己の芯を甘く痺れさせる切ないナニカ。

でも、

それでも、

怖い物は、怖い。

つつい昨夜に寄り掛かった、その背中を求めてしまう。だがそれは仕方がない。

どれだけ背伸びをしようが、

どれだけ気丈に振る舞おうが、

まだ私は十年すら生きていない一人の小娘なのだから。

だから、今はまだごめんなさい。

ゴギーン!!

お父さん、お母さん、お兄ちゃん、お姉ちゃん……………

なのはもうちょっとだけ、ワガママです。

「…昨日に続いて二回目だね。大丈夫かい？」

~~~~~

「レーメ、なのはちゃんにオーラシールドを張りながら下がっててくれ」

望の指示にレーメは首を傾げる。

「む？そんな回りくどい事をせずとも…」

「俺達はまだコイツの原因を全くと言って良い程に知らないんだ。折角だから少し探りを入れてみたい」

「そういう事なら了解だ。周辺は結界が働いておるから心配するな  
得心の行ったレーメはなのはとユーノを連れて、望の邪魔にならな  
い場所まで下がる。」

それを見届けた望は正面に向き直ると、その手に掲げた黎明を軽く  
振って黒い獣を弾き飛ばした。

「さて……ある程度解析するまではマラソンマッチか……まずは手  
加減の基準からだな」

グウルルル……

先の振り払いを受けた獣が警戒の姿勢を見せる。

「ノゾム、そやつ……ある程度知性があるらしいぞ」

「ああ、多分中身の影響が出てる分も少なからずある」

レーメと言葉を交わしながらも、その身に一切の隙は無い。

そんな中、ユーノが望へと忠告する。

「望さん、気をつけて下さい！そのジュエルシードはこの星の原生  
生物を取り込んでいます！」

「ゆ、ユーノくん！？喋っちゃっていいの!？」

「なのはが気絶してる間にね、だから大丈夫だよ」

「うむ、だからニヤノヒヤはなんの心配もせずとも良い」

「にゃのひゃじゃなくてな・の・は!!!ちゃんと呼んでなの!!」

半笑いになっているレームに顔を赤くしながらなのはが詰め寄る。

「うむうむ、程よく緊張は解れたな。改めて、大丈夫か？ナノハ」

「え?.....あ...」

レームに言われて、気付く。

先程の恐怖は、既がない。

「...うん、大丈夫なの...ありがとう、レームちゃん」

小さく、零すようにか細い声。やはり面と向かわれると恥ずかしい物があるのだろう。

「うむ、吾はこれからノゾムのサポートをせねばならん。吾の後ろに居ればあやつの脅威は届かぬから、そこを動かでないぞ」

その言葉を聞いて、なのはは安心すると同時に、何か言い知れぬフタカマ蟠りを感じた。

そして、なのはは望を見る。

~~~~~

ズダァン!!

獣が石畳に叩き付けられ、のたうち回る。

その様子を見ながら望は冷静に戦いから得た情報を整理する。

(…形態から考えた限り、取り込んだ動物は犬か、実体を持ったが故にパワーを得たが、痛みも反映されるらしいな)

ドゴォッ!!

望の手に黎明は握られてはいない。この程度なら黎明は必要ナシだろうと既に収めていた。

今は相手のデータ採りの為に軽く仕掛けながら相手が来た時に柔術でカウンターを繰り返している。

流石に獣だけあってフットワークは軽いが、節がある為にその動きは読み易い。

バチィン!

そんな均衡が続く中、レーメから声が掛けられる。

「ノゾム！判明したぞ、そやつが内包しておるのは『星の導』だ！」  
「了解！こつちもだいたい知りたい事は判ったからな、そろそろ止めだ！」

得たい情報は大まかではあるが入手した。

後は無力化だけだ。

望がそう思いながら黎明を引き抜こうとした瞬間、

「リリカル・マジカル！！」

謎の掛け声が、響いた。

そして少女は動き出す

その胸の内をさらけ出し

響く言葉は勇気の証

届ける相手は



第7章 く高町なのはは揺るがないく

魔物をやっつけてくれた、王子様がいた

私を助けてくれた、王子様がいた

でも、私では王子様を、守れない

私では王子様を支えられない

そんなの、いやだ

守られるだけは、嫌だ

ただ足を引っ張るだけは嫌だ！

だから、あの言葉を思い描こう…

だから、その言葉を刻み込もう…！

不屈の心は、この胸に  
！！

~~~~~

「それは、昨夜の!?!」

レーメが自分の真後ろからの光景に驚きを露にする。

「守られてるだけなのは嫌だから!」

「なのは!彼に任せた方が!」

「私だって望くんの力になりたいの!」

こうなってしまうては止められない。何処か望に通ずる頑固さを見せるなのはに、思わずレーメは肩を落としながら呟いた。

「案外…望との相性は良いのかも知れんな……」

そう言ってる間にもなものは魔力を練り上げる。その魔力に、レイメはどこかチリチリした物を首筋に感じていた。

くくくくく

思いが、足りない。

力が、足りない。

悔しくても、今は雌伏の時だ。

新しい力に先達がいた。

ならばその力を、自分だけの目的に振るえば良い。

新しい可能性は掴まれていた。

ならばその可能性を、自分で創ってしまえば良い。

目的は出来た。可能性はこれからだ。

だったら後は、踏み出すだけ。

覚悟は、いらぬ。

いるのは、勇気だ。

「リリカル・マジカル!!!」

~~~~~

「!?!?これは!」

光の帯が獣に伸びる。若干の驚きを持ちながらも、望は獣と距離を取った。

ゴアアアアアアアアア!

桜色の帯は獣へと十重二十重に絡み付く。それを見ながらも望は昨夜の光景を思い、隙は見せなかった。

ギ……ギシ……ギッ……!!

「…?」

昨夜の物とは明らかに質が違う。昨夜より格段に堅い。そして…

「…ッ!？」

僅かに感じる、神剣の気配。

「……………どういう事だよ……」

力の流れは極々微弱。微弱ではあるが、確実な神剣のソレに、望は呆然とする。

ギリ…ギリ……………ギシッ!!

その間に、戦いは終局を迎えようとしていた。

「ジュエルシード、ナンバーXVII!封印!!」

《Sealing》

なのはが構えていた杖から電子音声が響き、獣が徐々に消滅していく。

中から出てきたのは小型犬だった。

「なんと…あれ程に小さな犬だったとは……」

近付きながらレーメは感嘆ともとれる言葉を発する。

「…なあ、レーメ……」

「……皆まで言うな。吾も混乱の渦中におるのだ……」

望たちの疑問に、未だ解決の糸口は無い。

~~~~~

ごっんっ！

「ったあーい！！酷いと思うの！」

とりあえず望はなのはに拳骨を見舞う。

ぱかんっ！

レーメもそれに倣いなのはの頭を八タいた。

なのはも最早涙目である。

「なんであんな無茶をしたんだ！」

「ナノハ！流石にアレは看過できた物ではないぞ!？」

「だって……………」

望とレーメから同時に詰め寄られる。

「望さんもレーメさんも、許してあげて下さい。なのはだってきつと力になりたかつたんですよ」

ユーノがなのはの擁護に回る。

「…ならば…仕方ない……………か？」

渋々とレーメが矛を収めかける。

「……………だって…!」

「「「?」「」」

しばらく俯いたまま、動かなかつたなのはは、いきなり望に詰め寄ると二人へと思いの丈をぶつけた。

「守られるだけは嫌なの!私だってお手伝いぐらいは出来るの!だから私だけ仲間外れしないでなの!!!」

「……………ッ!」

望が片手でなのはの胸倉を掴み上げ、そのままなのはを宙吊り状態にする。

「望さん!？」

「黙ってる!!！」

ユ一ノが思わず望を制止しようとするが、それ以上の剣幕で返される。

「俺達は君が危険な目に遭わないように動いてるんだ!それでも君が万一の場合に備えられる為だと思うって、君にその杖を持たせたままにした!!！」

「確かに怖い!!でもこんな怖い目に遭うのが、なのはだけじゃ無いって思ったらもつと怖くなったの!だからっ!!！」

「仲間外れにするなだ?!?遊び感覚じゃ無いってんなら…そんな事が言える筈ないだろう!!！」

望は一息つき、改めて両手でなのはの胸倉を掴み上げ、吠える様に告げた。

「昨日今日で力を手に入れただけの餓鬼が、戦いを舐めた口を利くな!!！」

軽くとはいえ、殺気をなのはに叩き付ける。たったそれだけでなのはは何も喋れなくなった。

「ノゾム、程々にしておけよ。ナノハはまだまだこれからの子供なのだ」

「…分かってる……でもキッチリと線引きをさせないと後が厄介だ」  
レームが一応は、と望に釘を刺しておく。

「あ、あの…わたしっ…！」

なのはの絞り出すような言葉に、漸く望は手を離す。地面にへたり込んだなのはにユーノが駆け寄る。

「…熱くなつてすまない、なのはちゃん。でも…これだけは覚えておいてくれ。“力は振るう為の物じゃない”……」

「……………」

なのははその場に座り込んだまま動かない。

そしてそんななのはを見ながらも、望は青い結晶へと近寄る。それに待ったをかけたのはユーノだった。

「待つて下さい！！それは危険なんです！昨日も貴方達が回収したみたいですが、それは何も知らない人が扱うべきじゃない」

その言葉にレームが呆れて溜息をつく。

「イタチよ……その言葉、そのまま汝に返ってくるぞ？」

「え…？」

「では聞くが……これは何なのだ？」

「何って……とある遺跡から発掘された願望を叶える失われた遺産、ロストロギア・ジュエルシードですよ」

「違う」

ユーノの説明を望は一言で切り捨てる。

「何を言ってるんですか！ 専門家が見立て、文献を参考にして調べ上げた結果なんですよ!？」

「その文献からして既に違っておったのだ。これはそんな物ではない」

レームが手の上で結晶を転がしながらそう言う。

「なっ……じゃ、じゃあ貴方達はそれが何か知っているんですか!？」

「ああ、知っておるぞ」

レームは望に視線を送る。

「まあ、その程度なら話しても問題無いか……レーム、俺から説明する。お前はなのはちゃんをフォローしてあげてくれ」

「うむ、こちらは任せておけ」

レームはなのはを抱き起こし、その場を後にする。

恐らく高町家が翠屋に帰るのだろうとぼんやりと考えた。

「やて…」

一息、

まず切り出したのはユーノだ。

「この結晶、遺跡発掘や探索を生業としているスクライアー族が判断した物です。でも貴方はそれを真つ向から否定した……では問います。これは一体何だと言つのですか？」

望の様子は変わらない。先程の事もあつてか若干不機嫌そうな雰囲気纏つてはいるが。

そして、望の口から語られる。

「これは」

世界の正体の、極々僅かな片鱗が。

「これは…“パーマメントウィル”………大いなる器より零れ落ちた、神々の意思の結晶だ」

~~~~~

「ナノハ……そう気を落とすでない」

帰路に就きながら、レーメはなのはへと語りかける。なのはは神社の境内から黙ったままだ。

「……………」

「のう……ノゾムも悪気があってあんな事を言っておる訳ではない……そこは理解してやってくれ……」

少し切なげにレーメは言う。

……かつての神剣宇宙の旅の中、望まぬ戦いを強いられた子供や、強制的なオリハルコンネームの覚醒によってエターナル同士の戦いに利用され、訳も解らぬままに死んでいった幼い命を思い、レーメは沈痛な面持ちになる。

その度に望は一つひとつの命に涙を流し、集められる限りの骸を集めてはそれぞれに墓標を刻んでいた。

あの時の己を全て押し殺した虚ろな瞳が、レーメには耐えられなかった。

きつと望は、何も知らない命が戦いに晒される事を極端に嫌うのだらう。

「……が」

「ん？」

ずっと俯いていたなのはが口を開く。

「なのはが……弱すぎるから……何も知らないから……怒られたの……」

「それは違うぞ、ナノハ。ノゾムは戦いが何かを知らぬままに、命の危機を伴う場に踏み込んだ事を叱っておったのだ」

優しくレーメは諭す。これからは不用意に首を突っ込まない事を約束させる為の言葉を紡ごうとした瞬間、

「じゃあ、戦いが何かを知れば良いの」

「……はえ？」

予想の遙か彼方を素通りした言葉がなのはの口から出てきた。

「戦いが何か知らないから望くんは怒ったの。なら、戦いが何かを知れば望くんはきつと怒らないの」

「いや、あの…」

「なのはは諦めないの。レーメちゃん、よかったらレーメちゃんにも色々教えて欲しいの」

「だからな、ナノハ…」

「力が足りないなら、特訓するの。望くんには追い付けなくても、せめて足を引っ張らない様に」

その言葉を聞き、レーメは悟りの境地へと至る。空を見上げ、シリアスを展開しているであろう望を想い、。

「……ノゾムー……こやつは想像以上のタマだぞー……」

やがて翠屋が見えると、なのはは勢い良く駆け出す。レーメが慌てて後を追う。

「不屈の心は、この胸に！なの！！」

「いきなり何を言っておるのだ!？」

レーメが何が言っているが、今のなのはには聞こえない。勢いそのままになのが翠屋へと駆け込んだ。

「あら、なのは？随分と…」

「お父さん!!」

「ん…なんだい？なの」

「戦いを教えて欲しいの!!」

…その日、海鳴市では震度二の地震を観測し、とある喫茶店の窓ガラスが割れる被害を出した。

少女の信念は揺るがない

覚悟が無くとも勇気を剣に

彼の元へと向かわんが為に

さあ、物語を始めよう

第7章 く高町なのはは揺るがないく（後書き）

気が付いたら2000ユニク、PV10000突破しました。

…無印終了辺りだと予測してたんだが……

皆様に最大限の感謝を送りつつ、今回はここまでにさせていただきます。

願わくば次回も皆様のお目にかかる事を祈って……

第8章 く片鱗の真実、世界の正体く（前書き）

ひっひっふー、ひっひっふー……

今回は難産でしたねー！（挨拶）

作者です。

間が空きすぎて申し訳なさがフルバーストです。

でも楽しんで頂けるなら、やっぱり幸せな気分です。

では、お楽しみ下さいませ。

## 第8章 く片鱗の真実、世界の正体く

「…神の…意思…?」

「ああ」

ユーノの呟きに望は同意を示す。

「そんなの…聞いた事ありませんよ」

「確かにそうだろうな。真っ当に生きてる人間であればその名を知る事も無いから」

何の事は無いといった風に望は飄々と言う。流石にユーノも訝しげになる。

「なら、何故望さんはその事を知っているんですか?」

「あ…そこに近い位置に居たから…かな。一応コレはトップシークレットの部分に当たるからそんなに深くは聞かないで欲しい」

「神に近い所に?…それこそ眉唾モノですよ。信じろってのが無茶です」

ユーノの言葉を受けて望は先程の剣幕が嘘の様に困った表情になる。

「…とりあえず『そういう物』だっていう知識として持っておい

てくれ。他言は無用で頼むよ」

「…仮に貴方の言う事を事実とするなら」

今までの話を聞きながらユーノは望へ質問をぶつける。

「どうして『神』の結晶なる物が『神でないモノ』に反応したんですか？」

「……それは…」

答えに窮する望。

望自身すら先日知ったばかりの為に、ユーノの疑問を晴らす解答を持ち合わせてはいなかった。

しかしそこに、全く唐突に助け舟が出される。

「それはこの世界に存在する生命、それらの一部に『神の欠片』が内包されているからです」

突然の声。未だレーメの張った結界は有効な筈。そんな空間への闖入者に望の視線は吸い込まれた。

「誰ですか!？」

ユ一ノが警戒心を全開にしながら、声を発した者へ向き直る。

そして望はその者を見ると意外そうに小さく呟いた。

「ナルカ……いや、イルカナか……？」

望が闖入者……小柄な黒髪の少女を見て呟くと、その少女は小さく微笑んで返答した。

少女の名前はイルカナ。ナルカナの一部から切り離され、それが独立した意思を持った存在だ。『とあるきっかけ』を境に顕現し、ナルカナが存在を認めて自らの想いを確信してからは、必要に応じて生み出せるナルカナの分身としての役割を担っている。

「『イルカナ』としてはお久しぶりですね、望さん」

望はそんなイルカナに軽い笑みを浮かべる。

「そうだな……久しぶり、イルカナ。で、今のイルカナはナルカナとリンクしてるのか？」

「いいえ、つい先程切りましたよ」

「……なんで？」

半眼になりながら望は尋ねる。

「だって、こんなに可愛くなった望さんを見たナルカナの反応が自分で見れないなんて……面白くないじゃないですか」

チロリと小さく舌を出し、可愛らしい仕種で望に向き直る。望はそれに頭を抱えながら小さく零した。

「……相変わらずの小悪魔ぶりです……」

「褒めても何も出ませんよ？」

褒めてねーよ。

突然イルカナが少し内股になり太股を擦り寄せる………って

「あつ……でも……ちょっと……出てきたかな………んっ」

「何がだ!?!」

「ナニって勿論あ……」

「言うな!?!言うなよ絶対!?!」

デメエこのSS18禁板に送りてえのか!?!

「んふっ、ちょっとした冗談じゃないですか……んっ」

「嘘つけえ!?!」

「…くすっ、その彼の為にもこの辺にしておきましょうか……」

妖艶な笑みを望に送りながら若干前屈みのユーノをちらつと見る

「えうあう!？」

バタバタと慌てた様に手を振るユーノ。悪戯な笑みに戻ったイルカナはくるりと一回、その場で回る。

「悪ふざけはそろそろ止しましょう。先の話に戻りますね」

イルカナが表情を引き締める。望たちの表情も自然と厳しい物へと変わった。

「まずはその……イタチさん……?の質問ですが……」

「……………もうイタチでいいです……………」

あ、コイツついに投げやがった。

「…この世界の住人に、たまたまソレを扱う才能が備わっていた……  
今はそう理解しておいて下さい」

「いや、でもそんな……」

「貴方が我々を信頼していない以上、これ以上の問答に意味はありません」

イルカナがユーノの言葉をピシヤリと断ち切った。確かに一理ある

と考えたユーノは渋々ながらも引き下がる。

「望さん……………」

「いや、その前に」

言いながら望は軽くフィンガースナップをする。

「レーメが張った結界の強化をした。これで隠匿は大丈夫だろう」

(！？…魔法陣も展開せずにそんな真似を?)

決して言葉には出さず、しかし内心では戦慄に震える。

「ええ、ですが…彼は聞かせて大丈夫なのでしょうか…?」

イルカナはユーノを見た。思わずユーノは身構えようとするが、その前に視線を外される。

「ある程度関わっちゃってるし、核心に触れなきゃ大丈夫だろうけど…」

「…あまり大丈夫ではありませんね。この話は核心に触れてしまいます」

「そうか……………」

どうしたものかと首を傾げる。結界の張り直しをしようにも、イルカナのこの様子だと気付く者がでてしまう可能性がありそうだ。

隠密性ではレーメに一日の長がある。イルカナは『何かと派手な』ナルカナの分身体なので、実は隠密は苦手分野だったりする。

軽い沈黙を守っていたイルカナが、徐オモムロに口を開く。

《……そうですね、こちらの言葉で話します。これなら理解されないでしょう。大丈夫ですか？》

イルカナのその小さな唇から紡がれた言葉は、ユーノにとって全く未知の体系の言語だった。

人では決して届かない高みに在り、尚且つ時に扱う者への強制力すら有する言霊の極みとも言える言語。

それは、神剣言語と呼ばれている。

「????」

ユーノは突然に発された謎の発音に混乱していた。

《……精神への直接的な呼びかけじゃ駄目なのか？》

訝しみながらも望も神剣言語を話す。

《その手の物は世界によっては盗聴される可能性があります。得策とは言えません》

《そうか……で、ナルカナが直接出向かずにお前を使ったんだ……  
…いや、ナルカナだから十分有り得るのか…面倒臭い」とか思いつ  
きり言っただし……》

《……ナルカナは根源回廊に潜って一日も経たない内から十五分お  
きに貴方の名前を呼んでますよ？》

この男は……、といった様子でイルカナはやれやれと首を振る。だ  
が、昔から言わないと分からない男だったと改めて実感し、何かを  
悟るとイルカナは思考の海にダイブしかけた望を現実に取り戻す。

《望さん、続けますよ？》

《…あつ！ああ、済まない》

コホンと軽く咳ばらい。イルカナは話し始める。

《この時間樹には、致命的なバグが存在しています》

《ああ、それは来てすぐに思い知った……具体的な内容が判明した  
のか？》

イルカナがはい、と軽く頷く。

《ナルカナと沙月さんがログ領域から情報を収集していく内に、あ  
る事実が判明しました》

《うん…？》

次の瞬間に発された言葉は望の想像を遙かに超えた物だった。

《この時間樹にはエターナルは愚か……転生体すら、いませんでした》

《……何だって？》

《更に言えば、この時間樹には殆どと言って良い程に……神剣が……無いんです……》

少女は語る、歪みの片鱗を

少女は語る、真実の一端を

少女は語る、世界の在り方を

少年は決める、守るべき何かを

第8章 く片鱗の真実、世界の正体く（後書き）

さて……………

すーぱー投石タイムですね。

ここからはリリカルとなるかなの融合を謀る為の（タグにあった）設定改変を随所に盛り込んで行きたいと思います。

両原作ファンの皆様には首を傾げる場面があるかも知れませんが、生ぬるい視線を送って貰えれば幸いです。叩かれるのは慣れてません……………

では次回も、当SSを開いて頂く事を祈りつつ……………

第9章 へ 遙か彼方の……へ (前書き)

サブタイトルに意味はありません……

今回は説明ばかりですね。あんまし面白くないかと……

第9章 遙か彼方の……

《神剣が……無い……？》

《……言い方に少し語弊はありますが、概ねそれで構いません》

望は呆然と立ち尽くす。イルカナのフォローを受けても衝撃は抜けていないらしい。

《……ちょっと待ってくれ、例え苗木だろうと時間樹は時間樹だ。管制人格も無しにどうやってその身を維持してたんだ……？》

《エト・カ・リファの時もそうでしたが、ある程度、管制人格が軌道に乗るまで時間樹の育成をすれば、後は休眠しても維持に問題ありません……ただ……》

《……ただ？》

イルカナが軽く間を置く。それに望は何か嫌な予感を感じながら先を促した。

そして、その予感是最悪の形で以て望を打ち砕く。

《この時間樹の管制人格たる神剣使いは休眠をせずに『自らを滅ぼ

して細分化し、その身を時間樹の内部に溶け込ませた』らしいので  
す》

その言葉に望は息を呑む。

《そんな!?!》

《不可能、ではありません。神剣による自殺ならエターナルである  
うと起こり得ます。ログ領域の情報を読み取るに、その神剣は…天  
位神剣第三位に属していました…》

望の混乱は悪化の一途を辿るのみである。本当に何が起こっている  
のか、いくら何でもイレギュラーが多過ぎる。

《…エターナルが自らを滅ぼした……時間樹の護り手も遺さず…  
?》

混乱しながらも望は首を傾げ、その一点に注目する。

神の尖兵である『ミニオン』や『エターナルアバター』の様な存在  
は時間樹である以上、維持や抑止に必要な物であり、ある程度確保  
して然るべきなのだ。

イルカナの様子を見るに、そのようなモノから襲撃を受けた様には  
見えない。

《ですが、事実としてそのエターナルは滅びています……この時  
間樹に途徹もない歪みを作り出して、ですが》

《歪…み…》

まだ何かあるのか、と望は半ば絶望交じりに呟く。

しかし、次にイルカナから紡がれた言葉が全ての謎の『答え』であり時間樹の歪みの『元凶』だった。

《そのエターナルが自滅した時期が早過ぎたのです。時間樹は未熟で、自らを維持するシステムすら確立しないままにエターナルを受け入れた。その結果として……》

そこまで言っていてイルカナは一度心を鎮める為に胸元に手を置いた。

深呼吸を一つ、望に向き直る。

《……時間樹に『神剣使いは吸収すべき栄養分である』というプログラムが生まれ、この時間樹に存在する神剣使い達を吸収し始めたのです……》

~~~~~

一部の窓ガラスが粉碎されたとある喫茶店の中、複数の人間が何やら重苦しい雰囲気を感じながら話しこんでいた。

「ナノハ…考え直す気はないのか…?」

半分諦めながらも一応はなのはに尋ねてみるレーメ。

実は四回目の質問だったりもする。

「決めたもん!」

こちらも四回目の全く同じ返事を寄越す。高町なのはという少女は、本当に決めた事には完全に意固地になるらしい。ずっとこの一点張りだ。

眉間を押さえながらレーメは視線をなのはの右横に移す。

「シロウよ…どうにか…」

「ななのははがががたたたた戦いをををしえてて」

「…ならんな」

壊れたラジカセの如く言葉を操るのはなのはの父親である高町 士郎。

かれこれ約三十分前からこの調子である。

「モモコよ…何か知恵は無いか?」

「うーん…私が言うのも何だけど…こうなっちゃったらねえ……」  
苦笑いしながら返すのは土郎の妻、桃子。彼女はなのはの母親であるが故に、なのはの頑固さは骨身に染みている。

「「はあ………」」

桃子とレーメ、二人揃って溜息をつく。

そんな中、ふと桃子は顔を上げて首を傾げる。

「あら？…なのはがあんな事言い出すって事は………」

「うむ、今回は自ら進んで顔を突っ込んだのだ。そして力の差を感じて……」

「…顔を突っ込んででも大丈夫なようになりたがった…」

「まあ、『力』という『エサ』は入れ食い状態の魅力があるからなあ」

レーメと桃子がそんな会話をしていると、何か気になる語句があったのか、土郎が顔をこちらに『ぐりん!』と向ける。そのまま猛烈な勢いでレーメに詰め寄り、あくまでも静かな口調で土郎は含めるように尋ねた。

「レーメちゃん……『なのはが力を手に入れた』と言ったね……?」

「あ、ああ…簡潔に言えばそれで……」

「理由：原因はわかるかな？」

「あー……………どう話した物が……………」

軽く考えを巡らせる。

力を得た少女、戦力外通知を受けた少女、それをバネにしようとしている少女……………。

今ここで正直に話せばどうなるか……………。

……………自分には関係無いじゃん。

聞かれたのはあくまでも『力を手に入れた理由』であって『教えを請うた理由』ではないのだ。

仲間を売る事はできないが、イタチを売るのは躊躇う必要がない。

だってアイツ、イタチだし？

……………

《…つまり、話を要約すると…》

一つ、この時間樹には神剣使いを吸収するプログラムがある。

一つ、吸収された神剣使いは僅かな欠片に分かれ、エネルギーとして時間樹の中を流転している。

一つ、神剣使いがバラバラに散った事により、神剣そのものすら細かく分かれ、欠片となった神剣使いの元へ行こうとしている。

一つ、この時間樹での『魔法文明』とは、神剣の力を誤解した物である。

《…歪みしか無いように思えてきた……》

《本当ですね…自分で言いながらうんざりしてきました》

イルカナも疲れたように呟く。だが逆に望はそこにとある仮説を立て、一つの謎を解きにかかった。

《…でもおかげでスッキリした事がある》

《?…何がです?》

《実はな、イルカナ……》

そして望はこの世界での顛末を話す。

それを聞いたイルカナは大きく頷いた。

《望さんの考えは分かりました。恐らくそれで間違いないでしょう》

《パーマントウィルが人を襲い、悪しき願望器と呼ばれる理由……か》

《…神剣の自覚が無ければ同じ事です。転生体でも無いのに使いこなせる訳が無いんです》

《…だよなあ…》

望は頭を抱えてその場にうずくまる。イルカナも深い溜息をつくが、すぐに現状報告に入った。

《落ち込んでも始まりません。まずは沙月さんとナルカナの現状ですが…》

《ああ、どんな感じになってるんだ？》

《沙月さんはログ領域内部にて必要な情報の仕分けをしています。根幹からシステムが間違っていたので、他のバグを探していて、合流は遅れるかも知れません》

《そうか……なるべく早くに会いたいな…》

……イルカナの額に大きな「#」が浮かんだ事に望は全く気付いてはいない。

《……次にナルカナですが、バグに対する大まかな対策を立てて、現在はそのシステムを改善するアーティファクトを製造しています。それが済めば、私でも代役が務まるとの事なので、終わり次第飛んで来るそうです》

《全く……でもそんな所が何よりナルカナらしいよ……》

僅かな微笑みを浮かべながら、望は目を細める。

《…望さん……その表情は反則ですよ？》

「…？」

顔を赤らめながらイルカナが横を向く。望は訳も分からず首をカクンと傾げた。

「んぷッ！」

イルカナが慌てて顔を押しさえる。指の隙間から紅いモノが流れ落ちる。

「ッ！イルカナ！！」

「だっ大丈夫、大丈夫ですから！」

ダバダバと血を流しながら望を近付けまいと手で制する。

（今の望さんは極めて危険！この可愛さは反則でしょう！？）

先程の深刻な雰囲気はもはや見る影もなく、シリアスは完膚なきまでに叩きのめされた。

いかにイルカナとてこの空気を持ち直す事は不可能だろう。

「とにかくっ！とにかく今はそういう事なのでっ！」

「…あれ？」

慌てながら距離をとるイルカナに、望はまたもや首を傾げる。

「イルカナは高町さんにお世話にならないのか？…厚かましい話ではあるけど、ステイの為に招待したがつってるぞ？」

《いえ、私はこれからマナホールの調査をしに行きます。原理の調査だけなので一週間もかかりません》

どれだけ慌てようとも流石はしっかり者のイルカナ。核心に触れる部分は神剣言語を忘れない。

…流れ続ける鼻血さえ無きやな…。

《…分かった。それが終わったら是非来てくれ。あの家は…温かい》

《ええ、その時は是非》

イルカナも笑いながら神社を去る。

やがてイルカナの気配が消え、それとほぼ同時に結界も霧散する。望は帰ろうと高町家に向かい足を動かそうとした。

「……………あ」

軽く横を向いた所であるモノが目に入る。

「……イタチ扱いでも掘っても良いから忘れるのだけはやめてくれよう……」

……もはやオチでしか無くなったユーノはめそめそ泣きながら愚痴っていた。

「いや、済まない。完璧に忘れてたよ……」

申し訳なさそうに望が謝罪する。何とか立ち直ったユーノは望の肩に乗り、望と共に家路へ向かう。

……尚、今夜の高町家の夕食メニューが『イタチ鍋』に決まりかけている事を彼らを知るのは、自分達がリビングへ入ってからである。

少女は己の役目を果たし

イタチはその身を夕餉とす

蒼き胎動に休みは無く

少女の思いに揺るぎは無い



第9章 へ 遙か彼方の……へ (後書き)

……ええ、分かってますとも…

もっとぶちなさいよ!! (挨拶)

そんな訳で9章、いかがでしたでしょうか？

分かりきった答えでもやはり反応が気になる…それも俺のジャステイス。

今回は手札が大体出揃ったので解説になるかと思われませう。

では、ここまで読んで下さった皆様に感謝しつつ、次回もこのSSを読んで頂ける事を願って……。

「はい、注もーく！これからこのSSの至る所に織り込まれたオリジナル設定とかの説明タイムにしまーす！説明はこの私、チュートリアルの女神こと斑鳩 沙月と」

「ステージ説明係である黎明の神獣、聖レームでお送りするぞ！……なあ……サツキよ、自分で虚しいとは思わんのか……？」

「うるさいわよレームちゃん！こころ辺りでちゃんと顔を売つとかないと本編出た時に『……こんなんいたっけ？』みたいな反応されるのがオチに決まってるわ！！」

「……その辺のポジションは既にイタチが持つて行ったぞ？」

「きいー！私の立場を徹底的に潰したがってるのかしら！？でも負けないわよ！今に吠え面かかせてやるんだからー！！」

「とにかく設定についての説明だ。この空間においては本編とは何も関わりが無いのでな、メタな発言は全力でスルーすることを推奨するぞ。…サツキ！そろそろ戻って来るのだ！」

「そもそも何であの時別行動とか……はっ！……あらー、ごめんなさいレームちゃん。それじゃ気を取り直して……」

「最後までよろしくお願いします（なのだ）！」

## 世界観

「これは言わずもがなよね。序章で粗方の説明は終わってるし」

「うむ、なのでここではなぜこの時間樹が危機的状況にあるのかを説明するぞ」

「『時間樹』って名前でも分かる通り、時間樹は全体として樹の形をしているのね。」

そして『分枝世界』と呼ばれる細かい枝葉の一つひとつに至るまで、全てに世界が存在してるわ」

「そして、樹である以上はその身を成長させねばならん」

「ところが！この時間樹の中に存在している、とある分枝世界が『他の世界』が存在する事を認識してしまったのよ」

「人間とは元来、欲の深き存在だ。『他の世界』を調べる内にまた『他の世界』を知ってしまい…といった所だな」

「オマケにこの世界は自分が知った世界を手元に置きたがってね、『自分の世界』と『知った世界』をパイプで繋いじやったのよ」

「それが『マナホール』と言う訳だな」

「その通り！…で、そのマナホールなんだけど…」

「うむ。枝葉同士を固定するから、成長そのものを阻害されておる。加えて次の分枝世界を造る養分となる『滅ぶべき世界』までもがパ

イブに固定されマナの供給を受けており、滅ぶに滅べず生殺し状態にされておるのだ」

「エト・カ・リファみたいに規模の大きな時間樹ならそれほど問題は無かったんだけどね……この時間樹、まだ苗木の段階だった物だから……」

「相対的に見て、かなりの問題となってしまうのだ……」

「更にそこから神剣使いを消化するプログラムが入ってたもんだから私の仕事が増えた増えた……」

「そこなのだ」

「あら、どうしたのレーメちゃん？」

「神剣使いを消化すると言っておきながら、吾らは消化されている実感などカケラも無いぞ？」

「そりゃ問題ないわよ。あのね、レーメちゃん、私達は永遠神剣第一位の一部なのよ？海の水を紙コップで掬い続けて干からびさせるようなモノなの」

「下位の神剣使いなら致命的だが……といった所か」

「イグザクトリー！この時間樹には元々から管制の神剣以外は、七位以下の神剣しか無かったみたいだから割とあっさり吸収されたみたい」

「結果、吸収された神剣使い達は……」

「ええ、僅かな欠片としてあらゆる命に恩恵を与えた……」

「それだけで済めば、話は楽だったんだがのう……」

マナバースト

「この時間樹から神剣使いが消えたが故に、本来起こり得ない事象が発生したのだ」

「それがマナバーストって訳よ」

「分かりやすく言ってしまうえば、風船の膨らまし過ぎによる爆発だな」

「…身も蓋も無い言い方だけどね。まあ、大体それで合ってるから良しとしましょうか。」

私達神剣使いは世界に浮遊している所謂『浮遊マナ』の濃度を一定に保つ必要があるのよ」

「これが濃すぎると、生命のバランスが狂ったり、突然変異などが起こり得るからな。」

吾らは分枝世界をなるべくに維持していく事も必要なのだ」

「マナが枯れた世界に関してはその限りじゃないけどね。少し話が反れたわ。本題を続けましょうか」

「うむ。で、今回のマナバーストの原因は、神剣使いが消えたが故

に、マナの濃度を調整する役目がおらん様になってしまったのだ」

「マナの調整役が消えて、とある分枝世界が力を持ちはじめ、マナの濃度の概念を知らない人々は『マナは無限の恩恵を与えてくれる』  
と思い込んで別の世界からマナをかき集めてる……」

「濃度が上がり放題、という訳だ」

「で、そこから更にパイプで世界を連結なんかしてるもんだから……」

「連鎖爆破、と言った所かのう」

「……」

「……」

「「……はあ……」」

パーマネットウィル

「結局本編ではノゾム達が自己解決していたから、読者には伝わりにくかったのではないか？」

「だから今ココに回されて来たんじゃない！喋るチャンスは私にとっては死活問題なのよ！」

「分かった、分かったのだ！顔が近いぞサツキ！」

「オホン……で、このパーマネントウィルが何故に人を襲うのかなんだけど……」

「イマイチ吾は理解しとらんのだ……」

「説明したら簡単な話でね、パーマネントウィルって神獣に食べさせる事で力を発揮するでしょ？」

「ふむふむ」

「だけど力を発動させるのは神剣使いなのよ」

「そこは理解できるぞ」

「言うなれば『神獣としての神秘』を携えた存在がパーマネントウィルを吸収したけど、力が大きすぎて暴走したのよ」

「なるほど！器が小さいのに大きすぎる中身が無理矢理に入ろうとした結果だな？」

「そんなトコロよ。パーマネントウィル単品で襲って来たのは、大方パーマネントウィルの中に神秘が潜り込んだからでしょうね」

「うむう……イレギュラーだらけだな、この時間樹は……」

「その修正の為に今、私達が奔走してるのよ」

「ノゾムは手伝わなくて良いのか？」

「望くんは戦闘要員だから問題無いわよ」

「役割分担、という訳か」

技の威力

「レームちゃん？」

「どうした？」

「そういえば初めての戦闘の時に『限定解放』とか言ってなかった？」

「うむ、力加減を行ったのだ」

「そんな事できるの？」

「ノゾムの奴が考え無しに全開で技を打ち込むのでな、必然的に吾が力配分をする事にしたのだ」

「あー…、確かに望くんだとどれも力加減難しそうな技ばかりだもんねー」

「だから、吾が取り出す力を調整しておる。あの時のグラスプは四パーセントだったか？フォースダメージ500の四パーセントだから…：フォースダメージ20の技になったのだな」

「聖なるかな知らないと何がなんだか分からない説明ね……」

「もとより承知だ。さて、今回の説明はこんな物か？」

「ええ、そうね。また分からない所があれば感想掲示板に連絡してちょうだい。作者がなるべく答えるらしいから」

「では、これからも『聖なるかな』A l l y r i c a l m a g i c a l e t e r n a l』を、よろしく頼むぞ」

「絶対に近い内に出てやるんだからー！」

第10章 く決意の証、罪の眠りく（前書き）

スーパーロボット大戦L買って指が止まる止まる！！

今回はギャグ成分が高めな気がします。

ではどうぞ。

## 第10章 く決意の証、罪の眠りく

「……………で」

「うゆ……………ナノハの説得に失敗した…」

「どころか火に油を注いだ、と」

場所は望とレーメに宛がわれた部屋。向かいあった二人は情報交換も兼ねて、今後の方策を話し合っていた。

そんな中、レーメは己の失策を望に伝え、望は腕を組みながらレーメの話の聞いている。

「ノゾムよ……………アレは汝が」

「言わなくても分かっている。胸倉掴んだ時にも驚かずにこつちを見続けてたんだ……………色々、俺に似過ぎだよ…あの子…」

一通りの話を聞いた後に頭を抱えながら、それでも何かを懐かしむように望は目を細める。

「……………どうするのだ？」

たまり兼ねたレーメがなのは今後について尋ねる。望はそれに軽く腕を伸ばしながら応じた。

「しばらくは様子を見よう。見込みの種はあるんだろ？」

「無い事はないのだが……」

レーメが少し言い澀む。

「……？」

「ナノハの奴……どうも運動神経が切れておるといっつか……」

「…運動音痴、と」

黙ったまま、レーメがコクリと頷く。対する望は別段に気にした風も無く、気軽に言い放った。

「そこらへんは問題無いさ。俺だって力を手に入れる前は、運動出来た方じゃなかったしな」

「だが……」

「レーメ、忘れるなよ。俺達は今までスタンドプレーでやって来たから総合力を求めてきたんだ。でもなのはちゃんは違う…彼女をアシスト出来る存在がいる。だから彼女には死角があっても、ある程度までは問題無いんだよ」

望の言う事にレーメは軽い衝撃を受ける。確かに望の言う通りだ。自分達も複数人で行動しているが、望が本気で戦う時は一人になっってしまう。

故に、いつの間にかレーメは戦闘力を総合で見ってしまう癖がついて

しまっていた。

「…うむう…一理あるな…」

「だったらそれでOKだろ？」

「確かにノゾムの言う通り…なのだが…」

その理論は今、現在進行形で根底から覆されようとしている。

「そろそろ助けに行かんとあのイタチが三枚おろしになるぞ？」

望がダツシユの姿勢を取るのに二秒と掛からなかった。

~~~~~

「殺アッ！！！」

シャン！！

銀光一閃。

恭也の腰元から放たれた白銀の煌めきは、音すら置き去りにして白い軌跡を描く。だが恭也自身は納得がいかないらしく、顔をしかめるばかりだった。

「まだまだ！まだ剣筋が甘い！！」

先の一撃を放った恭也は苛立つように道場の隅へ行き、刀の手入れを始める。

小太刀を主に使用する御神流にしては珍しく、それはいわゆる『打刀』と呼ばれる一般的な日本刀であった。

「…恭也、何をしているんだ」

鬼気迫る勢いで刀を研ぐ恭也に、道場へ上がって来た土郎が静かに声をかける。

「父さん…ごめん…でも、俺は父さんみたいに冷静でいられないから…」

刀を研ぐ手を止め、恭也は土郎に己の心情を吐露する。懺悔をする迷える子羊が如く、揺れた眼差しで土郎を見た。

「俺が未熟なのは十分に分かってる！…でもっ、これだけは！！」

そんな恭也の肩を士郎は静かなままにそっと叩く。恭也は思わず顔を上げると、そこには全てを含んだ、己の『父』であり『師匠』である高町 士郎の柔らかな表情があった。

やがてゆっくりと士郎は口を開く。

「恭也……………今はそれで良いんだ」

「父さ…師匠……………でも…」

「人とは誰しも未熟なのだよ。私とて、まだまだ人として至らないさ……………だが、その未熟さ故に人は上り詰める事が出来る」

「……………」

「己が未熟である事を忘れるな。そうすればお前は、更に強くなる……………」

「……………ありがとうございます…師匠……………」

御神の師弟は互いを見合い、志も新たに次へ至る決心を確かめた。

「やて…」

不意に士郎が沈黙を破る。視線を道場の中に遣り、目標を確認すると満足そうに微笑んだ。

「恭也、師弟としてはここまでだ」

言いながら土郎は蠟燭を付けた純白の鉢巻きを頭に巻き、どこから出したのか釘をしこたま打ち付けた『金属バット』を腰ために構える。

「…フツ、分かったよ…父さん」

軽く笑いながら恭也も刀の水気を綺麗に拭き取り、丹念な手つきで仕上げを施す。

そんな道場の中央には、

泡を吹きながらピクリとも動かず、天井から吊され、ぐるぐるに縛り上げられたままのユーノ・スクライアの姿があった。

そう、師弟としてはここまで。

これからは、

ここから先は、

娘を愛する家族（修羅）の領域だ……！！

「「まずは皮から、だな」」

落ち着け、お前ら。

~~~~~

「ストオオオオオオッブ!!!」

望が道場に着いた瞬間は正しく間髪なかった。士郎がバットを振り上げた姿勢のまま固まる。それを確認しながらも、慌てて望はユーノへと駆け寄った。

「おい！ユーノ!?!」

「ぶくぶくぶくぶく……」

「……手遅れ……だったか……」

ユーノをそつと縄から外し、望は士郎に向き直る。

「……士郎さん……何故……?」

「…家族を想う事は、罪なのかね？」

士郎はその瞳に僅かな罪悪感を滲ませながら返す。しかし望は追撃をやめない。

「……彼も…家族でしょう……貴方は受け入れたんじゃないんですか!？」

「だがそいつは娘を危険に晒した!!…だからっ!………だか……ら………」

血を吐くが如く、士郎は胸の内を打ち明ける。

「それを危険だと思うなら、他にやり様はあったでしょう?」

「私は……不器用だったんだ…それしか知らなかったんだよ………」

「そんな事を言っても…ユーノは戻っては来ないんですよ!？」

「……私は…わたしはああ……っ!!」

ついに士郎が泣き崩れる。そんな士郎を庇う形を取りながら、恭也が二人に割って入った。

「やめてくれ!!父さん一人だけじゃない、俺だって一緒に殺ったんだ!!」

「…恭也さん、でもそれは………」

「恭也……!!こんな所に情けなど無用なのだ!!」

「父さん、でも!」

「お二人の言い分は分かりました……詳しくは……」

「ああ……すまない……罪には然るべき罰がある……そうだな……」

「俺も行くよ……父さん……」

娘を愛する親子は手を取り合い、その場を静かに去ろうとする。そんな二人の背中を望は静かに追いかけた……。

「……ドラマの見すぎだ、アホどもめ!……」

~~~~~

「……ってな感じで術の発動を促す訳なんだけど」

「……自分の魔力タンクを開くパスワードみたいなの?」

「そうそう。そんな感じかな」

時間は経ち、なのはの自室。なのははユーノから本格的に魔法の講義を受けていた。

あれから結局、望を仲介に置いたなのはと士郎・恭也の愛娘連合軍は実に三時間にわたる攻防戦を繰り広げた末に、

「お父さん達なんか大っ嫌い！！！！」

という核爆弾を落とされた連合軍の惨敗に終わる。

二人は断腸の思いで望に全てを託すと、心の荒野を潤す為に、缶ビール片手なのはのアルバムを引っ張り出して自室へと引き上げた。さつきから啜り泣く声が鬱陶しい。

そんな呻き声<sup>ウメ</sup>をBGMに、望なのはは育成計画を練り上げた。

技術面は持ち込んだユーノに

戦闘面は要員の恭也・士郎・望に

戦いの心構えはレームに任せて、なのはの育成計画は始まった。

元々が責任感の強い望なので、一度協力すると決めたからにはかなり真剣に取り組んでいた。

今はユーノによる座学の時間。フィーリングで適当に使う力の危険

性を指摘する目的だったが、なのはは驚くほど真剣な姿勢を見せていた。

「……とまあ、こんな所かな。次はあさってだからね」

「ありがとう、ユーノくん！」

やがてユーノの講義が終わる。夜も良い時間なので寝る事になるのだが……

「そういえば望くんって何処で寝てるの？」

争いの火種は、尽きそうに無い。

少女は新たな道を選び

少年は新たな種を育てる

親バカの船は儚く轟沈し

ここに新たな可能性が生まれた

第10章 く決意の証、罪の眠りく（後書き）

この話でついに10章と、なかなか頑張っていないか俺！？

……頑張っていない俺……

精進します！

実は大学のオーラルテストが近く、暫く投稿出来なくなってしまう。

次回更新は12/5あたりを予定しておりますが、不確定なのが申し訳ありません。

では、また次回で。皆さんの目に触れる事を願いつつ……

第11章 真・初陣 (前書き)

.....

腑抜けてました!!!!!!!!!!!!!!

……投石は感想板をお願いします……

## 第11章 く真・初陣く

ある晴れた昼下がりに。

「い〜ちば〜へつづ〜くみち〜」

「何をいきなり歌いだしておるのだノゾム？」

「いや、何となくだったんだけど…」

「馬鹿をやっておらんでしつかりとナノハを見ておれ。今日が実質の初陣だぞ？」

半眼になりながらレーメは望を睨む。レーメの言葉を受けて一転、望の表情は厳しい物となった。

「…そうだな。なのはちゃん、調子とかは大丈夫？」

「バツチリだよ！」

なのはは気負った風も無く、不敵に笑いながらレイジングハートを構えた。

ただし、その眼だけは完全に死んだ魚のそれだったが……。

そんな三人の目の前には、覚醒したばかりのジュエルシード……パ  
ーマネントウィルが魔力を放ちながら漂っていた。

~~~~~

「そろそろ実戦をしても良いとおもっの」

そう言った瞬間に望とレームから同時に頭をハタかれた。

「ったあー！」

望は呆れながら手元の本に視線を戻す。そんな望を余所に、涙目で転がり回るなのはをレームが叱り付ける。

「講義と訓練を始めてまだ三日目だぞ！そんな簡単に実践に出られる訳が無かるう！」

「ほら！やっぱり無理なんだってば！！なのはには早いつて言ったる！？」

先日レームからのタレコミで実態が露見したユーノは最早、気にする事なく声を張り上げる。

場所は高町家のリビング。休日の午後という事で、翠屋で働いている土郎と桃子以外は自宅でゆっくりと羽根休めをしていた。

…そこになのは「実戦」発言が出たのだ。

当然、訓練を始めて幾許も経たない内からそんな許可を出せる筈も無く、望たちはこの意見を突っぱねる。

しかし、望とレーメの二人に対し、意外な人物からなのはへの許可要請が出たのである。

「望……その…俺からも…許可を頼みたいんだが……」

「キョウヤもだど！？汝まで何を考えておるのだ！」

「いや……その……な……？」

詰め寄るレーメに後ずさりながらも、弱々しく言葉を返そうとする恭也。

望もコレは流石に看過出来ずに、本格的に事情を聞く為、読んでいた本を閉じて腰を浮かせた。

P r r r r r r r r …… P r r r r r r r r ……

そこへ示し合わせたかのように電話が着信を告げる。距離的にも電話まで一番近い事もあって、望はその電話に出る事にした。

「はい、高町です……あ、桃子さん？……え？はい……ああ……分

かりました…色々と…いえ、こつちの話です…じゃあ、失礼しますね」

深い溜息をひとつ、何処となく重い足取りでレーム達の元に行く。

「モモコからだったらしいな…どうしたのだ？」

「…士郎さんが帰って来るそうだ」

「シロウが？まだ翠屋は営業時間ではないのか？」

最もな事を聞くが、望は頭を抱えてレームの疑問を払拭した。

「『使い物にならないから強制送還』だってさ。コーヒー豆を挽かずに直接熱湯注いだらしい」

「何がしたいのだあ奴は！？」

「…なのはちゃん？」

それまでの会話を唐突に切り、なのはへ声をかける望。

「ぎくり」

“いかにも何かやりました”と如実に分かる反応を示す高町なのは（9）。そもそも口に出すってどうなん？

「汝はもう少し“お約束”を学ぶがよい」

…精進します。

「……なのはちゃん？…今なら、まだ、間に合う、かもよ？」

一節一節を区切り、一言ごとに一歩ずつなのはに近付く望。

既に背中を壁にぺったりと張り付けたなのはは、涙目で震える事しか出来ない。

元々反対派のレーメが冷たい目をするのは当然の事、ユーノも眉根を寄せるばかり。やはり心配が勝る恭也は正座したまま何も言わず、最後の皆な筈の美由希は、リビングの端で数珠を持ちながらなのはに手を合わせていた。

「…どこから持ち出したのだ？」

「細かい事は気にしない！」

「……まあ、とにかく。ユーノ！何か事情を知ってるか？」

埒が明かないと、望はユーノに話題を振る。ユーノも反対派らしく、割とすんなり答えが出てきた。

「実は昨夜に…」

「ユーノくん！私の事を売るの！？」

「昨夜に恭也さんと土郎さんに同じ話題を出しまして」

「わーっ！わーっ！」



なのはは勿論、その場の全員が現実を疑う。その発信源である望は表情を崩さずに続けた。

「バックアップは俺とレームでやる。対象は次に覚醒したジュエルシード。相手が悪いと判断したら即中断、俺とレームでやる……それでもいいな？」

「うんっ……！」

満面の笑顔でなのはが頷く。嬉しさの余り、その場で踊りすら披露していた。

「ノゾム……良いのか？」

おずおずと尋ねるレームに望はコクリと頷き、その口を開いた。

「ああ……だが代わりに」

「？」

「少し地獄を見てもらうぞ」

「……………！！！」

その言葉にレームは顔を青ざめさせ、ガチガチと歯の根を鳴らす。

「実戦の前には“馴らし”が必要だろ？」

「あ、あうあ……………」

「軽い“特訓”だよ。問題無いさ」

「……にゃー……………」

そんなやり取りなど聞こえていないのか、なのはのオンステージは小一時間続いた。

くくくくく

「あゝあゝ

ーッ……………」

くくくくく

「さて、なのはちゃん。これから俺は手出しをしない……………今から君の味方はユーノだけだからね？」

「了解なの!!」

「後は前に伝えた通りだから、頑張って」

「頑張るの!!!」

軍隊式の敬礼を見事に披露したなのは踵を返し、ジュエルシールドへと向かって行った。

「…多少、幼児退行しておらんか…?」

「命の天秤には架けられないさ」

「…まあ、そうだが……」

口ごもりながらも引き下がる。そしてすぐに、表情を厳しい物へと移す。

戦いが、始まる。

高町なのという少女の、本当の意味での『初めての戦い』が。

~~~~~

グルルルルルウ……………

ジュエルシードは初めて見たタイプのうごめく影の形を取っており、否が応にもなのはトラウマを刺激する。

「…でもっ!」

なのはレイジングハートを握り直す。その手にはじっとりとした汗が染み出していた。

「負けられない!」

そっだ、負けられないのだ。

新しく出来た姉が見てくれている。

新しく出来た友達が見てくれている!

誰より愛しい男の子が見てくれている!!

何より

「あの地獄に比べたら!!!!!」

気分一新、なのははジュエルシードに突っ込んで行った。

~~~~~

「ふっ！」

軽いバックステップを踏み、影から伸びる二本の槍を回避。

影は攻撃を回避されたと見るや、本体から更に五本の槍を展開。軽いブラフを交えつつ、本命を撃ち込まんと肉薄する。

しかしなのははそれに全く動じる事無く、上体を軽く捻り、膝を曲げるだけで全弾を回避した。

グゴアア！

「……！」

回避したかに見えた瞬間、槍の一本が枝分かれし、なのはに襲い掛かる。目を見開くのも一瞬。咄嗟にレイジングハートの柄尻をあてがい、一気に振り抜く！

……！！

奇襲に失敗した事を悟ると、影は一気に距離を置いた。

~~~~~

「…なかなか」

「悪くは無い……が」

意外そうに呟く望とレーメ。少しなのはの評価を上方修正しなければ、と二人は肝に銘じる。

「レーメ…お前はなのはちゃんの実力、どう見る？」

「そうだな……」

顎に手を遣り、それでも視線はなのはから外さない。

「空間認識が異常なまでに手慣れておる。最少の動きだけで回避、直撃だけを見極める観察力……今はまだ生存本能に支配された動きが見受けられるが……物に出来れば化けるであろうな」

レーメが中々の評価を下す。望は黙って言葉の先を待つ。

「やはり運動オンチが致命的か……吾の座学には終わりがあるからな。余裕が出てくれば模擬戦の量も増やせるぞ」

そこまで言って、レーメはふと気付いた様に目を見開き、望に問い

掛けた。

「そういう望はどうなのだ？」

「概ね同意見だな。ただ俺は…短所を消すよりも、長所を伸ばす方が得策に思う」

「？」

「恭也さんと土郎さんの特訓を少し変える。具体的には相手との距離の置き方と防御面を特化」

「なるほど……“待の先”を叩き込む訳だな？」

スラスラとなのはの育成内容を決める。当の本人は相棒と共に、バインドで相手を雁字絡めにしていた。

「今の体力作りは続行か？」

「それは勿論だ。その後に行っている模擬戦の毛色を変える」

「了解だ。帰ったらシロウ達に報告だな」

「ああ………つと、そろそろ決着みたいだぞ」

言い終わらない内に、なのはが掲げた杖から光が溢れ、影に絡み付く。先日のそれとは、段違いの力強さを持った光だった。

「うむ。及第点はあるだろう」

「ああ、悪くない」

満足げに微笑む二人の前で、なのはは誇らしげにVサインを掲げている。

ここに高町なのはの初陣は終結したのである。

~~~~~

「望くん!!見ててくれた!?!」

ブンブンと尻尾を振りながら(幻覚ではない)、なのはが望に駆け寄る。

「ああ、見てたよ。よく頑張ったね!」

そんななのはの頭をぐりぐりと撫でる望。自分だけに向けられた優しい笑顔と頭ナデナデになのはは最早とろける寸前である。

「.....」

ジト目になっているレーメは今は放置が吉だろう。

「じれっ!」

なのはが何かを差し出す。見るとそれは表面にXVIEEの字が浮か

び上がったジュエルシードだった。

「？」

望は訳も分からずに首を傾げる。

「あげるのー!!」

「「「!?!?!」」」

いきなり何を、と他三人（二人と一匹？）が慌てる。特にユーノの狼狽ぶりが凄まじかった。

「な、なのは!?!?それは元々……!」

「でも望くんの方が強くて頼れるよね？」

イタチ、轟沈。

そんなユーノを尻目に、望はやっぱりとなのはの説得にかかる。

「だから望くんにあげるのー!」

「なのはちゃん？気持ちは嬉しいけど、それは君が頑張った証だから……」

すると、なのはは悪戯っ子のような笑い方をして望に顔を近付けた。

「でもタダじゃないよ」

「え？」

「明日一日、ずーっと甘えさせてくれるならコレあげる！」

……結局、なのはの説得は失敗し、高町家に新たな修羅伝説が誕生する事は回避できなかった。ただ、いつもと違ったのは修羅が一人増えていた事だろう。

くくくくく

「……………で、どうだった？」

「うむ、間違いなく吾らは持っていない……………新しいパーマネントウ  
イルだ」

「…名前と効果は？」

「名は『バルハの竜骨』、アタックスキルのようだが……………詳しくは  
分からん」

「吸収してのお楽しみ……………か」

「そうなるな。まあ、マイナスにはならぬ。そこは安心しておけ」

「そうだな……おやすみ、レーム」

「うむ。おやすみなのだ、ノゾム」

その手に握るは新たな力

その手に入れるは新たな覚悟

役者の着付けはもう終わり

お色直しも程々に……

## 第11章 〈真・初陣〉（後書き）

……前書きであんな事を言っておいて厚かましい事この上無しなのですが、皆様の知恵をお借りしたく思います。

内容はズバリ、『望の新スキルの名前』

一応考えてはいるのですが、今ひとつピンと来ないんです。

以下スペック

パーマネントウィル『バルハの竜骨』

M：400 F：400

バランスダメージ

アタック時、白属性5%上昇

黎明の柄尻を合わせて双刀型の剣を形成。防御と広域戦闘に優れる。

赤ミニオンが持ってた剣が一番近い形かな？

締め切りは12/10の0:00までとさせていただきます。

皆様の意見、お待ちしております。

では、次回も皆様の目に触れて頂く事を願いつつ……

## 第12章 く姫の不機嫌く（前書き）

……携帯のメモリが全部吹き飛びました……………

創作を辞めるかガチに考えましたが、やはり俺のジャスティスに嘘はつけません。

格段に遅くなりますが、それでも拙作をよろしくお願いします。

## 第12章 く姫の不機嫌く

むっすうう~~~~~  
.....

「なーにを怒ってんのよ、なのは？」

「朝ご飯食べなかつたの？」

「.....自分の浅はかさに憤慨してるだけだもん」

「難しい言葉知ってるわね.....」

なのはが初陣を勝利で飾った翌日、彼女の機嫌は頗る悪かった。

原因がいくら自分にあるとはいえ、やはり不機嫌になる事は否めない。そんな不機嫌真っ只中のなのはに話し掛けるのは、親友であるアリサ・バニングスと月村すずか。

アリサとすずかとは、とある揉め事を境にずっと友誼を結んでいる。

この二人になのはを含め、聖祥附属きつての仲良し三人組として名を馳せていた。

そんな中に居て尚、なのはを不機嫌にさせている理由が、目の前に広がっていた。

「まだまだ巻き返せるぞー!!」

「上げられがね!キーパー止めろ!!」

高町 士郎率いる『翠屋JFC』、その試合日にアリサ達と一緒に応援する事を、なのははすっかり失念していたのである。

流石になのはも親友の手前、望にすり寄る訳にいかず、その望も折角の友情に余計な水を差すまいと、少し離れた位置からレームと観戦をしていた。

それがまたなのはには面白くない。

結果として高町なのはの機嫌が底打ち状態となっているのである。

その内になのはから段々と無気力オーラが放たれ始めた。

「ガッツ見せなさい!!」

「頑張つてー!」

「頑張れー!」

「……って、ちょっとなのは！アタから何でもテンション低すぎよーっ。」

「うにゅっ……………」

アリスがどれだけ檄を飛ばしてもものはぐねぐねとした動きを止めない。

遂に業を煮やしたアリスが何処かに走って行った。その行き先は……

……………

~~~~~

《……で、使い道が果てしなく難しいと》

《そうだな。カタストロフィに比べれば範囲を大幅に絞れるが……それでも撃滅型には変わらないぞ》

《技のプロセスとしては……………》

《……ならばその段階で止めて……》

なのは達がモチベーションで言い合いを繰り返している場所からフィールドを挟んで向かい側、望とレームは神獣とその主の間にある

念話を用いて、新しいスキルに対する評価を相談していた。

導かれた結論は『中規模殲滅型アタックスキル』

エキスプロード以上カタストロフィ以下と言う辺りで落ち着く。

しかしこのスキル、応用が利きやすい反面、「範囲内の敵を容赦なく挽肉にする」という物騒極まりない威力を持っていた。

範囲に融通は利くが、威力は減らし様が無いという、異色のスキルだったのである。

結論としてここから先、当分は使わない事を決意。だが副産物である双刀型の黎明は使い勝手が悪くない為、これからの望の自主鍛錬に双刀が追加された。

そんな取り留めも無い話をしている中、

「ちょっと 안타!」

なのはの友達である女の子から声を掛けられた。

~~~~~

「……………あれ？アリサちゃんは？」

「それすら気付いてなかったんだ……………」

やっと顔を上げたなのはが開口一番、そんな言葉を漏らす。流石に  
すずかもその言葉には苦笑いしか出てこない。なのははしばらくキ  
ヨロキヨロと周りを見渡し、ある一点でその視線が固定される。

「アリサちゃんならさつきね、なんか……………」

「あ、うん。見えてるから大丈夫だよ」

口元だけ三日月の笑顔を作り、なのははベンチからゆったりと立ち  
上がる。そんな間も視線は全く外れない。

それどころか瞬きひとつしていない。

そんななのはの視線の先にはとある男女があつた。

そこには、

自分の親友が、

自分の一番愛しい人と、

仲睦まじそうに、

顔を、

寄せ、

合って、

……

~~~~~

「なのはちゃんが全然モチベーション上がらない…か。俺でどうにかなるのか?」

「むしろアンタ以外考えられないわ。隣にいただけで随分違つと思つから、悪いけどお願いできない?」

「レーム?」

「吾は構わん。ナノハの所なら吾はおらん方が賢明だろつ」

「そうか」

「話はまとまった?じゃあ…」

アリサが望を連れ出そうと拍手を打とうとした瞬間、

ゾッ！！

「……！！！！」

言い知れぬプレッシャーが望たちを包み込む。殺気とは違う、『刺し貫く』ではなく、『閉じ込め縛る』ような感覚。

すぐにスイッチを切り替え、周囲への警戒を最大まで引き上げる。

「いきなり何怖いして……ひい！？」

望たちのいきなりの雰囲気の変わり様に首を傾げたアリサが、その体勢のまま小さな悲鳴を上げる。

二人もアリサの視線の先を確かめる様に首を回す。

そして、

「ア・リ・サ・ちゃん？……何してるのかな？」

昨日の『濁った眼』でありながら、その全身に奇妙な『氣』を漲らせた妹分がこちらに向かってゆっくりと歩を進ませている。

なのは望に眼もくれず、一直線にアリサへと進み、顔をアリサの鼻先二センチでピタリと止めて口元だけの笑顔を浮かべる。

「な、なのは……?どうしたのよ……そんな……」

「ねえ」

「はいっ!?!?」

「望くんと何を話してたの……?」

「そ、それは……」

ここでアリサは選択を間違えた。素直になのはの事が心配だと言えば、何も問題は無かった。が、生来のプライドがそれを拒否したのだ。

「あ、アンタに関係無いわよっ!男女の会話に茶々入れないでくれる!?!?」

ぷっちん

「」「あ」

「え?」「」

加速していく刻の中

少女は世界に辿り着く

光が少女の世界を覆い

神の剣をその手に「勝手に終わるなの」

……サーセンした……

~~~~~

「……………何があったの？」

「何も無かったわよごめんなさい」

「アリサちゃんが私の為に何か考えてくれてたみたい」

「でも……」

「きっと大丈夫だよ」

何処かカクカクとした動きで受け答えをするアリサに、どこか遠くを見たまま視線を動かさないのは。

やはり気にはなるが、開けてはならない扉だと分かっってしまうすずか。そして月村すずかと言う少女は、決してフロンティアスピリッツを持ってはいなかったのだ。

「……ならいいけど」

日和見主義ともいう。

「…否定材料がないよう………」

~~~~~

「……やはりモモコの娘、か……」

「遠い眼してまで言う事か？」

「様式美だ」

「違うからな」

アリサとなのはの介入でグダグダになった二人は、先刻より更に取り留めもない話を繰り広げていた。

最早討論を続ける気力もなく、何の気なしにサッカーコートに目をやる。

「「あ」「

ぴぴーッ！

瞬間、脚を押さえて倒れ込む我らが翠屋JFCゴールキーパーの姿を二人は確認した。

~~~~~

「参ったな……………」

そう言いながら士郎は思わず頭を抱える。

原因はフェイント。パス回しが秀逸だったのだが、最後の瞬間に渾身のシュートの軌道を読み間違え、キーパーの膝頭に直撃したのだ。

士郎が診た所では軽い捻挫になっている。

運悪くベンチにはキーパーがない。代理を立てる事は出来るが、

キーパーは読みの良さは何よりも度胸勝負が要となる。いきなり言ってもまともに機能しないだろう。

「だが…致し方無し…：か」

多少のリスクは…：と覚悟を決めた時、士郎の視界の端に、駆け寄って来る少年が写った。

~~~~~

「……………で」

「こうなった、と。似合っておるぞ?」

若干ニヤつきながらレーメが茶化す。望はげんなりとした表情を見せると、頭に手をやった。

《…こんなのにんびりとしてて大丈夫なのか?》

《仕方あるまい。吾らは戦闘に特化し過ぎた。本格的な指針が決まるまでは何もする事が無いであろう》

《ナルカナと先輩に任せつきりつてのが、どうしても引つ掛かるんだよ》

やはり罪悪感を残す望。それにレーメは暫しの間キョトンとすると、

悪戯な笑みを見せて何もなかったの様に返した。

《それは問題ないぞ。サツキもナルカナも進んでしておくのだ。献身、という意味ではあ奴らとしても本望だろう》

《そういう物なのか…》

《それに》

《？》

《私的な部分なら文字通り『喰われて』おるではないか》

《やめい！》

真っ赤になった望を意地悪く見ると、そのままレーメはなのは達にいるベンチまで駆けて行った。

二人が念話で会話している最中も土郎は解説を止めない。望は大きく息を吐くと、自分のポジションへと小走りに寄った。

「望くん、何よりキーパーは度胸勝負だ。上手い事止めてくれよ？」

道すがら、土郎が望に最終確認を取る。

「分かりました。ゴール周りは手を使ってそれ以外なら脚、と」

「基本それでペナルティは無い筈だ。期待してるよ」

「努力はしますよ。それじゃ」

試合終了まで残り十五分、望は遺憾なくその鉄壁ぶりを披露する。

~~~~~

「のっぞむくーん！！頑張ってー！！！！」

「さっきまでの無気力どこに行ったのよなのは！？」

「あはは…まあ、なのはちゃんらしい…のかな…？」

「みんなもファイトだよー！！」

先の無気力は何処へやら。先陣を切って応援するのはにアリサは飽きれ、すずかは苦笑이었다。

……さっきと反応一緒じゃね？

「だったら語彙増やしなよ…」

…返す言葉もありません……………。

「頑張れー！！！！」

応援しているのはは気付かない。

前のキーパーが付き添いの少女の前で、物憂げに懐から出したモノを。

蒼く輝くソレに、Xと刻印されている事を。

~~~~~

「3 - 1で翠屋JFCの勝利っ！」

『『ありがとうございますー！！』』

結局点を入れられたのはキーパーが望に代わる前の一回のみ。それ以降は望が城塞が如き完璧な守備力を見せつけ、あまつさえ自分のゴールポストから直接相手ゴールにシュートを決めるといふ離れ業をもやってのけた。この結果に士郎が再び目を光らせた事は言うまでもない。

「じゃあ皆！翠屋に移動するぞー！！」

意気揚々と士郎が声を張り上げる。それを合図に各々は荷物を担ぎ始めた。

~~~~~

「なあ、ナノハよ」

「どしたの、レームちゃん？」

「汝の願い、日を改める事は考えなかったのか？」

「あ」

~~~~~

翠屋は流石に貸し切りとなっていた。店内では少年達がひしめき、騒がしくも楽しい一時を過ごしている。

そんな中、なのは達は騒がしいのが苦手な様で、店の外にあるテールで少々の茶菓子を伴いレーム、アリサ、すずかと共に会話に華を咲かせていた。

「名前が漢字のがおらんと言うのも、稀有ではあるな」

「確かにそうかも」

レーメの言葉に相槌を打つすずか。その言葉を皮切りにアリサがズイツと身を乗り出す。

「で、なんでレーメが高町家に転がり込む事になったのかしら？」

「詳しい事はまた今度話す。今は勘弁して欲しいぞ」

「なんでよ!？」

「尺が足りんのだ」

「「「??？」」」

「もう少しすれば判るぞ。今はそれで納得せよ」

そんな事を言いながら、他愛もない雑談に転じ、それなりの盛り上がりをしていった。

「そついえば望は？」

「ノゾムならばシロウ達に用があると云っておった。厨房ではないか？」

「あそ。まあどうでも良いけどね」

「辛辣だね、アリサちゃん……」

少女達の午後は過ぎて行く。

~~~~~

「じゃあこれで解散だ。各自気をつけて帰るようにな！」

『『ごちそうさまでした！！』』

祝勝会も解散し、翠屋からぞろぞろと少年達が出て来る。キーパーの少年は付き添いの少女と手を繋ぎながら帰って行った。

「……………いいなあ……………」

「だったら相手見つけなさいよ」

「勇気を出した特権だと思っなあ」

「にゅう……………」

「度々思っのだが……汝ら、少しマセ過ぎだぞ？」

そんな事を言いながら、手を繋ぐ二人を見送っていく。

終始なのは気付く事なく、蒼い宝石は人波の中に流れて行った。

そして、それは牙を剥く。

## 第12章 く姫の不機嫌く（後書き）

メモリが吹き飛んだ事を教訓に、ここにある程度まで設定を書き込みます。

なので次回は望たちのオリジナル技や能力値を上げたいと思います。

### 第13章 く重なる流れく（前書き）

設定も良いと思っただけどまずは本チャンを投稿します。

遅れてしまい申し訳ありません。

### 第13章 く重なる流れく

「レーム！そつちはどうだ！？」

「一通りは見たが、被害者はおらん！」

「こつちにもいませんでした！！」

人気の無くなった住宅街、その十字路で落ち合った三人は相互確認を取る。

「一まずは安心か……それにしても」

呟きながら望は十字路の先に眼を遣る。そこには幾重にも絡まった大樹の幹が姿を晒していた。

海鳴の街を巨大な樹が蹂躪する。ここに来ての原因など言うまでもないだろう。

「望くん！こつちもいなかったよー！！」

バリアジャケットを纏ったなのはが駆け寄る。その姿を見た望は情報整理をする為に、再び散ろうとする全員を呼び寄せた。

「とにかく、情報の整理だ。レーム、被害状況は？」

「範囲は約二キロ四方、今の所はまだ一軒も倒壊しておらんが、時間の問題だろう。樹は全部で九本だ。力の流れを読む限りでは、中心はあの樹だぞ」

そう言つてレーメは中央の樹を指差す。望はそれに一つ頷き、今度はユーノに向き直る。

「ユーノ、お前達の魔法文化の中には認識阻害や視覚妨害の術はあるのか？」

「あります…けど…」

「どうした？」

「多分コレは認識阻害じゃありません」

「何？」

「僕達の魔法の中には空間を『切り取る』魔法があります。これだけの異常が起きながら、街に騒ぎが全く無い……でしたら、これは間違いなく空間隔離の魔法です」

「軽い異次元空間か……」

言いながらも望の表情は益々険しくなる。レーメも何かを考える様に軽く目を閉じて腕を組んでいた。

「今は事態の収集が先、か……レーメ！」

望がレーメを呼ぶ。呼ばれたレーメはいつの間にか耳に手を宛てが

い、静かに目を開いた。

「…探索完了だ。隔離されたのは半径約三キロ四方、樹を包みドーム状に展開されておる。人は吾らのみだがあの樹の中心部分に更に二つの生命反応があった」

「反応の質によって対応が違って来る。正確に分からないか？」

「暫し待て……………これは……………人だな。ナノ八とおそらく同年代の男女がいる」

「人か……………」

望は軽く溜息を一つつき、徐に黎明の柄に手を掛けた。

「疾ッ!!」

ドフッ!という鈍い爆音と共に手近にあった大樹の幹の一部が吹き飛ぶ。しかし吹き飛んだのも束の間、ごっそりとその身を削られた幹は瞬く間に細い枝を寄り合わせ、太い幹へとその姿を変えた。

「超回復か……………強度は無いけど厄介だな」

「ノゾムは昔からこの手合いが苦手だったな。やはりまだ克服には遠いのか？」

「ああ、精進あるのみだ」

「いやいやいやいや!」

ユーノが慌てて手を振りながら望に詰め寄る。望もレーメもキョトンとしてユーノを見た。

「どうした?」

「相手の魔力強度はかなりの物ですよ!そんなのを軽々と吹き飛ばしてまだまだって!」

混乱状態にあるユーノが支離滅裂に言葉を紡ぐ。二人は最初、何を言っているのか全く分からなかったが、やがてレーメが得心したかの様に手を叩いた。

「ああ、汝は『相手の魔力防御は並の強度ではないのにどうやって軽々と破壊したのか』を尋ねたい訳だな?」

がくがくと首を上下させるユーノ。その横でなのはは茫然自失と立ち尽くしていた。

レーメはうむ、と大きく頷く。そして人差し指をぴんつと立て、

「事態の収拾もあるから手短にな」

望に冷たくそう言われ、しおしおになりながらも話し始めた。

「……まあ、今後にも関わる。手早くではあるが説明するぞ」

ユーノは黙る事で先を促した。

「汝らの魔法障壁には『物理防御』と『魔法防御』の二種があるだろっ」

「ええ、状況で使い分けたり両方の効果を持たせたりしています」

「あの樹は魔法防御にのみ重点を置き、物理面は樹の本来の硬さで補う型をとっておる。つまり、物理防御の障壁は働いておらんだ」

「……言いたい事は分かりましたが…どうやってその樹を？」

訝るユーノはまだ納得出来ない。なのははそもそも理解していない。

「だから、余計な魔力は使わずに剣の衝撃波だけで樹を吹き飛ばしたのだ」

今度こそユーノが言葉を失う。なのはは元から聞いていない。

「レーメ、そろそろ動きがありそうだ」

望からの制止がかかる。レーメも潮時とばかりに切り上げた。

「ナノ八にはまた詳しく話す。今は理解だけしておけ」

「そこはわかったの！」

……最近アホの子になってない？

~~~~~

「で、今回の標的なのだが……」

レーメが切り出した言葉に一同が耳を傾ける。

「見ての通り…形態変化を始めて核となっている二人を中心に、包み込むような形を取りはじめた。判明したジュエルシード、パーマネントウィルの名前は『コバタの森の風』……相手が大樹の形をしているのはこれが理由と考えられる」

「で、ユーノに質問だ」

望がレーメの後を引き継ぐ。ユーノは頷く事で返事の代わりにした。

「ジュエルシードは力の発現に指向性を持たせる事が出来るのか？」

「ええ、ですがジュエルシードそのものは、望さんの説明にあった通りの力の結晶です」

その言葉にレーメが疑問を口にする。

「待て、ノゾム。パーマントウィルにはそんな力はないだろう？」

「既存のルールは通用しない。ユーノの一族にあつた情報もある程度は、実際に起こつた事を元にして作られている筈だからな、無視は出来ないよ」

そう言われると否定出来ない。今はどんな些細な情報も見逃す事は出来ないのだ。

「すまぬ。吾のせいで話が逸れてしまつたな。続けてくれ」

「わかつた…で、ユーノ。今回、中心にいる奴らが『願つた事』の検討はつくか？」

「願つた事…？」

「『願望の実現』が力だつていうなら『実現』させる為の『願望』がある筈だろ？」

「確かに…『空間』を『隔離』して更にその身を『大樹』で『包む』…この条件を全て満たす願い事…？」

難しい顔をして一同は黙り込む。そんな中、これまで沈黙を守つていた少女がポツリと口を開いた。

「『二人きりの世界』……」

「『え？』」

「多分んだけど……自分達だけの世界を望んだんじゃないかな……？」

なのはの言葉を受けて、瞬く間に疑問が氷解する。

「…確かに、それなら納得が出来る」

「身を包むのも二人きりの聖域を護る為……か。中々にロマンな話だが、はた迷惑も良い所だな」

呆れ声でレームがぼやく。

「どうでしょうか…？」

ユーノが対策指針を決める為の疑問を呈する。望がそれに簡潔に答えた。

「作戦は一応は出来てる。その為に……なのはちゃん、君の力が必要だ」

望はそう言ってなのはを見遣る。そしてそう言われたのはは、

「なんでもするの…！」

かつて無い程の輝きを込めた瞳で大きく頷いた。

かくして、戦いは始まる。

~~~~~

「いきなり使う羽目になるとは……」

うんざりした様に望が呟く横で、なのはが精神集中を極限まで引き上げている。

「なのはちゃん、最終確認だ。俺はこれからあの大樹に突っ込んで標的までの軌道を確保する。そしたら」

「私がこの魔法で一気にジュエルシールドを封印する。だね！」

不敵に笑うなのは。その表情はどこか頼もしげであった。

「よし、じゃあ行くよ……三、二、一……」

「GO……」

そして、戦いは加速する。

~~~~~

駆ける。

ただ、駆ける。

中心までは約一、五キロの距離がある。ただ駆けるだけでは駄目だ。今回は軌道の確保という任務がある。

自分では、中心にいる子供の命の保障が出来ない。普段なら賭けに出る場面だが、今回は確実な手段があるではないか。ならば使われない手は無いだろう。

そう思いながらも、少し彼女の成長に期待している自分がいる。その事を軽く鼻で笑うと、望は表情を戦いのそれへと変えた。

望が疾走しながら黎明を抜刀、その柄尻を合わせ、一つの双刀に姿を変えさせた。

そのタイミングを見計らい、追走していたレーメが声を張り上げる。

『『バルハの竜骨』限定六パーセント解放！全長指定、七百メートル

ル。効果範囲、剣先に固定!!」

レーメの言葉を受け、望が双刀となった黎明を高速回転させる。

すると黎明の鐔に当たる部分から黒白のオーラが溢れだし、瞬く間に黒白の渦が出来上がった。

「ふっ!!」

速度を緩めない望が黎明の回転を止め、持ち直した黎明の剣先を渦の中心に突き立てる。

カツ! ビュゴオオオオオオ!!

次の瞬間、黒白の渦は猛烈な黒白の竜巻へとその姿を変える!

「上手く調整できてるか…!!?」

天に届かんばかりのその竜巻を刀身に纏わせた黎明を、望は大きく振りかぶった!!

「テンペスト!!!」

グオガギギギン！！！！！！！！！！

竜巻が大樹と激突し、その幹を容赦無く削り取る。その手応えを感じながらも望は油断なく周囲を見渡し、鋭い声でレーメに呼び掛けた。

「レーメ！再生速度が予想より速くなってる、範囲をもう少し広げてくれ！！」

「了解だ！『バルハの竜骨』出力変更、十一パーセント解放！全長指定千二百メートル！！」

レーメに纏わせた竜巻の密度と大きさが膨れ上がる。その波動を受けて再生をしていた大樹の枝が一斉に望へとその先端を向けた。

「防衛本能もあるのか……！！」

伸びる枝をかい潜り、目標のいる大樹の元へと辿り着く。

「ノゾム！ナノハへの軌道が確保できておらんぞ！！」

若干の焦りを含んだレーメの言葉を受け、望は一瞬だけ思案顔になる。しかしその態度もすぐに終わり、レーメに指示を出した。

「まずはテンペストでなのはちゃんまで大まかな道を作る。直後に中心近くまでライトバーストで一気に掘り抜いて届かせるぞ！」

「わかった！……ッ！！ノゾム！！！」

方針を決めた瞬間、レーメから切迫した声が聞こえる。何事かと望が振り向いた瞬間に、それは視界に捉えられた。

「なに………マズイ！？」

そこには、迫り来る枝を必死に避けるなのはの姿があった。

ユーノが結界やなのはの死角を補う形でサポートしているが、チェックメイトは時間の問題だろう。

「……ッ！一旦退く……！」

そう告げて踵を返そうとした瞬間、

「……この手合いの護衛対象が慣れないのは分かりますが、少し判断を誤りましたね」

斬！！

なのはを捉えかけた一際太い枝が綺麗に切断されて、切られた枝が瞬時に燃え上がり炭化する。

「「え？」」

自分の身に何が起こったのか理解出来ないのはとユーノはその時間を停止させている。

「望さん、基準が少し高すぎます。これからはその強さの基準を少し下げるか……」

パンツという柏手を打つ濁いた音。

ガチィ……ン……！！

直後、広範囲に展開されていた巨大な樹が残らず氷漬けにされた。

「でえっ！？」

その余りの光景にユーノが表情を引き攣らせる。しかしまだ混乱の最中にいるのか、その表情はそれ以降は変化しなかった。

「望さんの基準にその女の子を届かせて下さいね。戦いに関わらせるなら尚更ですよ？」

氷の大樹が粉々に砕け散り、光球に包まれた男女がゆっくりと地面

に下りていく。

光球が地面に触れた瞬間、視界が軽くぶれて、街に人の気配が戻ってきた。

「さて、望さん？」

「あ、ああ………え？」

「汝……来ておったのか？」

やっと少しだけ言葉を搾り出す二人。今はそれが精一杯だった。

そんな二人を前に先程、なのはの窮地を救った少女は望に軽く近寄ると、脱力した望の頭をトスツと人差し指で軽く突いた。

「少し言いたい事もありますが、今はやめておきましょうか。ちょっとお久しぶりです、望さんっ」

そう言うとイルカナは、いたずらっぽく微笑んだ。

ついに流れの一つが重なる

たとえ全ては遠くとも

それは確実に繋がり始める

その流れの名は……

### 第13章 〈重なる流れ〉（後書き）

本来の合流予定はナルカナでしたが、意外にイルカナの反響があったので急遽イルカナに変更しました。

感想板にて、随時感想を受け付けております。拙作のクオリティ向上の為に、是非ともご指摘など、よろしくお願いいたします。

## 登場人物能力値〔第13章現在〕

あくまでも聖なるかな風に仕上げただけなので、本編の強さとは関係ないかも知れません。

世刻望

Level . 12

HP : 1950

戦闘マナ : 0

攻撃 : 151%

防御 : 143%

理力 : 123%

抵抗 : 132%

オリハルコンネーム : 無し

オリジナル技

テンペストI

バランスダメージ

消費マナ : 2

M : 400 F : 400

対応パーマネントウィル：バルハの竜骨

柄尻を合わせ、双刀型にした黎明を回転させて黑白の竜巻を発生、その竜巻を相手に向かわせるアタックスキル。

応用が利きやすく、竜巻を制御して黎明の刃に纏わせ、相手に強襲を仕掛ける事も可能。

前者は殲滅性に、後者は限定状況下での速攻性に優れている。

白マナと黒マナのバランスダメージを与え、混沌の竜巻の作用により、自身の白属性を上昇させる。

前者のイメージはそのまんま竜巻。

後者のイメージはコミック『惑星のさみだれ』に出てくる『龍王棍』という技のイメージになってます。

ブレードラッシュUI

ノーコストアタック・Pe

消費マナ：0

M：220 F：0

対応パーマネントウィル：無し

望がパーマネントウィルを使用せず、己の研鑽のみで至った二刀の極致。

永きに渡る時の中、自身で鍛えた「肉体」で以って、実戦で磨き抜いた「技術」の全てを駆使し、敵を見透かすに足る「眼」で捉え相手へと斬り掛かる。神性は持たないが、己の全てを注ぎ込んだ刃は転生体にも通用する。

猛烈な勢いの連撃でありながらその一撃一撃が相手の死角、急所を的確に捉えるアタックスキル。

パーマネントウィルを使用しない為、属性を持たないこの攻撃はペ  
ネトレイトを持ち、更に相手の行動IPを下げる働きを持つ。  
尺の都合で泣く泣くカット(´；；；；；)  
出す機会を虎視眈々と狙ってます。

高町 なのは

Level . 4

HP : 95

戦闘マナ : 0

攻撃 : 4%

防御 : 7%

理力 : 15%

抵抗 : 18%

非転生体

備考 : ターン毎のマナ補充は1

封印術式I

ノーマルアタック

戦闘マナ : 3

M : 0 F : 70

なのはが最初に会得した魔法。  
マナが溜まりきらなくても発動は可能。ただしその場合は威力が格

段に落ちる。

実戦用のスキルではない為、マナコストの割に威力は低い。

封印術式II

ハイアタック

戦闘マナ：4

M：0 F：120

なのはの封印術式を遠距離に届かせる為に強化されたスキル。威力は上がっているが、集中に必要な時間、消費マナ共に増大しており、やはり実戦には向かない。

本当はコレを13章で出したかったけどイルカナ登場の都合でこれまたカット。

なのは成長フラグが次々と折られてるなあ………  
修業の日々などで巻き返しを謀ります。

ユーノ・スクライア

Level：5

HP：114

戦闘マナ：0

攻撃：2%

防御：1%

理力：7%

抵抗：25%

ヒーリングI

戦闘マナ：1

M：0 F：10%

自分の魔力を肉体に送り込む事で代謝を活性化し、傷を癒すサポートスキル。発掘を生業とするスクライア一族の御家芸であり、消費魔力の割には素晴らしい効率がある。

おまけ

高町 士郎

Level：54

HP：1206

戦闘マナ：0

攻撃：72%

防御：35%

理力：1%

抵抗：25%

神剣の欠片の加護を受けている、という事でこの能力に。後は積み重ねた経験で以って、ミニオンと渡り合う事が出来る能力値とさせて貰いました。

高町 恭也

Level : 25

HP : 950

戦闘マナ : 0

攻撃 : 51%

防御 : 21%

理力 : 1%

抵抗 : 29%

能力値の理由は土郎と同じで。未熟さを付加したらこんなもんか？

今回はこの辺りで、引き続き拙作をよろしく願います。

登場人物能力値〔第13章現在〕（後書き）

これが2010最後の投稿になります。

………いいのかこんなんです…？

2011も拙作が皆様の目に留まる事を祈りつつ、今年はこれにて  
来年もよろしくお願いします。

第14章 〈贖罪、名も無き墓標〉（前書き）

さて、やっとこ成人式も終わって落ち着いたけどこれ軽い年齢晒しじゃね？（挨拶）

お久しぶりです、炭斗です。

新年も10日以上過ぎたら何の有り難みも無いっす。

でも定型句ですが言いましょ。それも俺のジャスティス。

m 今年も私こと炭斗と本SSをよろしくお願い致します。m（| |）

第14章 〈贖罪、名も無き墓標〉

「イルカナ・高町か……何かエキゾチックな感じだな」

「吾は何故に高町レーメなのだ？」

「元になってる名前が黎明だからな。語感が日本語寄りなんだよ」

「むう……」

眉根を寄せたままレーメがおとなしく引き下がる。若干の苦笑を交えながら、名付け親である望が自らの頬を軽く掻いた。

「それにしても……」

話題のイルカナ本人が緑茶を軽く啜りながら望とレーメを見る。

「この家の懐の広さは驚嘆に値しますね」

「うむ！吾も常々そう思うぞ！」

「なんでお前が胸張るんだよ」

「それが吾だ！！」

「答えになってないし」

「ふふっ、ずっとレーメさんはそんな感じですよもんね」

「うむ。…………ノゾムよ、神獣の主よりも神剣の化身、それも分身の方が理解しているとは何事か！」

「また俺が悪くなってるし！」

そんな会話をしながら望たちの夜は更けて

「そうは問屋が卸さないの！！」

…………いかねえわな…………

「あら、なのはさん。どうしました？」

「どうもこうもないよ……」

怒髪天を衝く勢いでイルカナに迫るのは。対するイルカナは相変わらず緑茶を嗜んでいる。

そんなイルカナをなのはは『ビシッ！』と指差し、イルカナに問いかけた。

「……は……ッ……」

「私は誰？」

「ちーがーうーよー！……！」

髪をくしゃくしゃに掻きながらなのはが改めてイルカナに問い直す。

「今！イルカナちゃんがいるのはどこなのかな！？」

「望さんの部屋ですね」

「今夜イルカナちゃんが寝るのはどこ！」

「望さんの部屋ですね」

「じゃあなんでこの部屋に布団は一つしか無いの！？」

「……………ぼっ／＼／＼／」

「むっがああああああああああああああああああああああ  
あ……………！」

ついに暴れ始めるのは。イルカナは静観を決め込み、ストップパー  
は望とレームが担当する羽目になった。

「みんな警戒心がなさすぎる！」

「落ち着かんか！汝が何を言ってるのかさっぱりだぞー！」

「なのはちゃんが不機嫌だって事は理解したから取り敢えずおとなしくしてくれ！」

レーメがなのはを羽交い締めにするが、尚も暴れ続けるなのは。最初は困った様に宥めていたが、しばらくして流石に見兼ねた望は少しばかり眦マナツリを吊り上げ、なのはに寄った。

「なのはちゃん」

重みを持たせたその言葉に、暴れていたなのはもビクリと肩を震わせて動きを止める。

「時間も時間だから、あまり聞き分けが無いのは感心しないな」

「……にゅ……にゅめんなさい……」

望の言葉を受けてしょんぼりするなのは。

……が、このお叱りの半分はなのはにとってご褒美になりつつあった。

度重なる訓練や、不意に見せる優しさ。共に過ごす日常の中でなのははその心に『望はなのはの王子様』から『望はなのはの○○○様』

と言った刷り込みの更新を自ら無意識で行っていたのだ。

普通なら「そんな短期間でか？」となってしまう所だろうが、そこは半端に『ませた』九歳児。良くも悪くも『恋は盲目』である。

そんな危険思想が育ちつつある事など知らず、なのはの様子を望は反省と受け取り、優しい声音でなのはに語りかけた。

「自分のイライラをぶつけるだけじゃ、何を言いたいのか誰にも伝わらないだろ？ だったら、なのはちゃんが何を不満に思ってるのか言わないと」

「うん…」

「言ってるらん？」

「……望くんとイルカナちゃんが、同じ布団で寝るのがズルイと思っの」

「……え？」

望とレーメの声が重なる。イルカナは白々しさ全開で、あさっての方向に視線を泳がせている。その様子になのはは首を傾げた。

「じゃ？」

「……なのはちゃん…」

「ん？」

「…イルカナと共に寝るのは吾だぞ?」

……

……

……

…

~~~~~

パリンッ!

「あら?窓ガラスが」

「鳥か何かか?」

~~~~~

「でさでさ、望くん!次の休みにすずかちゃんの家でお茶会するんだ!よかつたら一緒に行かない?すずかちゃんも歓迎するって言っ

てたの！」

「照れ隠しに必死なのは分かるが顔が近いわ！それに吾はノゾムではない！！」

「なのはちゃん、もう大丈夫だから一旦落ち着こう。これじゃさつきと何も変わらない！」

先程の怒りは無くとも、それ以上の勢いで顔を真っ赤にしながらいメに詰め寄っているのは。そんな様子を見ながら実害の全く無いイルカナはころころと笑うばかりだった。

「あらあら、これが俗に言う『テンパる』と言うヤツですね」

「イルカナも悠長な事をのたまっておらずに手伝わんか！！」

「なのはさん、取り敢えず深呼吸です」

すーはーすーはー

「で

「お茶会の誘いだけど……ちょっとその日は用事があってね」

望のその返事を聞いた途端、クタクタと脱力するのは。それを見る望も申し訳なさそうに頭を下げる事しか出来ない。

「埋め合わせは絶対するからさ。今回は失礼させて貰って……いいかな？」

『埋め合わせ』に反応を示すなのは。のそりと起き上がると濁り切った眼で望を見て、にんまりと笑う。幸か不幸か、望はその濁った眼に気付かない。

「じゃあ……」

「うん？」

「……やっぱりその時まで待って貰うの」

なのはの言葉に、望は余り深く考えずに頷く。

「わかったよ。ちゃんと聞くからね」

「言質とつたの！！レーメちゃんもイルカナちゃんも聞いたね！？」  
鬼の首でも取つたと言わんばかりに、声を張り上げるのは。レーメは若干引きながら、イルカナはなのはと同種の笑みを浮かべてそれに同意した。

「あ、ああ……吾も聞いたが…何故にその年齢でそんな言葉を知っておるのだ…？」

「そんなの良いの！イルカナちゃんも聞いたよね！？」

「望さん…言質、確かに頂きました」

「……?…まあ、うん…?」

未だに理解が追いつかない望はポカンとしたまま首を縦に振った。

~~~~~

ドシャツ!

なのはが前のめりに倒れ込む音が森の中に響く。

場所は自宅に近い森。望が『変則的状況での実戦に』と始めた模擬戦だった。

「違う、背後に回り込まれたら向き直るより先に気配に向かって牽制だ!」

「はいっ!」

望からアドバイスを受けた直後、再び望の姿が消える。

(速い!?!いや、違う!)

木の陰を縫うように近づく望の気配。それがなのはの真後ろに迫った。

「ふっ…！」

気配に向かってレイジングハートの柄を跳ね上げるよりも先に、自分の正面に背中を向けて気合を込める望の姿を見る。

「え!？」

グッ…

(しまっ……！)

ゴドン…!

「がふっ…!？」

構えた望の肩口から強烈な衝撃が与えられる。一応は手加減する為に、その衝撃波はなのはの身体を抜けるように焦点をずらされている。

とはいえ、それで完全に威力を削ぐ事など出来る訳が無く、結果として殺し切れない衝撃でも、なのはの意識を刈り取るには十二分な力があつた。

当然のように今回の模擬戦も、望に軍配が上がる事となる。

~~~~~

「……………ん……………」

「あ、気が付いた？」

「…あれ？…私……………」

「まだ動けないだろうから、悪いけど我慢しててね」

そう言いながら望はなのはを軽く背負い直す。そしてしばらくの間、望の背中に揺られながら、なのはは望から受けた攻撃で気を失った事を思い出した。

「…また負けちゃったかあ……………」

声に出してはいるが、実情は全く悔しくなんかない。むしろ『私の○○様はこんなに凄いな』という誇らしさが膨らむばかりだ。

とはいえ、気になる事はある。

「ね、望くん」

「ん？」

「最後のいきなり前に現れたヤツ、どうやったの？」

「攻撃？それとも動き方かな？」

「どつちも」

少し欲張りかとも思ったが、思い切って聞く事にする。これは力を付ける為に必要な欲張りだ。

望もその考えには異論は無い。歩みを止めずに背中なのはに説明する。

「まずは動き方だね。アレ、動いたのは最初だけなんだよ」

「え!?!」

なのはの驚き方に望は軽く笑いながら続けた。

「『気配を殺す』ってあるだろ?それを更に応用させるんだ」

「どつやって?」

「まずは自分の気配を完全に殺す。で、魔力を上手く操って自分と同じ大きさにする……」

「自分の気配もなくすから上手に隠せば分からないんだね」

「そう。で、その作業をする直前に軽く動く事で相手に『自分は何から動くんのだ』ってイメージを植え付けると」

「その動きからもっと相手が誤解するんだね」

ひらめく様になのはが続ける。望は満足げにひとつ頷き、それに続いた。

「そういうコト。なのはちゃんにはまだまだ難しいから、今回はそんな方法があるって事だけ、覚えておいて欲しかったんだ」

「いつか、教えてくれる？」

「覚えられるくらいに力を付けたらね」

「うん！」

そうした話をしながら、やがて自宅が見えてくる。レーメが駆け寄るのを見ながら、望は夜のなのはの訓練メニューに背後へのカウンター技を追加させる事を考えていた。

~~~~~

そんな訓練を続けていた数日後、高町家の前に車が一台止められる。

「じゃ、行つてきまーす！」

「行つてきます」

そう言つてなのはと恭也が高町家を出発する。なのはは先日の約束もあり、駄々をこねる事もなくすんなりと出掛けて行った。

「やけにあっさりしておつたな」

「ま、成長したって事じゃないか？」

「だと良いが……」

懸念を示すレーメに望は気負った風もなく返す。それを後悔する日は近いのだが、今の望は知る由も無い。

「とにかくだ。イルカナ！」

仕切り直しの声を上げ、望は今日の都合を作らせた原因である少女の名前を呼ぶ。その声を受けたイルカナが軽い足取りで望に寄って来た。

「はい、準備は出来てますよ」

「OK、手早く終わらせようか。レーメも大丈夫か？」

「無論だ！」

「じゃ、最終確認だ。今回の目的はマナホールの原因を作り出した分枝世界を、外側から確認する事。潜入はどんな危険が伴うか分からないから今回は見送りだ」

「加えて、分枝振動が可能な状態かの調査にマナバーストが起こる可能性までの残り時間の調査……か……イルカナよ、場合によっては全て終わらんかも知れぬぞ？」

そんなレーメの言葉にイルカナは軽い調子で答える。

「全ての用事の冒頭に『可能であれば』という言葉が付きます。あくまで今回は、確認がメインだと思っていて下さい」

「わかった。それじゃ、絶対座標の確認も終わったな？行くぞ!!」

「応っ!!」

「はいっ」

~~~~~

そして、三人は世界を離れる。

道中、特筆すべき事も無く、一行は目的地に辿り着く。その眺めに望が思わず声を漏らした。

「…ココが原因の分枝世界……」

「まるでアリの巣だな…」

レームが率直な感想を抱き、それを口にする。イルカナがそれに頷きながら、望たちに説明をし始めた。

「この分枝世界がマナホールを生み出す原因であり、同時に今現在、マナバーストを引き起こす可能性が最も高い世界……彼らの間で“ミッドチルダ”と呼ばれる世界です」

「……ミッドチルダ……」

反芻する様に口の中でその言葉を転がす。望がミッドチルダに繋がる無数のマナホールを見ている時、レーメがふと何かに気付いた。

「……ん？イルカナよ、あの世界から無数に伸びている系の様なモノは何なのだ？」

「ああ、ソレですか？……それは言ってみればリーダーですよ。ソレに他の分枝世界が引つ掛かると、あの世界がそれを元に新しいマナホールを開けるんです」

「……はた迷惑な触手だな」

「本質はそうかも知れないけど、もう少し言い方を考えてくれないか？」

呆れ交じりの望の声。しかしレーメは気にした風もなく、マナホールに視線を移していた。

「望さん」

唐突に、聞き慣れない真面目な声でイルカナが望に話しかける。

「…どうした？」

自然と、身構えてしまう。

「どづいつつもりですか？」

主語も何も無い、イルカナの言葉。

しかし望も、傍にいるレームも、それが何の事かを理解してしまう。

「…何がだよ…？」

それでも抗ってしまうのが、哀しき性という物か。

「言うまでもないでしょう。高町なのは、あの少女の事ですよ」

それでもイルカナは、容赦なく刃を突き立てる。

「なぜ、彼女を鍛えているのですか？」

「それは…」

何かを言おうとする望の言葉を、イルカナは遮りながら更に続ける。

「私達はエターナルです。いくら神剣を所持しているとはいえ、ほんのひと欠片…それも扱い易くする為に変質された物などにかまける必要などありません」

「…すまない……少しばかり、懐かしくてな…」

「違いますね」

望の呟きすら、イルカナは切り捨て責め立てる。

「かつてのあの子達への贖罪でしょう。過激派のエターナルに強醒体にされた、あの使い捨ての転生神たち……」

まずそれに反応したのはレーメだった。

「馬鹿者……!」

「イルカナアあああああ……!!!!」

『強醒体』の言葉を聞いた瞬間、望が爆発した。

胸倉を掴み、イルカナに殴りかかる。しかし殴る直前で咄嗟にレーメが望の袖口を引っ張り、なんとか思い留まる。

「……………つち……!」

「……ノゾム……」

レーメが望に声を掛けるが、望はろくに反応をしない。

「……分かってる……分かってるよ……」

レーメとイルカナから顔を背け、そう自分に言い聞かせる様に何度も何度も呟く。レーメにはそんな望の背中が妙に煤けて見えた。

第14章 〈贖罪、名も無き墓標〉（後書き）

同時進行で、この裏側ではなのはと『あの娘』が絶賛戦闘中ですが、スパロボみたく事後報告にするのとsideなのはにするのとどっちがいいですかね？

ご意見待ってます。

では、今回はここまで。次回も皆様の眼に触れて頂ける事を願いつつ……

第15章 〈新たな布石、牙剥く獣〉（前書き）

さて…やっとご投稿にこぎつけた。

お久しぶりです、炭斗です。

書きにくい回は進まないっすね。初めて知りました。

多少強引な展開ですが、目をつむって欲s……無理ですネ。精進します……。

さて(二回目)、頑張ってこれからも投稿しますので、よろしくお願ひします。

ではごっげ。

## 第15章 く新たな布石、牙剥く獣く

「……少しは落ち着いたか？」

レーメが冷酷にならないまでも、少し冷めた口調で望に話し掛ける。その同情も責め立てもしない声音が、今の望には何よりも心地好い響きだった。

「……ああ、取り乱して済まなかったな……イルカナも、ゴメン……」

「構いません。私がそうなるよう仕向けたんですから」

その言葉を聞き、レーメの視線に怒気が籠る。反対に望は得心したかの様に、全身に漲らせた緊張を解いた。

「……やっぱりか」

「ええ、鍛練の様子…見たのは一度きりでしたが、貴方がどれだけ彼女を死なせたくないかが伝わりましたよ」

「イルカナ、吾らの中にアレを引きずってない者などおらぬ。汝とて例外ではない筈だ」

非難を織り交ぜたレーメの言葉にも動じる事なく、ソレを想定していたかの様にイルカナは言葉を返す。

「勿論ですよ。あれ程の出来事はそうそうは忘れられない……いえ、忘れたくないと言っべきでしょうか」

「イルカナ……」

「私達だけではありません。あの一件は聖賢者ユウトや永遠のアセリアの逆鱗にも触れました……子を持つ親の真骨頂、でしょうね」

「……すまぬ。吾も言葉が過ぎたようだ」

レームがイルカナに頭を下げる。それに頷く形で返事としたイルカナは、大きく一つ柏手を打つ事で表情を一転させた。

「さて！自分から振って何ですが、この話題はお開きにしましょうか！」

普段通りの明るさに戻ったイルカナの様子に、表情を和らげた望は同意を示し、レームもそれに倣った。

~~~~~

「さて、大前提であるミッドチルダの確認は済みましたが……どうします？」

「マナバーストの危険とかも調べるんじゃないか？」

尤もな意見を述べる望に、イルカナはチロリと小さく舌を出し自分の頬に手を宛がう。

「以前の調査でマナの濃度を調べてます。実は今回は濃度の変化を見て、成長率を調べるだけなんですよ。さて……………」  
終わりました」

「「はヤッ!」」

自分達は本当に見る為だけに来たのかと目眩に見舞われる望とレーメ。対するイルカナは特に悪びれる事もなく、笑みを浮かべながら望を見ていた。そんな中、レーメがふと何かに気付いた様に眼を見開く。

「さて、これからの予定も無い事ですし……………どうしますか?」

軽く尋ねるイルカナだが、その返事はレーメから真剣に返される。

「予定が無いならば、早々にナノハのいる世界に戻る事を吾は推奨したい」

「あら?世界の見学ツアーとかはしなくても?」

「アホか!そんな悠長な事は出来んわ!」

レーメに若干の焦りが見て取れる。不審に思った望は尋ねる事にした。

「どうした?あの世界に何かあるのか?」

「違う。飽くまで憶測の域は出ないが、パーマメントウィルの危険性に新たな項目を追加せねばならん」

レーメの焦り様に、望が暫し思考を巡らす。そしてとある可能性に行き着き、その顔を青ざめさせた。

「……………同時起動か！」

「それだけでは無い。マナ……………魔力を認識できる者がパーマメントウィルを狙う可能性も十分に考えられる」

その言葉にイルカナもハツとなる。

「……………盲点でした。ある程度の見積もりはしてましたが、『神剣が無い』という情報を念頭に置きすぎていましたね」

「『パーマメントウィル』としての価値を見出だせずとも『魔力の塊』としての価値は存分にある。事態がすぐに起こるなどという事は有り得ぬが、対策を講じねばなるまい」

「ミッドチルダの監視の網をかい潜り、来るまでに時間がかかってますから……………」

イルカナの言葉に望は懐中時計を見る。なのは達の世界に時間を合わせた発条式ゼンマイのそれは短針が四を指し示していた。

「……………ルートは来た時よりハッキリしてるから、辿り着くのは午後五時頃か……………」

「そうだな。下手に焦れてへマをやらかすでないぞ」

レーメの注意に軽く頷き、望はその身を翻らせた。

「戻るぞ!」

~~~~~

「……………つく!全員いるか!」

人気の無い公園の木の陰に隠れる様に着地した望が周りを油断なく見渡す。発した言葉には緊張を和らげる為におどけた調子のレーメが返した。

「三人だけで全員も何もあるまい。問題ないぞ」

「……………完了、と……………望さん、マナを調べましたが今のところ発動体はありません」

イルカナの言葉に、今度こそ望は身体の色を抜く。

「そうか…」

「—先ずは安心か……………ノゾムよ、人気を感じない内に退散するぞ」

「勿論だ。士郎さん達も心配するだろうし、さっさと戻ろう」

そう言いながら望は戦闘装束を解除し、見た目相応の少年らしい普段着に戻る。イルカナとレーメもそれに倣い、普段着に戻った。

「えいつ」

一歩目を踏み出した望の左腕に、唐突にイルカナが絡み付く。

「っと、どうしたんだ？」

「軽いスキンシップですよ。構わないでしょう？」

可愛らしい仕草で、望の顔を覗き込むイルカナ。その様子に不覚にもグラリと来た望は頬を赤らめながら上を向き、

「……まあ、好きにしてくれ」

それだけ言う事が限界だった。

「はい」

一応の恥じらいはあったのか、イルカナも頬を染めながら望の腕を抱き、その掌に己の掌を重ねた。

ぎゅむっ！

「あだあつ!!」

右足を踏まれた様な痛み。まあ、実際踏まれているのだが。

「な、なんだよレーメ!？」

「別に」

絶対零度に近いその言葉に、さしもの望も背筋を冷やす。そんな中でレーメは強引に望の右腕を取った。

「れ、レーメ?」

「軽いスキンシップだ。構わぬだろう?」

ぷくりと頬を膨らませ、不機嫌そうに言いながらも、望の腕に顔を当てて望に体重を預ける。臃げながらもレーメの言わんとする事を察した望は、何も言わずに高町の家へと足を向けた。

道中のすれ違う人々が送る視線の生温さを早く忘れたい望だった。

~~~~~

「あら、おかえりなさい三人とも」

「うむ、ただいまだぞモモコよ」

「あ、桃子さん。ただいま」

「ただいま戻りました」

三者三様に声を返す。桃子は満足そうに一つ頷き、それから急に望へと詰め寄った。

「ねえ、望くん」

「な、なんででしょうか……」

「魔法の力って具体的にはどんな感じなのかしら？」

「近いです近いです……具体的に、とは？」

「うーん……あ！ゲームとかで攻撃魔法とかあるじゃない。あれもだけど、サリーちゃんとかの『漠然と何でも起こせるヤツ』も魔法でしょ？どっちの毛色が強いのかなーって思うのよ」

上半身をこれでもかと引いた望に、ずいっと身を乗り出し、望に詰め寄ったままの桃子。そんな二人の間にレーメの手が入り、それに伴いイルカナが仲介役の姿勢を取った。

「まずは落ち着くのだ」

「あ、ごめんなさいね。つい自分を見失っちゃって」

レーメの諫言に桃子はようやく冷静さを取り戻す。桃子のクールダウンを確認したイルカナがすかさず言葉を紡いだ。

「まずは桃子さんの質問に答えますが……桃子さんの基準にしますと、我々の魔法の力とはゲームで使われる様な物が一番近いですね」  
その言葉に桃子が目に見える落胆の色を示した。そのあまりの落ち込み方に思わず望が声をかける。

「……………どうしたんですか？」

聞いたものの、桃子からの返事は無い。どうした物かと望が首を捻った所に、廊下から美由希が姿を見せた。

「この永久ねくとより 黒き刹那せくとを ……おや？望くん、帰ってたんだ」

「あ、美由希さん。ただいま……………ちょっと聞きたい事があるんですが」

「あら、珍しい……って、ああ……………母さんだね」

意外そうに呟くが、部屋を見た時に力無くうなだれた母親を見て合点がいった様に一息ついた。

「桃子さん、どうしたんですか？」

「いや、それがね」

「ふむ」

「店に来た昔の同級生に『老けたね』って言われたらしいのよ」

ぐっさあ!!!

その時、望たちは確かに刃物が肉を刺し貫く音を聞いたという。

「ま、例のイベントも間近だから起死回生狙えるし、大丈夫じゃない?」

気楽そうに告げながらリビングを去る美由希。残された望たちは何とも言えない表情をしていた。

蛇足ではあるが、その夜の美由希の鍛練はとある人物の要請によって、苛烈を極めた事をここに書き記しておく。

~~~~~

扉を開けると、そこは腐海だった。

バタン！

「げほっ、がふっ！」

「眼が！めがああー！！」

「くうッ！……肺に少し入った……！」

各々が好き勝手にリアクションを取る。微かに扉の中からつめき声も響いて来ている気がする。

おかしい。扉には確かに『なのは』のプレートが掛かっている。

「まさかこんな所に次元の扉が！？」

「そんな訳ないでしょうが！助けてえー！！！！」

中からユーノの切実な悲鳴が聞こえる。意を決した望は再びドアノブに手を掛けた。

「……うぼあああ……」

…その光景に、言葉を失う。

部屋の中央にはこの部屋の主である筈の少女。その少女はもはや言語では語り尽くせない『ナニカ』と化し、その場に蹲っていた。

「……………ナノハ…？」

レームが唇を震わせながらなのはに話しかける。だが、なのはは少し身をよじっただけで、後は動かなくなった。

「……………一体何が……………？」

絞り出す様な望の呟き。その言葉が届いたのか、なのはの身体がビクリと震えた。のそのそとなのはがその身を動かし、ようやくその眼が望を捉える。

「……………あ……………」

途端、なのはの双眸にみるみる涙が溜まっていく。

「なのはちゃん……………」

その様から、望は少女が何かを失敗した事を悟る。それを理解した望は何も言わず、なのはの頭を優しく抱きしめた。

「……………大丈夫だよ。なのはちゃん……………俺は、咎めない……………」

それが少女の限界だった。堰を切った様に大声で泣き出すのは。自分の服が濡れる事も厭わずに、望はなのはを見遣っていた。

「……だから汝はスケコマシと言っに」

「天然モノほど始末に負えない物はありませんね」

外野、黙ってる。

「「なのはの泣き声が聞こえたんだが!?!」」

「フラベルム!?!」

「「ぬあああー!?!」」

愛娘連合軍、退場。

「……シリアス返せよ……」

~~~~~

「…って訳で、ジュエルシールドを奪われてなのはが落ち込んでたんですよ」

「もはや腐っておったぞ」

「まあ、そんな感じでしたが」

なのはもなんとか落ち着き、三人はユーノから説明を受ける。暫しの沈黙を破り、レーメが腕を組んだまま思った事を口にした。

「…懸念通りとはな。運命も中々にままならぬという事が……」

「懸念？」

ユーノが素朴な疑問を口にし、望が簡潔に答えた。

「今日ちよつと出掛けた時にね。レーメがもしかしたらこんな事態があるかもって予想をしたんだよ」

「なるほど。それが敵勢力の出現と」

「それだけじゃないけど、まあそんな感じかな」

「……ちよつと待って…望くん、レーメちゃんと出掛けたの？」

妙な部分に反応するなのは。別に隠す必要すら感じないので、望は何の気無しに応じた。

「いや、イルカナとレーメと俺の三人だけど？」

「……………ふーん…」

それだけを告げてそっぽを向くのは。望は訳も分からずに首を傾げる他無かった。

「流石だな」

「流石ですね」

「??？」

「……………まあ、とにかく。なのはが負ける程の実力を持っている……って事か？」

脱線しかけた話題を望が強引に戻す。その言葉にユーノは首を横に振った。

「言うなれば、試合に勝って勝負に負けた……と言っべきでしょうか」

「?」

「『相手を倒す事』に躍起になり過ぎて、『ジュエルシードの入手』を相手に許したんですよ」

「目的と手段の入れ替わりだな。ナノハの年頃では仕方あるまい」  
少し気難しそうにレーメが言う。それを聞いた望はやっと合点が行き、なのはに正面から向き合った。

「なのはちゃん」

「はい……」

「相手に勝つ事に、夢中になり過ぎたんだね？」

その言葉にしゅんとなるのは。そんなのはを望は責めず、頭に手をぽんと置く。

「なのはちゃんは今日、ひとつの失敗をしたね」

「うん……」

「そして今、なのはちゃんはその失敗を失敗したと反省してる」

「うん……」

「なら、またひとつ君は強くなれる」

「…ふえ？」

少しばかり唾然となるのは。望は気にせずになのはの頭を優しく撫でる。

「失敗つてのはね、強くなる為に必要なんだよ」

「強く……なる」

「うん。次に同じ失敗をしなければ、それは『失敗しない』強さを

手に入れた事になるだろ？」

その言葉で、なのはの瞳に力が戻る。

「……うん！」

「それもだけど、この部屋に入った時のなのはちゃんを見て、ユノに話を聞いて……やっぱり心配した。なのはちゃんは元気な時が一番輝いてるからね」

「うん！！」

ついでに余計な濁りも入る。

「だから……」

そして望は撫でていた手をなのはから離す。

「あ……」

名残惜しそうに離された手を見るなのは。そんななのはの様子などつゆ知らず、望は人差し指と中指をピンと合わせて立てる。

そして、普段ナルカナや沙月にやっている要領で、深く考える事もなく。

その指をなのはの唇に押し当てた。

「!!!!!!??!!??!!??!!??!!??」

「強くなるう。心も身体もね」

最早なのは何も聞こえない。急速な勢いで脳内を黒い靄が覆う。

「望さん……」

「ノゾム……」

「「どうなっても知らんからな（知りませんからね）」」

諦めと諦めと諦めを織り交ぜたレーメとイルカナの視線を受け、背筋にずくりとした奇妙な予感が走る。不審に思った望はなのはにした事を改めて考え

ガシィッ!!!!!!

る前にその手をなのはに万力の力で固定される。

そして、

「んむっ…ちゅぷう……」

夜明けは己の在り方を知らず

ついにその身を野獣に晒す

前門に構えるは不屈の餓狼

後門は未だ、開かずのまま

第15章 〈新たな布石、牙剥く獣〉（後書き）

次回は多分R17くらいじゃなかるつか

## 第16章 く接敵、勝利と敗北く（前書き）

これまでのPV履歴だす（2011/2/6現在）

### 累計

PV：46 / 973アクセス

ユニーク：9 / 852人

### パソコン

PV：23985アクセス

ユニーク：7979人

### 携帯

PV：22988アクセス

ユニーク：1873人

……？

お久しぶりです。炭斗です

PVとか晒してみたりしました。大体平日は50ユニークくらい。更新したら300ユニークくらいでした。

まずは平日ユニークを100まで伸ばせる様に頑張っていきます！



## 第16章 く接敵、勝利と敗北く

( のっ、望くんのっ！指、唇！？ゆくちッ！？あつでも…幸せ…  
だな……………もうちょっとくらいは……………こっして…ん……………っ！離れ  
る？指が……………駄目！ダメだよ！！せっかく！折角なのに！！……………離  
さない、離したくない！！でもっどうしたら！？……………ッ！！！！ )

ガシイッ！！！！

「んむっ…ちゅぶう……………」

そして、世界は凍り付く。

精々がうつとりして腰砕けになる程度だろうと、そう高を括っていたレーメは目を見開き硬直。イルカナもなのは予想外の淫靡さに感心して顔に手を宛てがい、静観に徹する事にした。

「れろっ…んちゅ、ぶはっ」

指先の指紋ひとつひとつに至るまで、丹念に何度も舌を這わせる。

「ちゅぴっ、あふっ……………んむ…んくっ！はふう……………ちゆる」

硬直して動けない望の人差し指と中指を、なのはは舌で強引に押し開いて、更に望を味わおうと指を甘噛みした。

「れるれるっ……………ぴちゃ、ちゅっ…はう…」

ほんのりと桜色に染まった頬に、蕩けて潤んだ瞳。本当にコイツは9歳なのかと疑いたくなる様な、色気を存分に醸し出している少女に、しかしそれを指摘できる者はこの場にいない。

少女の口腔で温められ、程よく柔らかくなった指先。その爪の隙間に歯を入れて、僅かに残った爪垢をなのはが削り取る。望の一部であるその味に、なのはの背筋がぶるりと震えた。

「ひゅむう！！……………んあっ……………く……………ぷはっ…はあぁう……………」

ようやくその唇を望の指から離す。指先から唇に架かった、てらてらと光る唾液の掛橋をなのはが確認したのも束の間、再びその唇の中に指を招き入れる。

「はむっ…ちゅ…ちゅぞぞっ！……………んくう……………ごくっ…んふ……………ぶあ」

指の隙間の僅かな谷間に溜まった自分の唾液を吸い取り、その勢いそのまま嚥下。

自分のものである筈のそれが、望というフィルターを通すだけでこれ程まで熱く、また愛おしくなれる事になのはは感動すら覚える。それでも舌が運動をやめる事は無く、逆にその感動は動きを加速さ

せる為のスパイスにしなければならない。

「ふ……………れぷっ……………ねろん……………れるれるっ……………むちゅ」

先程とは趣向を変え、望の指を舌の裏側に回し、舌の表面より更に柔らかい場所で望の指を転がす。ある程度小馴れてくると、今度は頬の裏側まで指を導き、歯茎と頬で指を刺激した。

「……………ぷはっ……………」

今度こそなのはが唇から望の指を解放する。そこには先程よりも遙かに濃厚な橋が幾重にも見て取れた。唾液は望の指だけに留まらず、その手全体に広がる。それでも直接啜えられた望の人差し指と中指の様相は凄まじく、長時間の愛撫にふやけ切り、濡れた指先特有の深く刻まれた皺に溜まった僅かな唾液が、その本来の発生源から糸を引いている。

「……………舌……………疲れちゃった……………」

糸を引いたままの口からぽつりとなのはが言葉を漏らす。少し困った表情で望を見上げ、その視線にようやく望の時が少しだけ動き始めた。

「……………え……………?……………あ……………と……………?」

尤も、混乱の最中に止まった時間から解放されただけなので、再び動いた所で混乱が続くだけではあるのだが。

そんな混乱などお構いなしに、なのはの表情が再び輝きます。

「……そうだ！これなら……」

言うや否や、なのはは望の乾き始めた指に再び唇を当て、

一気に限界までその指を口の中に突き込んだ。

「んぐっ……！んっ……んっ……んっ……んふっ……！」

そのまま顔を前後させ、なのはは指を喉で愛撫する。

「……………っ……！」

ちゅぽんっ！

ようやく事態を飲み込み、正気に戻った望が手をなのはの口から引き抜いた。

「んぶあっ……！」

「なっ！なっ……なっなっ……なんっ！？」

まともに言葉を発する事も出来ず、呆然となのはを見る。そんな望の様子に気付かないなのはは、潤んだ瞳を更に情熱に焦がしていた。一度燃え上がった以上、最早少女のリビドーは止まらない。

「いやあ……やああ……」

イヤイヤと首を振りながら、望の服に縋り付く。桃色に潤んだ瞳に涙を湛え、上目遣いに望の顔を覗き込んだ。

「いやつて……え？なにっ……が!？」

予想だにしないなのは行動に、いくら正気を取り戻したとはいえど、望は普段と掛け離れたなのは戸惑うばかりである。

「やあなお…もつと……もつとお……」

混乱した望などお構いなしに、なのはが必死におねだりする。その涙ながらの訴えに、望に残された何とか稼動する理性が反応を示した。

ただ、その反応に問題点があったとすれば、

すっ

『放っておけないお人よし』の方面に発揮されてしまった事だろう。

「はむっ!…!」

嬉々として指先にしゃぶりつくなのは。その笑顔に望も僅かに表情を和らげた。

「ド阿呆おー！……！！！」

ゴキヤツ！！

~~~~~

「ごめんなさいなの」

数分後、見事なたんこぶの塔を頭に築いたのはがどこか満ち足りた表情に、つやつやの頬で胸を張りながら正座していた。その様子に先程から火を噴きつ放しのレーメが再度噴火する。

「本当に反省しておるのか！？」

詰め寄るレーメにも動じずに、なのはは自信満々に答えた。

「反省はしている。後悔はしたくない」

「強くなりましたねえ……」

「こんな強さなど求めておらんわあ！！」

ホロリと漏らしたイルカナの呟きに、再三レーメが噴火する。望は

手を洗う為に、先程洗面台へと赴いた。

それまでの流れを切る様に、イルカナが主語も無くなのはへと問い掛けた。

「で、どうでした？」

言われた瞬間、なのはが無表情になる。先程の行為を反芻、少しばかりの間を置いた少女は相好を『にへら』とだらしなく崩し、

「「うちそうさまでした……」

それだけ言うとお花畑へと旅立っていった。それを見たイルカナは満足げになのはを見遣り、レームはというと、

「……………」

逆光を纏う無表情で右手を振り上げていた。

~~~~~

「お待たせー……………つて、また増えてないか？」

望が戻ると、最後に見た時より更に三段ほど頭の塔を増築させたな

のはが、うつとりとした表情で虚空を見詰めていた。

「……………どしたの？」

「絶賛トリップ中。ですね」

何気なく告げるイルカナに、怒る気力も失せて若干燃え尽き気味な  
レーメが続いた。

「……………今日は最早話にならん。イタチよ、汝から相手について詳し  
く聞きたい」

話を振られたユーノが、棚の上にあるレイジングハートを持って来  
る。

「「「「？」」」」」

「話を聞くよりも実際に見た方が早いでしょう。デバイスには記録  
機能もあるので」

そう言いながら茶菓子を載せて来たお盆にレイジングハートを置く。

「……………微妙に便利だな」

「それは褒めてるのか？」

「判断し難いのだ。仕方あるまい」

そうこうしている内にレイジングハートから光が溢れ、立体映像が  
顕れる。

「「「おおー……」」」

三人の口からそれぞれ漏れる感嘆の声に、ついつい得意げになってしまふユーノ。

そして、映像が流れ出した。

~~~~~

二人の少女が対峙する。一人は見慣れた居候先の末娘。もう一人は

……

「あの年頃でこの格好か……」

「若干痛々しい……ぞ？」

「全部自分達に跳ね返るから何も言いませんよ」

「「ぐはあっ！」」

「………続けますよ」

映像は止まらない。

「ふっ……！」

「……………！」

なのはが飛行魔術を展開、対する少女がそれに反応して斬撃型の遠距離攻撃を放つ。レイジングハートが防壁を張り、魔力同士で爆発を起こした。

「……………！」

黒い少女は爆発が収まる前に距離を詰め、なのはの首筋に刃を突き付けようと振りかぶる。その挙動を気配だけで見極めたなのはが爆煙の中から右足を即座に跳ね上げ、鎌の棒に当たる部分を蹴り飛ばして地面へと着地、全身をバネにする様にしなやかに姿勢を下げた。

「……………！」

突撃の気配を察した少女はデバイスを蹴り飛ばされた反動を利用して距離を稼ぐ。視線をなのはに固定したまま滑空、三十メートル程の距離を置いて改めて少女達は再び対峙した。

「……………！」

「……………！」

互いに無言。空気すらも動きを止めた様に音が止む。

ただ、静寂。

「ふッ!!」

先に動いたのは、なのは。飛行魔術の出力を全て相手へと向け、更に自身の筋力を上乘せする。限界まで腰を落としたそのロケットスタートに、望は舌を巻いていた。

「実戦成長型……突撃と同時にバリアを張って防御も兼ねる、か…… たった一回の実戦でここまで……」

「……一番伸び代がある反面……」

「一番命のリスクが高いですね……」

レーメとイルカナの言葉に、暗澹としながらも心根では素直に教える子の成長を喜びたい。望は複雑な表情で映像を見る。

「くうッ!!!?」

なのはのロケットスタートに驚愕したのも一瞬、何とか上体を捻り、更にデバイスを敢えて前に突き出す事で起動を逸らしにかかる黒衣の少女。

ギャリン!!

確かな手応えと共に軌道がズレる。その結果に少女は笑みを浮かべ、

ドゴオッ！！！

「ガ……はアッ……！？」

途端、脇腹の衝撃。

ロクな受け身も取れず、少女は森の中へと吹き飛ばされた。

「……自分が砲弾になるが故の利点……」

レーメが呟く。あの少女には何がどうなったかなど、理解できないだろう。

だが、仕掛けた側ならば解る。仕掛けた側の情報だから解る。

なのはと少女が擦れ違う瞬間、なのはがレイジングハートを無理矢理に振るって少女の脇腹を強打したのだ。

だがそこは相手もさる者。バリアジャケットと咄嗟の魔力障壁で決定打になり得るダメージは無いらしい。

更に続く映像だが、ユーノがレイジングハートに触れて再生を止め

る。

「……………」

「あの娘を弾き飛ばした先にジュエルシードがあつて持ち逃げされた、と」

「まあ、有り体に言えば」

先の話を併せ、結論づけたレーメにややげんなりとしたユーノが言う。

「まあ、ナノ八があれば意気込んだならば次はあるまい。汝も戦いのセオリーを覚えておく事だな」

「はい！」

意気込むユーノに、望は少し疑問を投げ掛ける。

「それよりも……」

「？」

「いや、なんでもない」

気のせいだろう。そう望は自分に言い聞かせ、浮かんだ疑問を飲み込んだ。

~~~~~

「……………とまあ、そんな行事でな。こればかりは君達にも参加して貰いたい」

「いえ、こつちからでもお願いしたいくらいですよ」

翌朝の高町家、リビングで朝の鍛練を終えた望と士郎が何やら話しかっていた。

「…ういー…」

のそのそとした動きで歩いて来たレーメがフローリングの溝にべちゃりと躓く。そのまま再び夢路に旅立つレーメを望が慌てて起こしに行った。

「……………願わくば、この平和を…か」

誰にも聞こえない様に、小さく士郎が呟く。その手に握った拳は、果たして何の為を思ってたか。

一瞬、ほんの一瞬だけ表情を陰らせた士郎は、顔を上げると普段の表情に戻る。パンパン手を叩き、一日を始める為に軽く気合を入れた。

「さ、今日も頑張るか！望くん、なのははどうした？」

「寝てますね。少し疲れてたみたいだから今朝は控えました」

「そうか。レーメちゃん、起こしてきてくれないか？」

「既に来とるぞ？」

意識を覚醒させたレーメがクイツと下を指差す。

「むゝ ああゝ ああー……………」

そこに全身を引き攣らせて悶えるのがいた。

「…………？」

事情を飲み込めない士郎が思わずなのはを指差しながら望を見る。

「多分…筋肉痛…………？」

「…………あのロケットスタートからの無理な姿勢変更。当然といえば当然か」

呆れて肩を竦めたレーメが独白する。一方の士郎は望の言葉に一応の納得を見せた。

「まあ、本格的に始めたのは最近だから仕方ないだろう」

まずは筋肉痛の為のマッサージからか、と士郎がなのはのケアを考  
えながらコーヒーマーカーをセッティングし始めた。

今日も、高町家の一日が始まる。

記録の向こうではあるが

夜明けは新たな邂逅を果たす

その命の在り方に

果たして何を思っのか

第16章 く接敵、勝利と敗北く（後書き）

「ふっふっふ……………」

「…不気味ねえ、何笑ってるのよ」

「作業完了おー！今から会いに行くわよー！！」

「え！？ちよつと！」

「じゃ、私こんな所で油売ってらんないから！！」

「待ちなさいよ！私ココに一人ぼっちなわけ！？」

「私と交代で派遣させるから問題ナシよ！あんにゃろ、いきなりリ  
ンク切りやがって！」

「そういう意味じゃないわよ！！私だって会いに行きたいのに！！」

「じゃあねー！待ってて、望ー！！」

## 第17章 く果たせし再会く（前書き）

……休みの筈やのに余計時間無くなるってどういう事なん…？

このSSに付けるタグをちと募集します。なんか自分でつけると味  
気ない……

後、質問として話の最後につけるアレ、必要か否かの意見が欲しい  
です。もし手隙であれば御指摘を是非。

では、久々になりましたが、お楽しみ下さい。

第17章 く果たせし再会

ぐいん

「おふぁ  
」

ぎゅん

「むぎゅっ  
」

「……………レーメ、無理するなよ？」

「…だ、大丈夫っ……………」

「最後の二文字が完全にダウトだろ……」

山道に行く車内で望は溜息を一つつく。

理由は自分の右側にいる『黎明の神獣』であるレーメの存在だった。なんとコイツ、車に酔ったのである。

いくら山道とはいえ、傾斜はなだらかでありそれほど曲がりくねっている訳でもない。それでもこれ程までグロッキー状態なのは明確な理由があった。

「…うぉー…」

「無理すんなよ。考えてみりゃ初めてだったよな…お前がちゃんと乗り物に乗るってのは」

そう。

レーメは乗り物に乗った事が無い。

厳密には『入った』だけで『乗った』とは言い難い。彼女は本来、浮遊しながら移動し、尚且つ身体のサイズが十八センチに満たない為に、まともに乗り物に乗った事が無いのだ。

故に、

「…ぬぁー……」

このグロッキーである。

どうしようも無い事ながら、心配そうに目を伏せていた望がふと前を走っている車へと視線を向ける。視線の先には女性だけで彩られ、姦しさが見ただけで伝わるのは達が乗り込んだ車があつた。イルカナもそちらに乗り込んでいる。そんな中、段々とレーメの呼吸が浅くなりだした。

「……レーメ、此処からならそんなに遠い訳でもないから十分に歩いて行けるぞ？」

ついに見兼ねた望が妥協点を探る為の交渉を始める。幸いな事に、事前に渡されていた『旅のしおり』の予定時間ならば歩いても十分かからない。

「どっしするっ」

「……………」

最早言葉を返す事も叶わずに、手をひらひらと振るう。しかし長年に渡った相棒の仕種を見逃し、しかも意味を汲み取れない望ではない。

運転席にいる士郎に向かい、望は申し訳なさそうに降りる旨を告げる。レーメを心配していた士郎もこれに快諾し、レーメと望は車を降りる事となった。

~~~~~

「ふぬっ…、くああ…！！」

車を見送り手を振る望を尻目に、大きく伸びをするレーメ。その様子に先程の不調は全く見受けられない。

ジト目になった望がレーメを睨むが、当のレーメはどこ吹く風である。

「さて、こうして体調も戻った事だ。さっさと合流して堪能するぞ！」

「……ま、それがベストだな。折角の温泉旅行だから皆で楽しみたい」

柳眉を和らげ、望はそう口にする。

高町家主催の温泉旅行。場所は近いが、親睦を深める意味合いも籠め、年に何度か催される。

今回、望たちも家族の一員としてその旅に同行する事になったのだ。

「温泉など、随分と久々だな……」

どこかそわそわとしながら若干歩調を早めるレーム。広い浴場の至福の刻を待ちきれない事は、望の目にも明らかだった。

「レーム、そんなに急がなくても温泉は逃げないぞ？」

「愚か者！温泉は逃げずとも時間は逃げるではないか！！」

のんびりした望を一喝し、小走りに坂道を駆け上がる。そんな己の相棒に微笑ましい表情を浮かべた望も、レームに追いつこうと歩くペースを上げた。

……

イイイイン

!!!!!!

「「!?!」」

突如として、二人に降り懸かる圧力。並の物では無い、それこそエターナル…もしくは『第一位クラスの神剣』に匹敵するパワーを確かに感じる。

「「……!?!」」

そして、それほど間を置いた訳でも無いのに懐かしさを帯びた『彼女』の波動。

「……まさか」

「あ奴が…来た……のか…?」

二人が結論に至り、気配を感じる方角に向き直ったその時、

「…のっぞむうー!?!?!?!」

ガコォーン!!

「げっぼふうあ!?!?!?」

「ノゾム!?!?」

弾丸よろしく飛来した『彼女』に直撃され、錐揉み回転をしながら弾き飛ばされる我等が世刻 望（小）。

「逢いたかったよー！！………つて、あれ？いない…望の気配…この辺りに確かに……」

「愚か者があ！！たつた今すつ飛んで逝きおつたわ！」

いや、まだ逝つてないからね。逝つたらこのSS終わるからね。

「あら？チビスケが此処にいるって事は……」

「チビスケいうなあ！後、汝は人の話をちゃんと聞けい！！」

そんなレーメの話も聞かずに、思考の世界に沈む女性。尚もレーメは噛み付いて行くが最早聞こえてはいないだろう。

考え事の最中の女性に小さな女の子が食ってかかるといふ若干シユールな構図に、先程吹き飛ばされた被害者から声が掛けられた。

「あたた……レーメ…怪我は……？」

「汝にピンポイントで襲撃しておるのに負傷する道理が無かるつ。吾なら問題ない」

「そか……じゃあ大丈夫だな」

「全く…その言い草だと汝も問題あるまい」

互いの安否を確かめ合い、改めて女性の方を見る。

「……相変わらずか」

「ま、その方が『らしい』よ」

「……あれ、望じゃない？そんな、気配は確かに」

「ナルカナ」

再び考え事に集中しようとする女性を遮り、望がその名前を告げる。ナルカナと呼ばれた女性はポカンと呆気にとられた表情となった。

「……あや？なんで私の名前知って……」

「愚か者めが、ちゃんと見れば解るであろう」

「……ってチビスケが大きく……小さく……膨らんで……縮んで……」

「……言い方が一々腹立たしいな」

片眉をヒクつかせながら絞り出す様に呻くレーメ。そして望は苦笑いでそれに応じるしかない。

「珍しい物見れてるんだから、それで相殺しよう」

呆気にとられながらも、やがて一つの結論に至ったかの様にピンとした表情になる。それでも自信は持てないのか、おそろおそろという、正しくナルカナらしくない様子で尋ねた。

「……もし……かし……て」

……のぞむ……?」

「「うん」

~~~~~

「「ハッ!!」」

「どうしたのよ、なのは?」

「イルカナちゃんも……?」

「大切な瞬間を見逃した気配が……!」

「新しいハードルが出現した気配が……!」

「「?」」

~~~~~

「きゃー！！なにこれ、ナニコレ！？ちっさ、ちっさ可愛いー！！  
！望なんだ！望なんだよね！？」

ボルテージが限界を振り切り、ナルカナが暴走状態に陥る。止めに入ったレーメはとつくに弾かれて目を回し、望はナルカナにわやくちやにされていた。

「いや、ムグっ。原い…ぷはっ…わからモガっ」

「きゆうう〜……」

「これは、これはもうテイクアウト決定よね！？お持ち帰りの為のサイズよね！堪能しちゃって大丈夫よね。吸い放題で食べ放題よねえ！！？」

「なるツカナっ！？人のぐみゅっ話をうぶっ！ムグぐぐぐ……」

ついにナルカナの豊満すぎる胸元に抱き込まれ、呼吸すらままならなくなる望。必死に抵抗を試みるも、子供の状態では体型は疎か、筋力すらもナルカナに劣る。

「あーもおーっ！可愛いカワイイ可愛いかーわーいーいー！！」

やがて胸の谷間から僅かに顔を覗かせた望の顔色が蒼白になり、だらりと全身から力が抜ける。

「…………おや？」

己の胸元からの抵抗が無くなった事にはたと気付いたナルカナ。

「……………」

ぐったりとした望を近くの茂みの中に、ナルカナが静かに横たえる。

そのままゆっくり膝枕。

「はふう…」

ふにゃつとした笑みを浮かべ、至福の刻を堪能する。頬をつついては更に相好をだらし無く崩す。

「……………そうだ…！」

何かに閃いたらしい。頻りに周囲を確認する。

右、適度に整備された森。

左、気絶したレームと岩。

正面、道路から見え辛い様になった茂み。

後ろ、やっぱり森。

上、青空。

下、望。

「……じゅるっ……」

……ああ、そういう事ね。

ふと、ナルカナの眼がそれまでのふざけていた色合いを排除し、鋭い眼光で正面を見据えた。

ざわめいていた木々が鳴りを潜め、静謐な空間がナルカナを中心に広がる。

静かに、そして丁寧に己の両手を合わせて何かを崇拜するかの如く、無心の瞳を貫き通す。その姿は正に聖女と呼ぶに相応しく、見る者を跪かせる神々しさを持っていた。

やがて、その口から放たれるたった一言。

「……………いただきます」

次の瞬間、意識を取り戻したレーメが『ナルカナ用』と書かれた巨大なハリセンを大きく振りかぶった。

~~~~~

「遅い!!」

旅館の入口の前でなのはが吠える。その隣ではアリサもなのはと同じ仁王立ちの姿勢で、未だ到着しない子供組の緑一点を待ち構えていた。

「ほんとに遅いわね!これは着いたら罰ゲームかしら!？」

「なのはちゃんもアリサちゃんも先に入っちゃおうよ……」

二人が入らずに待っている事に負い目を感じているのか、すずかも旅館に入らずに先程から旅館の入口でうろつろしている。

なのはとアリサが喚いている中、ついに坂の下から歩いて来る三つの人影がなのは達の目に写り始めた。

「……え?」「」

やがて人影がはつきりとし、顔が確認出来る様になった頃、アリサとすずかの頭に疑問符が浮かぶ。

なのはの頭の中は言うまでも無い。

~~~~~

「…流石は望だわ。私には到底至れない境地ね」

「痺れも憧れもしないがな…」

場所は旅館の部屋の中。ナルカナとの情報交換を兼ねた現状報告を行っていた。

望の正座はデフォである。

望の正座はデフォである。

大事な事なので（ry

「ナルカナよ、汝が来れたと言う事は、根源回廊の問題が解決したと見て良いのか？」

「話せば長くなっちゃうけど……そうね。水車小屋を造ったから粉挽きが終わるのを待つ感じかな？」

逆に分かりにくい表現で説明するナルカナ。

“『根源変換の櫃』を造ったからマナ変換されるのを待つ”と言う  
ニユアンスが一番分かり易いだろう。

「…そうか。サツキはどうなのだ？」

「後一ヶ月は掛かるんじゃない？」

「……中々の重労働だな」

その言葉に罪悪感を滲ませる望。

しかしその表情は罪悪感の暗さに痺れた脚の感覚から来る半笑い、  
更にレーメとナルカナのプレッシャーを受けた冷や汗がミックスさ  
れて面白い事この上ない。

「ま、詳しい話なら夜にだって出来るわ。今は楽しみましょう」

「汝が仕切るな！とにかく温泉だ！！」

言い合いながらナルカナとレーメが部屋を出ていく。二人から解放  
された望は大きく息を吐き、痺れ切った脚を大きく伸ばしてゴロリ  
と転がった。

「はあ………やっと」

ガラッ！

「話は終わった！？」

「…解放されないなあ………」

鼻息荒く望の元に訪れたのは高町なのは。先程の黒いオーラが嘘の様にその表情は輝いている。

「どっしたの？」

「お風呂なの！」

「？」

「この前のお願い！！！」

「…ああ、あれか…で、何をお願いするんだい？」

「一緒にお風呂に入るの！！！」

第18章 く接触、覚悟と「口」

……

……

……

…

「なのはちゃん？」

「ん？」

「それは…ちよつと無理、かな」

首筋に滲む冷汗を悟られない様に、ポーカーフェイスを心掛けながら慎重に言葉を選ぶ。だがそんな努力も虚しく、しかし当然になのはは爆発した。

「なんで！なんでさ!？」

ずいつと強気に顔を寄せるなのはに首を竦めながらも、望は一線を譲らない。

「それは仕方ないよ。俺だけならまだしも、今日は皆…高町家だけじゃない。なのはちゃんの友達や、ナルカナだって来てるんだ。流

石に見られたくないだろうし、見たくもないだろうからね」

なまじ話の筋が通っているだけに、なのはには返す言葉が見つからない。不満げに唸りながら抗議の視線を向ける事が少女の出来る責めどもの抵抗だった。

「あら、私は気にしないわよ？」

「「!?!?」」

この場にいない筈の音が後ろから聞こえる。なのはが勢いよく振り向くと、いつの間にか温泉に行った筈のナルカナがにんまりとしながら望を見ていた。

「……そりやお前は気にしないだろうよ」

そこにいた事に最初から気付いていた望は特に気にした風もなく、ナルカナにポツリと漏らす。

「でも、私は気になるなあー？」

不敵な笑いを浮かべ、手をワキワキと動かしながらナルカナが望へと近付く。

しかし、その歩みはなののはによって遮られた。

「ナルカナさん……だっけ?…残念ながら今回は私に優先権があるの」

ナルカナに負けていない不敵さで、なのはがナルカナを見遣る。ナルカナは一瞬だけ眉をしかめると、なのはへと問い質した。

「あら、随分な自信ね……何かしらの根拠でもあるのかしら？」

瞬間、『その問いを待っていた』と言わんばかりになのはがポケットからレイジングハートを取り出し、映像を再生させる。内容は先日、望がなのはの我が儘を聞くと言った旨の会話。……ちゃんと聞くからね』と、映像の望が締め括って映像は途切れていた。

……いつの間に録ったんだ……

「とまあ、この権利を今使おうと「他人様に迷惑だから却下！」

なのはが言い切る前に望がカウンター気味に返す。

「むうううう……」

なのはが拗ねているが、望としてもこればかりは認可できない。望のガードの硬さを理解しているナルカナは、お手上げのポーズを取りながら今度こそ温泉へと足を運ぶ為、に部屋を後にした。

「他人様に迷惑掛からないならちゃんと聞くから、なのはちゃんもその辺考えよう」

「……わかったの」

渋々と頷き、なのはも部屋から退出。後に残された望は大きく溜息をつき、ぼんやりと虚空を眺めながら、誰にともなく呟いた。

「……何処で何を間違えたんだ…？」

~~~~~

高町、月村両家の面子で温泉へと向かう。その中でなのはから黒き波動が漏れ出しているが、まだ安全域なので未体験のファリン以外は誰も気にしていない。

引き戸をカラカラと開け、脱衣所へと入る。最後にレーメが引き戸を閉めて、小走りに脱衣籠へと近寄った。

「ふいー、やっとこ入れるのだ」

「あ、レーメちゃんも楽しみにしてたんだ。見た目が欧風だからシヤワー文化だと思ってたよ」

美由希が不意に呟く。その言葉への返答が横合いから入った。

「温泉は素晴らしいですよ。二人して楽しみにしてました」

「あらあら、イルカナちゃんにも言って貰えるなんて何だか嬉しく

なるわね」

さりげない一言に桃子が顔を綻ばせる。そのままイルカナは桃子、美由希との雑談になり、レームはアリサから質問をされていた。

「で、このイルカナをそのまま成長させた様な人は誰なのかしら？」

「あ、それ私も気になってた。なのはちゃん、その方はどちら様？」

すずかも好奇心を隠し切れない様に、その話題に便乗する。

「ナルカナさんって言うんだって」

なのはとしてもそれ以上の事が分からないので、他に言いようが無い。少し困った様に眉根を寄せるなのはに、これまたイルカナのフオローが入った。

「私の姉に当たる人ですよ。ほら、姉さんもご挨拶して下さい」

「ん？…ああ、自己紹介ね。私はナルカナ、人々は敬意と尊敬の念で以て『ナルカナ様』と呼ぶわ」

「旅してるのに何処の人々が呼ぶのよ」

「敬意も尊敬も同じよね？」

美由希と忍が衣服を畳みながら冷静にナルカナの言葉を分析する。

「外野うるさい！兎に角、敬意云々はともかく、目上を敬う気持ちは今の内に育てときなさい。あんた達は私を呼ぶ時に『さん付け』」

を忘れない事！わかった？」

「……はい」「」

そんな様子を見ながら、レーメが軽く頭を振った。

「ノゾム達と出会った当初からは想像もつかん変わりっぶりだな……」

その声は誰の耳にも届く事は無く、かといってレーメは気にせず、身に纏った衣服、その最後の一枚に手を伸ばした。

~~~~~

女性陣が風呂へと向かい、手持ち無沙汰になった望は何をする訳でもなく、旅館に設えられた茶を飲んでいた。

と、

「……………望さん、僕にも頂けないですかね……」

息も絶え絶えにユーノが押し入れからにゅるりと這い出してくる。

「あれ？風呂に行かなかったのか？」

以外そうに言いながら、取り敢えずユーノの為に緑茶パックを出して湯を注ぐ。

「…今のままだと女湯に連行される事が目に見えるんで」

自分の緑茶を啜りながら、望は先行していた車内を思い起こした。

「…お前、完全にファービー扱いだったもんなあ」

「…どーも最近僕が生き物であるという事が忘れられてる気が……」

しみじみと呟きながら、後ろ脚だけで器用に立ち、前足でこれまた器用に湯呑みを抱え、緑茶を事もなげに啜って一息つく。あたかもそれは正座で茶を嗜むそれに酷似していた。その様子を目の当たりにした望の反応は、至極当然と言えるだろう。

「…なあ、ユーノ」

「はい？」

「お前、もしかして人間か？」

~~~~~

注：女湯という場所の都合上、音声と『効果音』（ココ重要）のみでお楽しみ下さい。

「わぁ…ナルカナさんの、凄く大きいですね……」ペターン

「妹だからってこれだけの戦力差は悪意を感じますね。姉さん、半分要求します」ほんのり

「イルカナ！あなたには聞きたい事があつたけど納得したから不問にするわ！そのかわり罰として永劫そのサイズだからね！！」ぼるんっ！

「前半自己解決！？イルカナちゃん、何したの！？」つるーん

「ふふっ、なのはさんはまだ知らなくて良い事ですよ」ほんのり

「後半の言葉の不自然さはノータッチなんだ……」ペターン

「くっ！このサイズ差は埋められないのかしら！？」ペターン

「下の毛すら生えてないガキがナマ言うんじゃないわよ！！」ぼるんっ！

「私は……はぁ……」ぷりんっ

「美由希ちゃん、最後の伸びに期待よ！！」ぷるっ

「忍さん…！」ひしっ！むにゅううう

「…美由希はサイズよりバランス重視よ？そういう育て方だったから」ぽよっ

「……モモコは本当に出産経験があるのか？その張りは有り得ぬだろっ」「っんっん

「…最近ちよつと気をつけないとダメになりだしたのよねえ……」ほよほよ

「母さん、それ世間様に喧嘩売ってるよ」「ぷりんっ

「桃子さん…羨ましいなあ……」「ぷるっ

「ふふっ、美由希も忍ちゃんも大丈夫よ。何てったって、私の娘なんだから！……あら？…なのはは何処に行ったのかしら？」きよるきよる

「ふんっ！ふんっ！」「がしっ！ぴよこっ

「…って、なのは！？」「ぷりんっ

「男湯覗く小学生ってどうなのよ？」「ぺたこーん

「諦めないの！」「がしっ！がしっ！

「全裸でウォールクライミングとかいう果敢な挑戦ご苦労様なんだけど」「ふるふる

「なあに？お姉ちゃん！？」がつ！

「奥の露天風呂は混浴だよ？」ぴっ

「がつでむ！！」つるっ！ぼちゃん！！

「……何がなのはを狂わせたのだ……？」ほわっ

「不屈の心はこの胸に！なの！！」ぷかつ、だっ！！

「ちなみに望って風呂は夜に入るタイプよ？」ばしゃっ、ぼるんっ

「ジーザス！！！！」

~~~~~

「………言ってますでした？」

「初耳だよ」

~~~~~

温泉も堪能し、頬をほんのりと染め上げた三人娘＋ナルカナが廊下をのたくたと歩いていった。他のメンバーは脱衣所のマッサージチェアで「ういあああ」と言っている。

「……だから風呂上がりはコーヒー牛乳なの！ほてった身体をクルダウンさせて、コーヒーの苦味で頭もスッキリさせるんだよ！！」

「はん！風呂で頭がぼんやりするなんてお子ちゃまの証明じゃない！！イイ女だったらフルーツ牛乳で瑞々しさをアピールよ！！」

「なんでそこでイチゴ牛乳が出ないの？バカなの？あの優しい口当たりが一番なんじゃない！」

「ストレートを提言しないアンタ達に脱帽よ。やっぱりまだまだ早いのかしら？」

……かなり白熱した議論をかましている。特にすずかは普段の気弱さが信じられない程の発言をしていた。

白熱しながらも栓無しの議論を繰り広げる。ヒートアップしているせいで、なのは達は廊下の向こう側から来る人影に気付いていなかった。

「おっと」

「あ、ごめんなさい」

先頭を歩いていたのはが女性にぶつかると。見た目で歳の頃はナルカナよりも少し下といった所だろうか、八重歯が特徴的だった。

「……………」

「…っ?」

その女性は何も言わずになのはを見続けている。アリサとすずかは訳が分からなかったが、ナルカナとなのははその視線に殺気が籠っている事に気付いていた。

「……………随分と無粋な殺気<sup>モノ</sup>、向けてくれるじゃない?」

殺気を向けられているのはを庇う様に間に割って入るナルカナ。無言の牽制はまだ続く。

~~~~~

「へえ…そんな姿だったんだ」

「…知りませんでした?」

「知らねえよ」

「あっちの方が燃費良いんですよ」

「その為にお前はペットフードを躊躇い無く口にするのか…」

「意外と美味しいよ？」

「だからって人間の状態でバリボリ喰うな。何処から出したんだよソレ」

「デバイスの応用」

「ああそう」

~~~~~

「そっちのお嬢ちゃん達は先に行きな。私はそのコに用があるからね」

徐に女性がそんな事を言う。強気なアリサとしては当然、認可出来る事ではない。

「んなっ！なのは、反応見る限り知り合いじゃないんでしょ！？だつたら…」

「いいの！アリサちゃん。すずかちゃんと一緒に先に行つてて」

噛み付こうとするアリサをなのはが遮り、この場から退く事を促す。それを受けたアリサは渋々ながらも矛を納め、

「早く来なさいよ！！」

と檄を飛ばしながらすずかの腕を引き、この場から去って行つた。すずかはまだ心配なのか、頻りにこちらを振り返っていた。

「ふん……で、アンタは一体『何』なのかしら？」

「？」

ナルカナの発言になのは首を傾げる。一方、質問の意図を理解した相手の女性は片眉をぴくりと動かした。

「へえ……よく分かつたね。アタシは使い魔のアルフ、魔法生命体さ」

その言葉を受け、ナルカナも眼を細める。

「ほっほう、『使い魔』って事はアンタを使う主がいるって事よね？」

「ご名答。それについてはそっちのおチビちゃんが良おーく知ってる…わ！」

最後の一言に思い切り殺気を込め、なのはを睨みつける。ひゅつと軽く悲鳴を上げ、ナルカナの後ろに隠れたなのはは、軽く震えていた。

「はいはい。アンタ……アルフだっけ？さっきから見たりゃ、随分とこの子にご執心みたいじゃない？」

その言葉が引き金になったらしい。余裕の笑みを引っ込め、アルフが激昂した。

「当たり前じゃないか！！アタシのご主人はソイツにアバラをやられてんだよ！？」

その言葉になのはが震えを止める。先の怯えが嘘の様に、逆にアルフに詰め寄る。

「あの娘の事、知ってるの！？教えて！なんであの娘もジュエルシードを狙ってるの！？」

「アンタには分からないだろうさ！！そもそもアバラを折った事への謝罪は無しかい！？」

「戦った相手には謝らない！！戦った以上はぶつかり合う何かがあるから、だから謝る事は相手に失礼だって教えて貰ったの！」

そう啖呵を切り、さらに言葉を続ける。

「でも！私はそれだけじゃ寂しいと思うの！だから分かり合いたい

と思う。分かり合えたら、その時に謝りたいと思う！！」

その言葉にナルカナは眩しい物でも見るかの様になのは見つめる。

「生意気だねえ……！！」

ギリギリと歯を軋り、先程以上の殺気でなのはを睨みつける。しかしなのはは動じず、それがまたアルフの神経を逆撫でする。

「取り敢えず舌戦はこの子の勝ちみたいね。両方ともその辺りにしときなさい」

そう言つてナルカナはなのはの頭に手を置き、空いた手で背後を指さす。視線を移すとそこには桃子達が何やら話し合いながらこちらに向かっている様子が確認できた。

「っち！」

大きく舌打ちをすると、そのまま温泉に向かう。離れる間に念話で、

『痛い目見ない内に手を引きな！！』

と捨て台詞を残して。

「……………」

二人は無言でアルフを見送る。いずれぶつかる存在を。

入れ代わりに桃子達が近付いて来るが、こちらに気付いた様子は無

い。何かを語り合っている様だ。

「……………だからコーヒー牛乳だつてば！！なんで母さんも忍さんも分かんないかなー」

「美由希ちゃん、私は断絶イチゴと思うのよ。ちょっと普段飲まないーってトコに惹かれるでしょ！？」

「美由希も忍ちゃんもどうしてフルーツ牛乳の良さが分からないのかしら？」

「汝らにストレートの意見は無いのか！！」

「……………」

~~~~~

「望さん」

「望でいいよ。タメ口のが気楽だ」

「ありがとう、望」

「てか戻ったのか」

「気楽だからね」

「人としてどうよ？」

~~~~~

「望ー！」

「あ、ナルカナ。皆も戻ったんだ」

すずかとアリサは自販機前でなのはを待っていたらしい。結局女性陣は一緒に戻って来ていた。

「ノゾム！」

ずん、とレーメが望に詰め寄る。望は少したじろぎながらもレーメに先を促した。

「風呂上がりの牛乳は何派だー！」

「メロン」

その回答に女性陣全員がずっこける。訳が分からない望とユーノは

互いに顔を見合わせた。

第18章 く接触、覚悟とココロく（後書き）

女性読者なんかいません！

第19章 く魔法使いの夜く（前書き）

……女性読者がいた事に度肝を抜かれました…

だからって自重はしないけどな！！！！

## 第19章 く魔法使いの夜

「…随分と豪勢ですね」

用意された夕食に思わずといった感じでイルカナが呟きを漏らした。

「遠慮は無用！料理として出された以上は食すのが礼儀だ！！」

堂々と士郎がそう言い切る。それも尤もだと望は考えながら、それでも礼は弁えねばなるまいと士郎の正面に立ち、正式な所作に則って頭を下げた。

「……………此度の家族旅行。我々のような流れ者を迎え入れるだけでなく、飛び入りの者が居ても受け入れて頂いた事……………誠に有り難く思います。我々を代表して私こと世刻 望より、無上の感謝を此処に……………」

深々とした礼。その望の礼に引き続き、レーメとイルカナも頭を下げた。ナルカナは先に部屋で邪魔な髪を纏めると告げ、この場がない。

「ふむ。正式な御礼として、高町家代表、高町 士郎が確かに承った。なれば、此度の家族旅行に於いては君達に『無礼講』を課す事にしよう。他人という垣根を取り払って貰おうではないか」

厳めしく言った士郎はその表情を破顔させ、乾杯の音頭を取ろうとした所にタイミング良く髪を結い上げたナルカナが姿を現し、その

まま宴会はスタートした。

~~~~~

「ぐるぐるぐるぐるつとお」

両手で別々の幾何学的な模様を器用に描きながら、ヨロヨロと自分に宛がわれた部屋をめざすナルカナ。心配になった望が後を追っているが、余りのナルカナの惨状に頭を抱えて首を振る羽目になった。

「ナルカナ……呑み過ぎだよ……」

「……ういゝつくう」

「いつの間に呑んだんだお前」

すっかり油断していたが、此処に来てレーメにも酔いが回り始めたらしい。目を回してふらついている。

途中何度か柱にぶつかったりしたものの、なんとか部屋への誘導に成功した。面倒になったのでレーメも一緒に寝かしつけ、望はナルカナの部屋を後にした。

~~~~~

「おや、望くん。ご苦労だったね」

宴会モードから一転、静かに酒を嗜む月見酒に移行した高町、月村家大人組が望を出迎える。

「いえ、大丈夫ですよ……………あれ？イルカナは？」

「なのは達と一緒に部屋に行ったよ。今頃はガールズトークの最中だろうさ」

望がこの中に足りないメンバーがいる事を訝り、士郎がその疑問に軽く返す。

「そうですか、じゃあ『大丈夫』ですね」

そう言って望は僅かに眼を細める。

「やっ……………」

一息つき、士郎が手元のグラスの中身を一気に飲み干す。次の瞬間には高町 士郎はそこにはおらず、不破の姓を冠する歴戦の勇士である『不破 士郎』がその姿を覗かせる。

「良いんですか？」

「構わんよ。この場に居合わせているのは全員がそうだ」

質問の意図が理解出来ている以上、余計な主語に意味は無い。その答えに理解を示した望は居住まいを直し、次の瞬間には全員に緊張が走る。

そんな中、今回の催事を画策した本人である士郎が口火を切った。

「今回の小旅行、君が裏の意味を汲み取ってくれた事に感謝する。まずは紹介しよう、こちらは海鳴の『裏』を取り仕切る月村家現当主である月村 忍嬢だ」

「月村 忍です。不肖の身ではありますが、先代よりこの地を治める全権を委ねられました」

「月村家侍従長、ノエルと申します」

「同じく月村家侍従、ファリンです」

士郎の言葉を引き継ぎ、忍が頭を下げる。それに伴い、忍の背後に控えていたノエルとファリンもそれぞれに名乗り、簡易の挨拶をした。

「今回、君達が当たっているトラブルの規模が中々に小さくはない様子なのでね。ならば責任者に話を通し、場合によっては民間人への配慮をしなくてはならない」

「道理ですね。なら、こちら遅ればせながら……」

そう言つて望は姿勢を正し、畳に両手をついて頭を垂れる。

「こちらの都合上、詳しい事情を説明出来ない非礼を平に御容赦願います。姓は世刻、名は望。重ねて無礼ながら、根無しの旅人という事でどうかこの場は納得して頂きたい」

そこで望は一旦言葉を区切り、下げていた頭を上げる。

「そちらの膝元であるこの地を騒がせたにも関わらず、今日まで謝罪すら無かつた事を…深くお詫び申し上げます」

そう言つて再び望は頭を下げる。見た目が子供である望から、これ程までに丁寧な挨拶が出る事に忍達は内心舌を巻いていた。

「顔を上げて下さい。挨拶と謝罪、確かに受け取りました」

そう言つて忍は望に微笑みかける。その所作に望は眼光を緩めないまでも、軽く身体の力を抜く。

「挨拶は済んだね。では失礼ながら、望くんには少し、尋ねたい事がある」

互いの挨拶が終了した事を見届けた土郎が、望に言葉を差し向ける。

「そう……君達を我が家に招待した時にも感じた事だ。私は君を子供として見ていない……」

少し、言葉を選ぶ様に軽く舌を転がす。考えを纏めるのにそう時間は掛からなかつたらしい。

「ふむ、やはり回りくどいのは性に合わない。単刀直入にいこう、望くん…君は一体何歳かね？」

その言葉に、望は逡巡する。あくまで一般人である彼等に神剣使いの情報を流した所で、出来る事など高は知れている。それにエターナルである自分達がこの時間樹を離れた時、彼等は望達の記憶の一切を失うのだ。

しかし、この時間樹に於いては迂闊な行動は取れない。取る訳にはいかない。

第一の理由はミッドチルダ。

あの分枝世界の枠を超越する程の力を持った世界が、人の心を盗み見る技術が無いとは言い切れない。そんな彼等がエターナルの情報入手した時に取る行動など容易に想像できるだろう。

第二に、彼等の中にある神剣の欠片。

これに余計な情報を流し込む事で神剣使いとしての覚醒が始まってしまえば、どうなるのか解った物ではない。神剣使いとは人間ではなくマナ生命体なので、最悪この時間樹に消化される可能性もある。沙月と合流して最終的な進路を決めない限りは下手を打つ訳にいかないのだ。

最後に、個人的な感傷がある。

頻繁に時間樹に出入りをするならば、記憶など気にする必要は無い。しかし、望はそれを認める事は出来なかった。エト・カ・リファを出ていく瞬間、エターナルである『ノゾム』として歩き始めた第一歩。

あの時によぎった、『世刻 望』としての最後の未練。黄昏の校舎で笑い合う、顔も思い出せなくなってしまった親友。顔は思い出せずとも、誓いを立てた時計は今でも懐に忍ばせている。顔を思い出さなくとも、あの時に笑い合った事実はこの胸に焼き付いている。

それを、出来る限り否定しなくなかった。

踏みにじるのは、一度きりだ。

「望くん？」

士郎の呼びかけに、望は一気に意識を現実に戻す。

「あ、すみません…ええと、その件は……」

「君なりの考えがあるなら、無理強いはしないさ。忍ちゃん達にも事情は説明してある。悔しい事だが、この件については君達が適任だ」

笑顔の中に憂いを混ぜて、士郎が笑う。いや、自嘲すると言った方

が近いのかも知れない。やる瀬ない怒りのやり場に困っているのだらう、握り締めた拳から血が滴っているのが丸分かりだ。

「あなた」

そう言つて桃子が士郎の手を包む。指摘された士郎は初めて己の拳の状態に気が付いたらしい。ファリンが慌てて持ち合わせの道具で手当をする。

「望くん、時間を取らせて済まなかつたね。風呂はまだなんだろう？」

場の空気を敢えて壊す為に士郎がそう言う。対した望もその意志を感じ、それに返答した。

「ええ。折角だから浴衣にも袖を通し

」

キーン

！！

「…の前に、ちょっと野暮用らしいですね。終わったら、入らせて貰います」

表情はそのままに、纏う空気は戦士の物に変わる。

魔法使いの、夜が始まる。

くうくうくう

「くう……………くう……………」

「…あ、やべ……………望に夜這いかけないと……………」

くうくうくう

「あつた…!!」

闇に紛れて、少女の声が僅かに響く。側には紅い狼が控えて、辺りを警戒していた。

視線の先には蒼く輝く神秘の結晶。それを封印処理する為に、機械的な黒い錫杖を構え、

刹那、

「！！ フェイト！」

「!?!」

狼の呼びかけに、少女が咄嗟の反射で飛びのく。

バチン！

すると少女の立っていた場所に、桜色の光が弾けた。

「……！」

「あの、チビ……!!」

鋭い嗅覚で狼が瞬時に相手の居場所を掴む。念話で傍らの少女に警戒を呼びかけ、一気に魔力の発信源に近づく。

グルル……ガアアアツ!!!

相手への牽制も兼ねた唸りを上げて、死角となる茂みから飛び掛かる。

「!?!」

宵闇に馴れた視界に捉えたのは、昼に生意気な事を言われたあの小娘の驚いた顔だ。一緒にいた女は匂いも気配も一切ないから、この場所には来てないのだろう。だったら多少痛い目を見て貰おうと、肉球に引っ込めさせた爪を出す。

が、しかし

ざっ、ガギインー!!

「ちいつ!?!」

思考に気を取られたからか、少女はその一撃をバリアでいなして手に持ったデバイスを片手でスイング、回避が間に合わないと判断した狼は『姿を変えて』飛びのいた。

「貴女は昼の!?!...えっと、アルフさん?」

「.....」

狼から変身した女性、アルフは沈黙を貫くが、なのははお構い無しに言葉を続ける。

「貴女が此処にいるなら、あの娘も此処に!?!お願い、お話をさせて欲しいの!?!」

その言葉に再びアルフが激昂する。人間の状態ながら、犬歯を剥き出しにして唸り声を上げる。

「どこまでもナメた真似を...!!」

なのはに怒鳴ろうと息を大きく吸い込み、声帯を震わせようとした瞬間、自分の主である金髪の少女から声がかけられた。

「アルフ」

「じむぐつ…！ふ、フェイト！？終わったのかい？」

一瞬言葉に詰まりかけたが、なんとか持ち直したアルフがフェイトと呼んだ少女に向き直る。一方の少女は、その視線の先になのはを捉えていた。

「キミは……」

「あの時の娘……だよね」

なのはが少女の言葉を引き継ぎ、確認を取る。僅かに細められた眼がその答えである事の証明だった。

「教えて。どうしてジュエルシードを集めるのか……」

「フェイト、聞くんじゃないよ！！こんな……」

罵りの言葉を吐こうとするアルフを手で制し、少女がなのはと正面から向き合う。

「…キミこそ、どうしてコレを集めようとしてるの？」

そう言って少女は構えたデバイスから、先日獲得したXIVの字が浮かぶジュエルシードを取り出す。

「コレの危険性はキミだって理解出来る筈だ……酔狂で集めるには、リスクが過ぎる代物だよ」

物憂げにジュエルシードを見遣り、なのはに忠告する。ひとしきり

眺めると満足したのか再びデバイスに吸い込ませ、なのはに向き直った。

「それでもキミが集めるって言うなら、それはきっと私と同じくらいに強い意志なんだと思う」

そう言われたなのは、無言で端を握っていたレイジングハートをクルクルと回し、構え直す。その反応に少女は一つ頷くと、そのデバイスを展開、光の鎌を出現させた。

「……そうだ。理由は分からなくても、私達の意志の強さは同じ。だったら……」

「フェイト……」

「アルフ、この戦いは、きっと必要な戦いだ。これは私が乗り越えるべき試験だって、私の中で何かが叫んでる」

「貴女が負けたら、理由を話して貰うの」

「足りないよ。自分の決意をさらけ出すんだ」

言外に、ジュエルシードを賭ける様に少女が促す。しかし、なのはにはそれに応じる資格が無い。

「……私は今、ジュエルシードを持ってないの」

宛てが外れた少女は、軽く舌打ちをする。と、そこに闖入者が現れた。

「……構図は掴めたが、状況はイマイチ分からないな……」

「「っ!?!」」

「望くん!?!」

この中で、唯一その人を知るなのはだけが名前を呼んだ。それに望が片手で軽く応じると、なのはと対峙していた少女達を見遣った。

「話は途中からだが聞かせて貰った……君達が何故コイツを狙うのかという理由、そしてコイツそのものを今回の対決の賞品にしたんだろ?」

そう言つて望は先日レーメに渡しそびれていたジュエルシード……パーマントウィル『コバタの森の風』を指先で軽く弾く。何度か弾くと、それをそのままなのはに投げて寄越した。

「無理矢理にでも聞き出した所だけど、あの眼は絶対に納得するまで喋らない……そんな眼だからね」

一拍、

「なのはちゃん、頑張つて。君は答えを知っている。あの娘に、それを見せ付けてやるんだ」

笑顔でなのはにそう告げて、下がって行った。

「……………うん!?!?!」

満面の笑みを湛えたのはが、改めて少女に向き直る。少女は表情を崩さないまま、そのやり取りを見つめていた。

「私立聖祥附属小学校三年、高町なのは!!」

「フェイト・テストロッサ」

「これ」

「尋常に!!」

「勝負!!」

第19章 く魔法使いの夜く（後書き）

うん、本格的になのはの嫁が絡むとキャラが動かしやすいね！

次回も運が良ければ早期に投稿可能かな？

では、今回はこの辺りで。次回も皆様の眼に触れて頂ける事を祈り  
つつ……

## 第20章 〈黄金と桜花の鉄火咲き…〉（前書き）

一覽から削除する事でアクセス数にどれだけ影響するのか実験して  
いました。読者の皆様には大変ご迷惑をおかけしました。

お詫びにもなりません、作者が描いた望とレームを軽く貼ってお  
きます。

一瞬だけだったのでURLは削除しました。

では、続きをどうぞ。

第20章 　く黄金と桜花の鉄火咲き…く

ザザザザザッ！

ダンッ！

ガシィー！！

トン、タタタッ

闇の中、二つの小さな影が交わっては離れる。片や桜色の燐光を纏わせ、片や黄金色の雷光を放ちながら、夜闇の森を彩った。

「くっ…！」

フェイトは中々に捉えきれない敵の影に、苛立ちを募らせる。何故だ、何故見つからない。敵に有効打の気配も無く、只、自分だけが消耗しているかの様な感覚に冷静な判断を奪われる。

「何処だ……！？」

『余裕を失わせる』事すらも相手の策略の内。フェイトはその事にすら気付かず、徐々に募る焦燥感に捕われていた。

「…負けない……！」

頭を大きく振り、弱った心をふるい落とす。両足に飛行魔法を展開

し、木々の合間を縫う様に飛び去る影を追う為に、フェイトは更に神経を研ぎ澄ませた。

くくくくく

「よっ、と…ほいっ」

対するなのはは、余裕を持ってフェイトの追撃をかわしていた。

ガキッ！たんっ

木々の合間を縫い、相手の攪乱と消耗を念頭に置いた不規則な動き。望ほど完璧な囷や隠行は無理だが、魔力をチラつかせて相手をつかず離れずに誘導する。

「…いしょ！っ」と

レイジングハートを木の枝に引っ掛けて跳躍と方向転換を同時に行う。正に変幻自在と呼ぶべき動きを見せながら、しかし速度は速くない。

ビュオン！

「こっちか!？」

音も無く木の枝に着地した瞬間、フェイトが猛スピードでなのはが乗った枝の真下を通過した。

「……………そろそろ、かな？」

通過した瞬間のフェイトが見せた焦りの表情を確認したなのははそう呟いて、バリアジャケットのリボンをしゅるりと外した。

~~~~~

「あや……………？……………着替えも浴衣もある……………外かにゃ？」

~~~~~

「ふざけてるのかいっ!?!?」

戦闘の一部始終を見ているアルフが望に詰め寄る。一方の望は飄々

とした様子でアルフをあしらっていた。

「それは俺に聞くべき事じゃないな。なのはちゃんが真面目なら、これは間違いなく真剣勝負なんだろうさ」

「逃げ回るだけじゃないのさ！」

「そりゃそうだ。尋常な立会いなら、まず万全のコンディションにしないと。勿論、メンタルもね」

自らの主に手だしを禁じられている以上、助太刀は出来ない。やり場の無い怒りを鎮めようとアルフは望の胸倉を掴み上げた。

「アタシ達の目的はジュエルシードなんだよ！こんな茶番に付き合えるかい！！」

「そこだよ」

「!?!」

突然に望が謎の指摘をする。思わず力を緩めてしまったアルフの手元から脱出した望が難無く着地し、続く言葉を紡ぎだした。

「あのな……」

~~~~~

「見付けた……………!!」

ようやく標的の姿を確認したフェイトの口元に笑みが浮かぶ。その視線の先には一直線に飛び去ろうとするのはの後ろ姿があった。

「バルディッシュユ！」

《Yes, master!》

即座に己のデバイスへ指示を飛ばし、光の鎌を射出させる準備に入る。この一撃は何としても命中させようと、殊更に気合を籠めるフェイト。やがてなのはの背中が木々の合間に消えようと、

「させないっ！アークセイ……………」

「ばあっ!!!!」

突如、ガサリと大きな音をたて、フェイトの眼前に背中を見せていた筈のなのはが逆さ吊りの状態で現れる。

なぜかキャミソール姿で、ごく丁寧に両手を広げて威嚇する様子にながらだ。

よく見れば真上の木の枝に足を引っ掛けているのが確認出来るが、追いかけていた背中がなのはだと思っていたフェイトにそんな事を確認するような余裕など無く、

「ひあああつ!?!」

予想外といえば余りに予想外な出来事に対処が遅れ、結果として悲鳴を上げる事しか出来ないフェイトは、ぺたりとその場に女の子座りになる。

「引っ掛かったね!残念でしたー!!」

「なっ、な、何が…!?!」

満面の笑みを顔に張り付けたなのはとは対照的に、未だに事情を飲み込めないフェイト。下着姿のなのはが軽く指先を動かし、先程までフェイトがなのはだと思っていた物体を呼び寄せる。フェイトはその物体に視線を釘付けにした。

それは、そこら辺に落ちていた枝を即興で組み上げてバリアジャケットを着せた、言うなれば案山子とも呼ぶべき物だった。

「まだ望くんみたいなき動は無理だから、より囿っぽくしてみたの」  
聞いてもない説明をして、案山子から自分のバリアジャケットを剥いていく。段々と落ち着きを取り戻していくフェイトの表情には、代わりに怒りの色が窺えた。

「…馬鹿にしてるの…!?!」

戦いの最中なのに、つい出てしまう非難の言葉。無理からぬ事ではあるが、やはり自分が真面目にしているのを虚仮にされているのは気分が悪い。

だが、なのはから聞こえた言葉は信じられない程に真面目さを含んでいた。

「違うよ。言ったよね？」尋常に『勝負って』

「だったら！」

「お互いに万全でなくちゃダメだよ」

「っ…!？」

思わぬ返しに一瞬、告げるべき言葉を失う。これを好機と見たのはが畳み掛ける様にまくし立てた。

「そんなにガチガチに固まったままだったら、満足に動ける訳ないよ。私は身体も心も万全のフェイトちゃんと本気の勝負がしたい。そして……」

一息、

「本気でぶつかって、フェイトちゃんと仲直りして、友達になりたいー!!」

~~~~~

「ふざけんなああ!!」

叫びと共に、アルフの握り締めた拳が放たれる。しかしそれは望に届く事無く、背後の樹木に風穴を開けるだけに終わった。

「こっちは本気なんだよ! そんなスポーツ感覚のお遊びに付き合ってもらえるかい!!」

二撃、三撃と断続的に発射される、体重と魔力を絶妙に乗せられたソレは虚しく空を切る。

「俺に言われてもなあ……」

ひよいひよいと紙一重でアルフの攻撃をすべて避け切っている望が、困った様に頬を掻く。

あの夜、立ち直ったなのはの決意表明を聞かされた身としてはどうしようもない。それに、今の望にはそれ以上に気に掛かっている事があるのだ。

「とにかく、早くアレを集めないと……!」

「……………?」

アルフの焦りように望は眉を潜める。その言葉を出した瞬間、アルフの表情が怒りから哀しみへと変わったからだ。

「……………」

~~~~~

「……にやんで森の中に? ……微妙にマナも荒れてるし……まいつか……たまには外で……ああ……シヨタ望かあ……じゅるっ」

~~~~~

「フォトンランサー!」

フェイトの掛け声に呼応し、四筋の光弾がなのはに迫る。なのははフェイトの掛け声と同時に飛びのき、最初の牽制の一発を木の影で回避。続く光弾をプロテクションで相殺する。

「…っ！」

プロテクションの為に手を出した隙を狙って、残る二発が時間差でなのはに肉薄する。

「…っ！…っ！…っ！」

ガギン！バチッ！

「へ！？」

信じられない光景に、思わずフェイトが間抜けな声を漏らす。確実に仕留めたと思っていたフェイトには想像もつかなかっただろう。

なのはが普段から死角に対する対処とカウンターを徹底的に教え込まれている事など、普通ならば予想できない。

なのはは視線をフェイトに固定したまま、逆手に持ったレイジングハートを左手のみでフルスイング、一つ目のフォトンランサーを叩き落とす。命中を疑わなかったフェイトは当たった事を前提に、二発目の軌道計算をしていたので、軽く身を捻ったなのはにかわされ、光弾が一瞬動きを止める。その隙になのはが手刀を叩き落とし、二発目は呆気なく消滅した。

「ふう……………っ！」

一息つこうとした所に、フェイトの光刃が迫る！

ギーン！！

咄嗟に弾こうとレイジングハートを振るが、先程なのはの実力を認め、緊張も程よく解れたフェイトに最早隙は無い。距離を置こうとしたなのはの意図を読み、軽くブラフとパリイを掛けて近接戦闘に持ち込んだ。

「正直、友達つてのがどんなモノか、私には分からない…！」

上段からの袈裟掛け、弾き返しと受け流しの応酬を繰り返す中でフェイトが言う。デバイス同士が火花を散らし、金属音が響く中、その声は何故かよく通って聞こえた。

「でも、キミを見てるとっ！何処か、胸がギュツてっ！なって！」

なのはは話を聞きながら、脚払いでフェイトの体勢を崩そうとしゃがむ。しかしフェイトは展開していた飛行魔法を発動させ、それを許さない。

「キミに！友達に、なりたたって！言われた時…身体がフワツてなっただ…！」

せめて同じだけのアドバンテージを得る為に、なのはも足元に魔方阵を浮かべるが、フェイトが妨害の為に攻撃を足元に集中させたり、フォトンランサーを小出しにして攪乱して来るので上手くいかない。

「よく分からないけど！これが友達だって言うならっ！なんだか…」

…温かくなる…わかんないよ…何なの…これ…？」

空中からフォトンランサーの連射をしながら、多少の余裕が出来たので、考えをまとめようとする。しかし、なにぶん未体験の感情だ。フェイトだけで解決出来る訳がない。

「フェイトちゃんは！まだ、わっ！分からないんだよ。と！最初から分かる事なん…てやっ！無いから、少しずつだよ！」

地上で情熱的なタップダンスを踊りながら、なのはが語りかける。足元狙いはバリアジャケットと蹴りで捌き、上半身へ向かう光弾はレイジングハートで叩く。

「……！！」

フェイトが混乱しながらも、とにかく敵を倒さないと叫ぶ戦士としての本能に従い、なのはに突撃を仕掛ける。フォトンランサーの連撃が止んだ事を確認したなのはもフェイトに向き直り、これに応戦。

戦いは鏝迫り合いへと持ち込まれた。

~~~~~

「……ぐう……っ!!」

満身創痕のアルフが堪え切れずに片膝を着く。対する望は冷ややかにその様子を見ていた。

「…歩み寄りは大それたぞ？ましてや相手からの譲歩だ。裏を勘繰るのは正解だが、いきなり襲うのは下策だったな」

「うるさあい!!」

望が言い終わる前に狼へと変身し、再び突撃を掛ける。

「だから」

ヒュッ

アルフが力を溜め込み、地面を蹴ったその瞬間に軌道から外れて突撃を回避。

「少しは」

ガチン!

次の突撃を行う為の着地を考えているアルフの顎を軽く叩き、舌を噛ませて思考を一時的に奪う。

「人の話を」

ガシッ、ビュン…!!

前脚二本を右手、後ろ脚二本を左手で引っ掴み、アルフの突撃のス  
ピードを利用して大回転。

「聞け！」

ビタン！

腰を入れたフォームでそのままアルフを木の幹に叩き付けた。

「はぁ……………」

「まだだぁぁぁ！！！」

どう考えても立てそうにないアルフがまだ立ち上がる。どうも変な  
スイッチが入ったらしい。

「……………」

本腰を入れるか、そう考えた瞬間にこの場に似つかわしくない呑気  
な声が響いた。

「の・ぞ・む・はっけえーん！！！」

~~~~~

突然だが此処でレイジングハートについて説明しよう。

本来、ユーノ・スクライアの所持品であるこのデバイスは「杖型」デバイスとして、使用者の魔法発動の補助を行う。

あくまで『魔法発動の補助』を行うデバイスなのだ。では今回、なのはレイジングハートをどう使っていたか。

- ・森の中を駆け巡る際、木に引っ掛けて使用した。
- ・フェイトのフォトンランサーを迎撃。但し魔法でなく本体で。
- ・近接格闘に特化したバルディッシュと数十合打ち合う。

・これまたバルディッシュと鏢迫り合い New!

……当然ながら魔法使いの杖がそんなダーティな戦い方に対応している訳がない。

ビキィー!!

「うそぉー!?!」

レイジングハートに亀裂が走り、なのはが驚愕の声を上げる。その一瞬の怯みをフェイトが見逃す筈もなく、あっさりとレイジングハートを弾き、喉元に刃を突き付けた。

今回の勝負、軍配はフェイトに上がる。

~~~~~

「こんな夜中に何処に行ってるのよ……お姉さんは許しませーん！」

望にタツクルをかまし、呆然とするアルフを尻目に酔っ払いが大攻勢をかける。

「許さないから罰としてー……おねーさんの夜伽を命じまーす!!」

「酔い過ぎだナルカナ！今の状況分からないのか!？」

「……んー？」

望に抱き着いて頭をぐりぐりと押し付けていたナルカナは、言われて初めて周りを見渡す。ぐるりと視界を確認し、アルフの部分でぴたりと首を止めた。

「なーによ、昼のじゃない。なにしてんのよ」

「そいつと戦ってただよ！邪魔立てするなら…！！」

犬歯を剥き出しにして昼間と同様に威嚇する。対するナルカナも酒で濁った瞳をアルフに向け、不機嫌そうに唸る。

「…なーんで戦おうとしたのかしら？」

痺れを切らしたナルカナが、アルフの腹に探りを入れる。しかしそこは単純なアルフ、アツサリと思惑を暴露した。

「決まってるじゃないか！ジュエルシードを狙ってるんだよ！！」

「ふーん」

それを聞いたナルカナが腕を振る。その先に光を確認したアルフが何かを投擲された事に気付き、臨戦体勢を取った。

しかし、その飛来物を確認した時、望とアルフの時間が止まる。

「……………え？」

「…なによー、それ狙ってるんじゃないの？」

アルフに投げて寄越したのは、ジュエルシード。

それも四個だ。

「ほら、上げるからとっと消える！ナルカナさまはこれから望と

のミツゲツなのですよ〜」

上機嫌に望の首筋を舐める。呆然としていた望はそれで現実世界に引き戻された。

「おまつ、ナルカナあ！？何考えて……！！」

猛然と抗議を吹っ掛けようとするが、その唇をナルカナが己の唇で以て塞ぐ。

あ、舌入れやがった。

「……ぷはっ……あら、まだいたの？もしかして……見るのが好きなのかしら？」

婉然と微笑み、先程望を奪ったその唇に指を乗せる。アルフが慌てて背を向け、望たちに言葉を放った。

「そ、そんな訳ないだろう！！とっとにかく、アタシは礼は言わないからね！？」

それだけ言うと、フェイトが居るのであるう方角へと走って行った。まだダメージがあるらしく、ぎこちない走り方ではあったが。

「はいはい……さて、これで邪魔は無し。」と

半端に望に抱き着いた姿勢を直し、本格的に馬乗りの体勢を取る。

「まだなのはちゃんが戦ってるんだよ！見られたら……ってオーラフォトン！？何時の間に……！！」

「それじゃ、改めまして………」

そして、昼と同じくひたすらに無の存在を体言したナルカナが、祈りを捧げる様に両の掌を合わせる。その姿に、望までもが一瞬ではあるが魅せられた。

ただ一点、昼と違う所があるとすれば…

「いただきます」

今は、ストッパーがない。

~~~~~

ポタリ

「あら、水仙の花が」

「脈絡も無ければ季節も違つな」

~~~~~

「なのはー!」

「ユーノくん!?!」

敗北の証として、レイジングハートがジュエルシードを吐き出す。そのタイミングでユーノがなのはの元に駆け付けた。

「どうしたの?」

「いい加減遅いから心配だってイルカナさんが僕を寄越したんだ」

「え?.....わっ!もうこんな時間なの!?!」

言われて初めて、現在時刻に気付く。旅館に戻ろうと脚を動かそうとするが、フェイトがその場から一步も動かずにこちらを見ていた。

「.....やっぱり、胸がギュッてなるよ...」

ポツリと、小さく呟く。それだけ言うと、フェイトは今度こそなのはに背を向けた。

「フェイトちゃん！」

なのはの呼びかけに、思わず脚が止まる。

「……………待ってるからね！」

なのははそれだけ言うと、今度こそ旅館に駆けて行った。

「……………」

フェイトは何も言わず、黙って飛行魔法を展開した。

どうやら、今夜は雨らしい。

~~~~~

「イルカナちゃん！ありがとうね！」

旅館に戻って静かに寢床に着いたなのはがボソボソとイルカナに礼を言う。薄く目を開けたイルカナがそれに口元だけの笑顔を見せた。

「いえいえ。こんな夜更けに女の子が出歩くのは、流石にまずいで

すからぬ。それになのはさんもお疲れでしょう？早く寝ないと、明日に響きますよ」

小声になってイルカナも返し、なのははそのまま睡魔に襲われる。

何かを忘れていないかと、奇妙な感覚を残しながら、夢の世界に旅立った。

~~~~~

「さて…」

なのはが眠ったタイミングを計り、イルカナがその身を起こす。いそいそと着替えを用意して、音も無く部屋を出て行った。

それとない下準備はしていた。戦いに夢中になっている所にユーノを投入、意外な人物を介入させる事で望が居たというイメージを薄れさせる。

更に時間を確認させて心から余裕を奪い、心配している相手がいる事を告げて、なのはの中から完全に望の存在を消し去った。最後になのはに疲れを自覚させ、夢の中に誘う言葉を掛ければ作戦は完了だ。

「細工は流々、仕上げを御覧じろ…と」  
ぱたぱたと軽い足取りで廊下を進む。

目指す聖地は、露天風呂。

そろそろ二回戦が始まる頃だ。

ポタリ

「あら、向日葵の花も」

「もう何でもアリだな！」

~~~~~



そんな責め苦を受けているにも関わらず、ツヤツヤの頬に恍惚の表情を浮かべているのは言わぬが華だろう。

ちなみに、かき集めれば丁度『十歳程度の男子一人分』になるだけの壁のシミや足元に広がる挽肉は公然の秘密である。

くくくくく

「…いてて…死ぬかと思った……」

なんで生きてんのお前。

「楽しめたかね？」

快活に笑いながら、士郎が望に話しかける。

「ええ、ありがとうございます」

「それは何より。帰ったらまた、よろしく頼むよ」

何を、とは言わない。それでも望はひとつ頷いて窓の外に目を遣った。

「……………あの娘……………」

気にかかるのは昨夜のフェイトとか言う少女。悩みの種が増えた事を自覚しながら、それでもその鬱憤を少しでも和らげたくてその言葉を小さく呟いた。

「…ミニオン……………だよなあ……………」

緒戦を飾るは金の鎌

不屈の桜は倒れない

夜明けの二刀は行方を見据え

世界の真理を垣間見る

第20章 〈黄金と桜花の鉄火咲き…〉（後書き）

やっとココで5話……………

お久しくもないか。炭斗です。

これから本SSは、原作カットやオリ路線が大幅に入って来ます。

理由としては、

- ・なのはに迷いが無く、戦いに対して葛藤すべき話が必要ない
- ・フェイトの名前どころか友達フラグ建設完了

……とまあ、かなり大きな変更点があるからです。

「構わん、続けたまえ」という心の広い方は、お目汚しではありませんが、これからお付き合い頂けると幸いです。

では、本作が皆様の御眼鏡にかなった事に感謝を。

次もまた、皆様のお目に触れて頂ける事を願いつつ…

## 第10章 く騒乱の間劇く（前書き）

活動記録にてアンケート実施中。

中々意見が溜まらないので番外編にしてみました。

## 第壹章　～騒乱の間劇～

如何に望達の周りで厄介事が渦巻いているとはいえ、毎日が騒ぎに直結している訳ではない。

彼らの日々にも確かに『隙間』は存在するのだ。

《……だからよ、俺の言いたい事を要約したらな？》

「愛娘が可愛いんだろ。…今、お前の出した話題が合計七。その中から要約した話題で同じ結論に達した話は実に五だ。これに対して何かコメントは？」

場所は高町家に用意された望達の部屋。宙に浮かぶ四角い画面から掛けられる声に、いい加減ウンザリだと言わんばかりの望が声を張り上げた。

《分かってるじゃんかノゾムも。俺の中で株が少しだけ上がったぞ？》

「ありがとよ。俺の中じゃもうお前の株の上場は廃止されてるけどな」

《ストップ安すら突破したんかい》

望の冷めた眼差しを飄々と受け流し、画面内の青年が肩を竦める。不意に、不機嫌そうに机を指で叩いていた望が真剣な顔つきで画面に向かって尋ね事をした。

「で、ユウト。わざわざこんな回りくどい六次元干渉型の遠距離通信なんか使って俺に連絡を取ったんだ……用事、それだけじゃないんだろ？」

《いや、単にユーフィーが帰って来ない事に対する愚痴だ》

ぶちん

~~~~~

「……つたく……」

静寂を取り戻した部屋の中、望は呆れながら通信用に調整されたパーマネントウィルを懐にしまう。

パーマネントウィルには神剣使いの能力を高める他に、単体として

の事象を引き出す力がある。望が今しがた使用していた通信はその応用であり、ナルカナが独自に開発したツールだった。

「…未だに理解できないな……どうやって稼働してるんだ？」

ふと、懐にしまった先程まで通信ツールとして運用していた物を取り出す。複数の宝石が埋め込まれたソレを掌で転がしながら、何となしに呟いた。

「だーかーらー、『高みの眼鏡』で対象を捕捉して、『遠方の光伝』で通信すんのよー。その時に『内なる光輪』で画面出すと如何にも会話って感じるでしょ？…んで、『二元を分かつ門』を使ってリアルタイム通信を実現すると同時に機密を保持するワケ。おーらい？」

「……その前になんで鍵かけた部屋に入れたのか教えてくれないかな」

先の通信でツツコミの気力を根こそぎに持って行かれた望は、肩を落としながら無駄に終わるであろう質問を横から凭れかかって来るナルカナに繰り返す。

「愛の力は偉大らしいわね」

「……」

何の説明にもなっていない事にガツクリと肩を落とし、大きな溜息を零す。

「ほらほら、望もそんな顔しない！溜息は幸せが逃げるんだから」  
ふて腐れた望の頬をつつきながら、ナルカナが苦笑気味に望へ話し掛ける。それでも望の機嫌は戻らない。流石に困ったナルカナが、仕方ないとばかりに望の右頬に手を添えて、

「ナルカナ様の元気の源だよ」

そう言つてナルカナが先程までつづいていた望の左頬に唇を近付け、

「やらせないの」

反対側にいたなのはが差し出した掌へと軽く口づけをした。

「むう……邪魔しちゃダメじゃないの」

この部屋のセキュリティに対して真剣に疑問を持ち始めた望を尻目に、ナルカナが可愛いらしく頬を膨らませる。対したなのはは何処吹く風と言わんばかりにごろごろと喉を鳴らしながら望の胸元に顔を埋めた。

「うみゅー……」

幸せそうに鳴くのはに對抗すべく、ナルカナも望を後ろからぎゅっと抱き込んで髪の毛に顔を埋めた。

「……ちっちゃい望の匂いだあ……」

その言葉を最後に、部屋の中に静寂が流れる。もうどうにでもなれと望は思考を放棄し、二人にその身を預けた。

ウンッ

《言い忘れてた。ノゾ…》

ぶちんっ

くくくくく

カチャリと、カップをソーサーに置く音が微かに響く。

「……なるほど、つまり霊脈の整理と澱みの浄化を同時に行う。と？」

僅かな沈黙を破り、月村 忍は相対したイルカナに確認を取る。

「そうなります。幸いにしてこの地には大きな歪みなども無く、すぐにでも取り掛かれるでしょう」

穏やかにイルカナは返し、逆に忍は眼を細めた。海鳴の地を治める

身としては、これからが本番だった。

「……そちらの反応を見る限り、メリットばかりが目立ち過ぎるわ。月村としてはもう少し詳しい所を聞かせて頂きたいのだけど？」

その言葉を受けたイルカナは笑みを一旦引っ込め、あくまでも事務的に告げた。

「ジュエルシードの発動の抑制と、悪性の霊的現象、及び存在に対する長期の予防策」

「それがメリットね。デメリットは？」

「土地の安定化に伴う発展性の難化。停滞の可能性」

「詳細」

「運営方針の転換に際しての障害。特に大転換の際には破綻の可能性も此処に示唆しておきます」

「対策」

「浄化の際に純粋なエネルギー結晶を構築。その一部を託しますので土地に利用すれば問題無いかと」

「危険性」

「貴女達次第です」

「見返り」

「他言無用。機密保持で」

そこまで言って、初めて忍は相好を崩した。肩から力を抜き、改めてイルカナに右手を差し出す。

「成立ね。早速でも構わないわよ」

「ありがとうございます」

イルカナもそれに応じ、その笑みを深める。握手を終え、イルカナはティーカップに手を伸ばした。

「……にしたって、貴女みたいなコが此処まで交渉できるとはねー  
……」

感心した様に呟く忍に少し子供っぽく笑いかけ、イルカナは言った。

「デキるオンナって憧れなんですよ。それに……」

「？」

「仕事しないと左遷されちゃうので」

そうやってぺろっと舌を出し、悪戯が成功したような小悪魔的な表情を浮かべた。

「ふーん……？」

カチャリ

~~~~~

忍達が交渉に勤しむ屋敷の下の階では、張り出したテラスから庭で戯れる猫を眺めるアリサとすずかの姿があった。

「ねえ、すずか」

マナーとしては少し悪いが、テーブルに肘をついたアリサが庭に視線を固定したまま向かいの少女に問い掛ける。応じた少女も庭から視線を動かさずに答えた。

「何？」

「アタシ達……………空気じゃない？」

「言っちゃダメだよ」

にゃーにゃー

~~~~~

薄暗い空間が無限を思わせる広がりを見せる。所々に神秘的な立方体が浮き、淡い燐光が降り注ぐ樹の根は脈打つ様に青白い光を胎動させていた。

そんな静謐さを湛えた空間に、女性の声が木霊する。

「ああもつつ！ココも混線してる！！面倒ね！……………ケイロン！！」

「御意！」

「完・全・分・解！はあああッ！！」

赤みがかった長髪の少女……………沙月の掛け声と共に情報の澱みが分解され、続くケイロンのマーシレススパイクが途切れた情報網を正しく繋ぎ直す。

「っし！…少し休憩しましょうか、パーマントウィルも随分と疲労してきたし」

「そうですね。では」

沙月が提案し、樹の幹らしき物に腰を下ろすのを確認したケイロン

は、その身から鈍く輝く宝石を取り出し、すぐ傍にあつたマナの涌き水の中にそれを浸ける。すると宝石が淡く輝き、内部の澱みが浮きだして来た。その澱みは涌き水の流れに押され、涌き水溜まりから押し出される。ぼんやりとその様子を眺めていた沙月が、ぽつりと呟いた。

「……ココに来てからどのくらい経つたのかしら？」

「私の主観では約三十日前後かと」

ケイロンが沙月の疑問に律儀に応え、何処から取り出したのか湯気の昇るコーヒークップを沙月に渡す。

「ん、あんがと」

ケイロンから受け取ったコーヒーを一口飲み、落ち着きを取り戻したのか先程までの弱々しさは鳴りを潜め、段々とその眉が釣り上がって来た。

「……一ヶ月よ、一ヶ月。ココに来てから一ヶ月……私は望くんと会ってないの。軽いスキンシップも、ちょっととした嬉し恥ずかしハプニングも無ければしっぽりイベントも無いの。会ってないんだからそんなの当然でしょとか言われたらそこまでなんだけど私が不満を感じるの当たり前前の事象であって今私がココで愚痴っても望くんが来てくれる訳でもなくましてや作業が終わらないうちにこっちらら会いに行こうものなら約束破りの女だっと思われるだろうしナルカナに笑われるのだけは断固として許す訳には行かず望くん！！！！！！」

「沙月、落ち着いて下さい。」

途中から息継ぎ無しでまくし立て、最後に沙月がシャウトしたタイミングを見計らい、間髪入れずにお茶請けのクッキーを出すケイロ。沙月がぜえぜえと息を荒げながら差し出されたクッキーを掴むとバリバリと咀嚼する。

「まあ、外側の構造を変えるだけで随分と中身も改善されてるみたいだし…結構早くに終わりそうね」

「ナルカナ殿のバグチェッカーも問題なく動いていますし、外側も後三割を切っています」

ケイロンの言葉を受け、沙月が軽く屈伸を始める。光輝を軽く振りながら、ケイロンの方へ向き直った。

「さつてと！パーマネントウィルは……もう暫く掛かるか。ケイロ、『マルツの松脂』を！」

「御意！！」

キーン！！

~~~~~

「ノゾムよ、かれこれ此処に厄介になって随分と経つが……」

「まあ、自分でも馴染み過ぎだとは思ってるけどさ」

レーメの言葉に苦笑しながら床に布団を敷いていく。そんな望の返事にレーメは軽く首を振り、そうではないと訂正した。

「あの時から少し……ノゾムは根を詰めすぎなのだ。今日とてユウトが連絡してきただろう」

「……………まあ、な……」

少しバツが悪そうに頬を掻き、レーメから視線を外す。どれだけの時を経て、やはり少しだけ残る子供っぽい一面に、レーメは優しい笑みを零した。

「本来の目的は休憩だったのだ。少しぐらい、こんな日があっても良からう」

そう言つて、優しく望の頭を撫でる。以前はそのサイズ差から、満足に行えなかった事だ。そんな行為に若干の新鮮さを感じながら、望は蛍光灯から下がった紐に手をかける。

「ああ……とにかく、今日はオヤスミだ。先輩と合流したら、本格的にのんびりしようぜ」

「うむ！また明日だな、ノゾム！」

「レームも、おやすみ」

パチパチっ

如何に望達の周りで厄介事が渦巻いているとはいえ、毎日が騒ぎに直結している訳ではない。

彼らの日々にも確かに『隙間』は存在するのだ。

第貳章 く影の浸蝕く（前書き）

今回は一応閲覧注意です。

吾ながら中々な地雷を作ったモンだ





~~~~~

「ごめん……ごめんよ……フェイト……フェイトお………」

プレシアがフェイトを折檻していた部屋の外で、アルフが涙と鼻水で顔をぐちゃぐちゃにしながら必死に謝っていた。

去来するのはあの夜、自分を散々に痛めつけたあの少年。

話を、してくれないか？

何故、あの手を払いのけた。

決まっているだろう。情けはかけられなくなかったからだ。

何故、話をしなかった。

決まっているだろう。それは紛れも無い屈辱だからだ。

そのプライドは、主よりも大切だったのか。

「うわあああああああ！！！！！！！！！」

耳を塞ぎ、未だに止まらない涙を流す瞳を閉じる。

「ごめん…ごめん…ごめん…ごめん…ごめん…ごめん…ごめん…ごめん…ごめん…  
…」

もはや何に対する謝罪なのかも分からずに、ただその言葉を繰り返す。

滑稽なまでに、憐れな程に。

~~~~~

「……………っ……………はっ!？」

プレシア・テストロッサが自室に戻った瞬間、その頭を抱え込む。

「私…は…何を……………?」

思い出せない、自分が何をしていたのか。

「…そう言えば、今日はフェイトが帰って来る日だったわね」

ふと、サイドテーブルに視線を遣ると、ケーキボックスが鎮座していた。

「……そうか、疲れたから寝るって言ってたんだっけ」

フェイトが持ってきてくれたお土産と一緒に食べながら、色々な話をしたかったが……本人が疲れてるなら仕方ないと、それを諦める。

「……次はいつになるのかしら」

ふとそんな事を思いながら、ちゃんと娘と話せる機会を窺いながら、プレシアは箱の中に入っていたシュークリームを一口かじった。

「一緒に……食べたかったわね……」

そう呟くプレシアの胸元には、淡い燐光を放つ青白い紋様が刻まれていた。



## 第21章 〈急展直禍〉（前書き）

……さて、やっとマトモに投稿できた…

翼はいらないから時間を下さい（挨拶）

炭斗です

ちょっと現状報告

今回の戦いが一段落つくまでは一応の投稿は可能なんですが、それ以降の話が活動報告にあるアンケートを反映させない事には書けません。

お手数ではありますが、アンケートに参加の程をよろしく願います。

要綱は活動報告にありますのでm（ ）（ ）m

感想も随時受け付けております。ちょっと訳分からないのは遠慮願いたいですが、そちらもよろしく願います。

長くなってしまいましたが、続きをどうぞ。

## 第21章 〈急展直禍〉

表現の仕様がないう暗いトンネル。強いて表現するなら赤黒いベースにライトパープルをぶちまけさせた様な、そんな混沌とした壁が筒状に果てしなく続いていた。そのトンネルの内部を、悠然と銀色の『船』が進む。

『巡航し級8番艦アースラ』

ミッドチルダを統べる時空管理局が保有する戦艦の一隻であり、現在は哨戒任務を終えて帰還の為に進路を転換した所だった。

「艦長」

肅々としたアースラのブリッジ、その沈黙に若い女性の声が響く。

エイミー・リミアッタ

若くして時空管理局執務官補佐の地位に就き、アースラではオペレーターを担当する将来を期待された少女である。

「これ……いや、でも…あれ？」

そんなエイミーが言葉を濁し、眉をしかめる。普段ではあまり見掛

けない仕草に、艦長と呼ばれた人物が続きを促した。

「エイミー、報告があるなら正確に。些細な事であろうと、無視出来ないのなら伝えなさい……私達の仕事はその積み重ねで成り立つのよ」

嗜めた艦長と呼ばれた女性、リンディ・ハラウンはそう言つと視線を和らげ、改めてエイミーに報告を続けさせる。

「はい！……で、報告なんですけど。ココと…ココ。なんて言つか……」

そう言つて計器の一つを指差し、ログを呼び出す。データの内容を次元安定の規準値と照らし合わせ、報告は続いていく。

「…『安定しすぎ』じゃないですか？」

そろりとした、自信のなさ気な声色だが、その異常さを確かにこの少女は読み取っていた。計器に目を遣るリンディもそれを見逃さない。

「そだね……でも…」

「範囲も狭すぎなんですけど、偶然にしては…ちょっと」

あくまでもエイミーの私見でしかないので明言は避けているが、リンディから見てもその値は無視できる範疇を超えていた。そんなリンディの気配を察知したエイミーが、素早く必要な情報を洗い出す。

「エイミー」

視線を計器に固定したまま、オペレーターに声をかける。

「『第97管理外世界、地球』です。管理外なので次元交流はありません。アースラのエネルギー残量は79パーセント、報告予定は二週間後になります」

己の有能な部下を内心で誇りに思いながら、リンディは声を張り上げた。

「いけるわね、アースラはこれより第97管理外世界、地球に向かいます。総員、第二種態勢を維持……アースラ、転進！」

「……了解！」「……」

~~~~~

「ぬうう……………」

レーメは非常に苛立っていた。理由は先日の温泉宿での一件、ナルカナが敵にジュエルシードを四個も渡したと言っただ。

「でさ、この装置なんだけど」

「…カートリッジシステム……？」

「これは…場合によっては切り札に成り得ますね」

先程から部屋の中をうるつき、頻りに眉間を解しながらも、その柳眉からは険の取れる気配が無い。

「……むううう……」

「そうそう。今まで単なる予備弾倉だったヤツを押し込めてさ」

「反動も何も考えてないな……」

「でも元の望さんなら大丈夫ですよ。付加無しの基本スキルだから余計に相性が良いですし」

「将来的には可能性アリか……」

「貴様らあつ！！少しは話を聞けええいつ！！！！」

~~~~~

「記憶にございません」

ヨレヨレになつたハリセンを構えたレーメに、ナルカナがしれつと言う。当然そんな抗弁が通用する訳も無く、結果としてナルカナの言葉はレーメのハリセンを更にヨレヨレにさせる理由にしかならなかつた。

「……吾の持っていた分からは減っておらぬ。ナルカナはアレを何処から入手したのだ？」

「望の所に行く時に邪魔したから」

あつけらかんとナルカナが答え、その返事に溜息をつく。どうせ渡してしまつた分は戻つて来ないのだとレーメは見切りを着け、必要な情報を抜き出す為にナルカナへと向き直つた。

「……とにかくだ。ナルカナよ、汝が持っていたあのパーマメントウィル……名前を覚えている限りで良い、教えてくれ」

「んじゃ見返りちよーだい……そうね、望の抱き枕とか！」

この瞬間、約五分前に制作されたハリセンが早くも寿命を迎える事となる。

~~~~~

「あたた……取り敢えずは『黄道宮の供物』と『忘却神殿の巫女』……後は新種が『彷徨う絶対座標』だったわね。……残りの一つはまだ解析してないから分からないわ」

打たれた後頭部をさすりながら、ナルカナがレーメに報告する。直接的な破壊力に繋がらない内容だと知ったレーメはひとまず肩の力を抜いた。

「ナルカナ、後一個について何か分かる事は無いか？」

望がレーメの後を引き継ぎ、ナルカナに質問する。多少の油断が命取りに成り兼ねない現状を望は警戒していた。

「うーん……多分なんだけど、オンリーワン系のだと思う。ちょっと『黄色い感じの波動』だったし……危険な物じゃ無かったから解析サボったんだし、その辺りは大丈夫よ」

顎に手を宛がいながら、望の疑念を払拭するナルカナ。そんな三人の後ろでは、イルカナがユーノから受け取った研究レポート等を熱心に読み込んでいた。

「で、此処からが本題だ」

その一言に、場が凍りつく。

眉をしかめていたレーメの眉間からは皺が消えるが、その気迫は先刻と比にならない程の規模を誇っている。イルカナもレポートから視線を外して虚空を睨み、ナルカナは気怠い仕草でテーブルに肘をついた。それぞれが聞きの姿勢に移った事を確認した望は、緊張感もそのままに口火を切る。

「俺としては、先ずナルカナの見解を聞きたい。アレは……………」

「映像で判断は出来ないわ。でも望の話と併せて考察するなら、ほぼ間違いなくミニオンでしょうね」

あくまで考察だと言っているが、望はそれが正解だと確信していた。

「でも、あのミニオンには間違いなく『意志』の光があった……………」

望の独白に、レーメ達は神妙に頷く。

「うむ。それが真ならば、吾らは大きな『鍵』を見付けた事になる」

「アレの動向を探って、製作者の足取りを掴む所から…かしらねー」

今後の方針の大綱をまとめようと、ナルカナが話をまとめにかかる。しかし、それは望によって遮られた。

「ナルカナ、そこなんだけどな」

「？」

「どうも彼女は自身を人間だと思っている節がある」

「……何よそれ。厄介窮まりないじゃない……」

どんよりとした視線を望に向け、思わずといった風にごちる。望は苦笑しながらも、己にとって譲れない意志を伝えた。

「神剣のシステムでこのザマだしな。ミニオンとは言え人間に近い物だから、場合によっては……」

「人間のまま一生を過ごさせる……か。イルカナ、あなたの意見は？」

望の意思を汲み取り、後を引き継いだナルカナが、一応はと静観を決め込んでいる己の妹に視線を移す。

「望さんに一票を投じましょう。命に格差は付けませんよ」

「吾は言うまでもないな」

イルカナに次いで、レーメも意思を表明する。ここに、一応の方針は決定した。

「ミニオンとの対話、魂の解放……か」

ボソリと、望がそんな言葉を呟いた。

その瞬間、

「のっぞむくーん！あーそーぼー！！」

けたたましく扉を開き、テンション最高なのはが突撃してくる。最近では身体の使い方が巧くなったのか、トレーニングをしても余力を残す様になってきた。

「で、その皺寄せがこっちに来る訳か…」

一種の諦観を伴い、なのはを受け止める。望は軽く頭を振って、なのはの相手をする為に座布団から立ち上がった。

「了解りよーかい。何して遊ぶ？」

「お医者さんごっこ！！」

……流石にちよつと幼すぎない？

「だから、そこはちよつと大人っぽく産婦人科ごっこなの！！」

スパァン！！

「アホかぁ！！」

思わず言葉より先に手が出てしまったレーメだが、生憎とそれを咎める者はいない。

「……でももう分娩台も用意したし……」



フェイト・テストロッサは戸惑っている。アルフはそれに気付いている物の、咎めようとはしなかった。

「フェイト、アタシが先に仕掛けるから早めにケリを着けちまおう」

「うん……」

アルフがわざと明るく振る舞うが、フェイトの表情は中々に晴れない。その原因と思われる少女を苦々しく思いながらも、目の前の標的に意識を向ける。

「……………シイツ!」

狼の状態にて牽制を開始。肉塊を植物で人型に固定させたような醜悪な外見をした暴走体に対して、その爪を突き立てた。

~~~~~

フェイト・テストロッサは戸惑っていた。己の内側から溢れ出る、不可解な『力』に対して。

「……？」

思い当たるとすれば、母親からの『しつけ』だろうか。意識を取り戻してから、何故か己の力が増幅された感覚がある。気絶した後に治療を施してくれたのかと、そんな考えが脳裏を過ぎった。

「……まだ……」

フェイトがその雑念を振り払い、戦いに集中しようとアルフに意識を向ける。再生力が尋常ではないらしく、有効打らしき跡は見受けられなかった。

「っ……しゃらアアアッ！！！」

肉塊が木の枝を振るった決定的な隙を見計らい、限界まで伸ばした爪を見舞う。それを好機と取ったフェイトがバルディッシュを構えた。

「よし……！！！」

ぞぶり、と生々しい音をたてながら、アルフの爪が肉塊の腹らしき部分に深々と突き刺さった。

その瞬間、

「！！！？」

肉塊だった部分が瞬時に木へと変貌し、アルフの爪を固定した！

「くっ！このオ……！！」

必死に離脱を試みるも、暴れるアルフに肉が絡み付き、それを木に変える事でジュエルシードは完全にアルフの動きを封じ込めた。

がばア……

何もないツルリとした顔面が縦に裂け、中からジュエルシードらしき塊が姿を除かせる。絶好の好機ではあるが、至近距離にアルフが捕まっている為にフェイトは迂闊に手を出せない。葛藤している間にも、露出したジュエルシードの光が輝きを増していく。

「……って、アレは……！？」

カッ！！

直後、閃光。

~~~~~

「……………」

「……………そんな…」

「……………莫迦な…ッ!!」

三者三様に、その光景を黙視する。視線の先には、件のフェイト・テストロツサ。

左肩にアルフを抱え、バルディツシュを杖にしながら、ピクリとも動かない。身体から命のマナを感じ取れる事から、本能に則した急激な稼動に頭が追い付かず意識が朦朧としている様だ。目立った外傷は無いが、ソニックムーブの反動がバリアジャケットがボロボロになっていた。

しかし、問題はそこではない。

そんな所に問題は無い。

望達が凝視している対象であるフェイトの右腕、指先から肘の手前辺りまでに、

青白い紋様が浮き上がっているのだ。

「……ナルが……この時間樹に……！？」

呆然と呟いた言葉に反応出来るだけの者はいない。

「……レーメはサポートに徹してくれ。ナルカナはあの娘の解析を最優先に、最悪戦闘に参加しなくて良い……仕掛ける！」

なんとか思考を切り替えた望は動けないフェイトを護るべく、レーメとナルカナに指示を送りながら第二射を放とうとしているジユエルシードへと駆け出した。

## 第22章 くスキマを継ぐモノく（前書き）

現在執筆している携帯の変換機能がクソ過ぎる件について（挨拶）

プロットぶち上げたら4000字程度だったのに添削したら1000  
00字超えるってどういう事なの……

今回はその前編に当たります。

後編はテスト期間やらレポートやらで来月以降になる事を、この場  
を借りてお詫び申し上げます。

少し短めですが（これでも当初の予定よりかなり長いですが）続き  
をどうぞ。

## 第22章 くスキマを継ぐモノく

「……………？……………何が……………」

全身が悲鳴を上げている。

なのに、何故か痛みを感じない。

何かが身体を蝕んでいる。

なのに、何故か力が沸き上がる。

何が、起こった。ともすれば二度と起き上がれそうに無い全身の倦怠感を感じながら、途切れそうになる意識を必死で繋ぎ留めて、フエイトは現状把握に努めた。

「……………そうだ……………」

ジュエルシードの光を見た瞬間、己の直感が警告を発した。その本能に従い、アルフを敵から助け出したんだと。

そこに考えが至ったフェイトは、自分が動けない程に疲弊しているのが、限界を遙かに超越した機動による反動なのだと理解した。

だが、あくまでも敵からアルフを引き剥がしたただけであり、相手は未だに健在なのだ。

「……………つく！」

体勢を立て直そうと試みるが、身体が動かなければ意味が無い。その為体テイタラクに半ば呆然としながら、敵を見る。先程と同じ光がジュエルシールドに収束し、

「レーム！出し惜しみは無しだ！！！」

「うむ！『大いなる和睦を呼ぶ笛』発動！」

「万象、貫く能わず！！『オーラフォトンバリア』！！！」

刹那、謎の光がフェイトとアルフを包み、球状の力場が形成される。

「え！？」

疑問を漸く口にした瞬間、ジュエルシールドから光が放たれた。

カッ！ガキギキギキギキギキギキギキギキギキギキギキギキギキッ！！！！

……その光の氾濫を、フェイト・テスタロッサは生涯忘れないだろう。

押し寄せる光が、ぶつかり、分解されて淡い燐光となる。その輝く欠片は宛てなく漂ってしまいそうな儚さを持ちながらも、間断無く放たれ続ける光に押されて圧倒的な流れを形作った。

「……………すごい……………！」

それは間違いなく、少女にとって初めての光景。殺伐とした実家、清潔にされながらも何処か虚ろな自宅、霞がかった記憶の隅にある白い草原……………

それら全てを呑み込む程の、己の眼前に広がる奔流。

この瞬間、フェイトは意味が無くとも涙が流れる事を知った。

~~~~~

「……………ノゾム……………!!」

フェイトの周囲にオーラフォトンバリアを展開し、ジュエルシードの攻撃から少女を護る望とレーメ。相手からの攻撃を完全防御する事に成功して安心したのも束の間、内包されたパーマントウィルを看破した三人からは余裕の色が失せていた。

「『滅亡の光』……………これまた、とんでもない厄ネタが転がり込んだモンじゃないの」

うんざりだと言わんばかりにナルカナがぼやく。しかし、その雰囲気や言葉の端々に刻み込まれた緊張感を拭い切れてはいない。

「当然それだけじゃない…よな」

肉塊を睨み据えたまま、望は相手の分析に意識を割く。もしも自分の予想通りであるならば…

「やはりパーマントウィルを制御する為の因子が組み込まれておる…な。よりもよってこんな所で適合せずとも良かるうに……………!!」

いち早く分析を終えたレーメが忌々しげに呟く。その言葉を受けた望とナルカナも、己の予想が的中した事に顔を歪めた。

『滅亡の光』

その名が指し示す通り、その光は等しき滅びを容赦なく齎す<sup>モッラ</sup>。それは放ったモノとして例外ではない。

そんな光を放ちながら自身は滅びず、あまつさえ指向性を持たせたのだ。それはつまり、パーマントウィルを取り込んだ存在が『滅亡の光』を御する因子を持っている証に他ならなかった。

「あの娘のナル化もあるってのに、なんでこう次から次へ……」

半眼でオーラフォトンバリアに護られている少女を見遣る。

「……少なくともフェイト・テストロッサのナル化は表面的な物らしい。あのジュエルシードは倒しさえすれば解決できる」

望が判断を下し、黎明を軽く振った。

「まずはアレからだ」

「……そう簡単には行かぬぞ。心せよ」

レーメが警告を送るが、だからと言って望がするべき事は変わらない。

「…今の俺じゃ少し厳しい闘いになる。ナルカナ、フェイト・テストロッサに張り付いておいてくれ」

「りょーかい、用心しなさいよ？」

ナルカナからもレーメと似たような言葉を掛けられ、望はガクリと肩を落とした。

~~~~~

「……………!……」

ジュエルシードからの砲撃が止む。フェイトは最後まで無事だった事に安堵しながら、僅かな名残惜しさを感じている自分に戦慄した。

「……………ん……フェイト……ト……?」

「っ、アルフ……!」

そんな折、左肩に抱き抱えたアルフが目を覚ます。先程の自分を振り払う為に、アルフに話し掛けた。

「アタシ……は……?」

フェイトの超加速に耐え切れず、朦朧とした意識のままアルフは言葉を発する。

「私が無茶な助け方した所為で気絶したんだ……ごめんね」

「いや……お陰で生きてられるんだ。流石はアタシのマスターだよ」

弱々しくも、何処か誇らしげに微笑する。フェイトはその笑顔に、何故か救われた気がした。

「とにかく今は、アレを回収しないと…」

自分の本来の役目を思い出し、どうにか動く身体を引き擦りながら、ジユエルシードに向き直ろうとする。

「はい無茶しない。ココはナルカナ様と愉快的な仲間達にまっかせなさい」

…が、妙に間延びした気の抜ける声が掛けられ、氣勢を一気に削がれた。

「アンタっ…！」

面識のあるアルフが声を荒げるも、思う様に身体が動かない。そんな我が身を煩わしく思いながらも、従わざるを得ない状況にどうか言葉を引っ込めた。

「……貴女は…」

「問答無用！いいから離れるわよ！」

言うが早いかフェイトとアルフの襟首を掴み、跳躍する。

「っっ、っら離せー！」

アルフが抗議し、暴れようと身構える。その気配を察知したナルカ

ナはキツと眦を吊り上げ、アルフを睨みつけた。

「…離す分には構わないけど、遺書は書いたの？」

その言葉を聞いたフェイトとアルフが疑問を抱くより早く、背後から巨大な光芒が立ち上った。

~~~~~

「ノゾム、今の状態では上級以上のパーマメントウィルは使えぬぞ！」

レーメが背後から警告を促す。その警告を尻目に、望は黎明を抜き放ち、ジュエルシードへと斬り掛かった。

ザギユツ！

「！！！」

この感触、樹と肉を交互に絡ませて勢いを殺いでいるのか！？予想外な手応えに驚くも、咄嗟の判断で黎明を手放す。グズグズと肉が絡み付く前に黎明の顕現を解除し、手元に再度形作るとレーメに指示を飛ばした。

「レーメ、オーラフォトンバリアを全域に展開だ！レーメはその維持に専念しろ！」

「心得たが……一人でやれるか？」

懐疑的な視線を送るが、生憎と望は反応しない。その様子に何かしらの算段を察知したレーメが、改めて望に問い質した。

「いや、考え過ぎたか。ノゾム！譲渡するパーマネントウィルは！？」

「そうだな……『繰り返す戒』、『星宮の麦』、『内なる光輪』、後は『クウルトクウル界の稲穂』を！」

「心得た！これより『繰り返す戒』、『星宮の麦』、『内なる光輪』、『クウルトクウル界の稲穂』、以上のパーマネントウィルの発動権限を一時的に譲渡する！！」

レーメがそう宣言した瞬間、レーメの胸元から四つの光が望へと飛んで行った。その光は望の周囲を軽く漂うと、一斉に望の胸元へと入り込む。その様子を望が確認すると、黎明の柄を軽く握り直した。

「よし……行くぞ！！」

ガッ！！

足元を大きく凹ませ、大上段から黎明を振り下ろす。結果は先程と同じく、途中で肉と樹の波状の衝撃吸収と黎明の取り込みだった。

だが、先程とは決定的な違いがある。

「ブチ貫け…！」

それは、

「オーバードライブ”！！”」

今の望には、切れる札があるという事だ。

望の掛け声と共に、ジュエルシードに食い込む黎明が発光。その光を起爆剤に、振り下ろした時とは比にならない程の激烈な突きが軟らかそうな肉の腹へと見舞われた。

ボゴン！！

樹と肉で組成された腹部が大きくたわみ、オーバードライブの衝撃を逃がそうと全体が不気味にのたうち回る。

「ここかあッ！！」

のたうち回る巨体、その体軸を見極めた望が蹴りを放つ。衝撃を逃がす事に専念しているジュエルシードは為すが俛にその体軀を宙に舞わせた。

刹那、肉のたわみが鎮静化する。衝撃を逃がし切ったのだと望が判断する前に、肉塊の表面がゴツゴツとした樹に被われた。

しかし、

「ライトバースト”オオオ!!!”」

望の叫びと共に、迸る閃光がジュエルシードを取り囲む!

そして、

ガキユキユキユキユキユキユキユキユキユンツ!!!

~~~~~

「何なんだい……アレは……!?!」

茫然自失としたアルフが、溜まり兼ねた様に小さく漏らす。フェイトに至っては瞬きすら儘ならず、繰り広げられる闘争に魅入っていた。

「アンタ達がムキになって首を突っ込もうとしてた厄ネタ。そんだけよ」

先程の望とジュエルシードの攻防、それは五秒に満たない間に行われていたのだ。フェイト達にとっては未知に等しい密度の戦闘。そ

れをこのナルカナとか言う女性はさも当然の事とばかりに受け止めていた。

「…貴女達は…何者なの…?」

並の魔導師で無くとも、到底至れない程の高み。そんな存在を疑問に思うのは当然だと思えた。しかし、ナルカナはその疑問を一瞥する事も無く流す。そしてこちらの主張を通すべく、一方的な告知をした。

「…悪いけど、アレは私達が回収させて貰うわ。アンタ達は退きなさい」

「なツ!? ふざけんじゃないよ!」

案の定と言うべきか、アルフは激昂する。しかし此处で、アルフにフェイトからの待ったが掛かった。

「アルフ、悔しいけど今回は旗色が悪い。この人達に任せよう」

「フェイト!」

非難めいたアルフの視線から眼を逸らし、フェイトは軽くナルカナを睨む。

「それに」

「……」

次の言葉を察するも、ナルカナはそれを口にはしなかった。

「ジュエルシードを諦めた訳じゃない。此処は任せて、改めて奪えば良いんだ」

予想はしていたが、やはり気分の良い物では無い。ナルカナはフンと軽く鼻を鳴らし、ジロリとフェイト達を睨み返すと不機嫌さを隠しもせずに棘のある言葉を放った。

「堂々とした山賊宣言ごころーさま。でも、当然仕掛けるからには『返り討ち』の可能性も理解してるのよね？」

脅しも兼ねて殺気を軽く込めたその言葉に、フェイトが一步、後退る。しかし次の瞬間にはそれ以上に大きく一步を踏み出し、ナルカナに吠えた。

「…だとしても、私は母さんの役に立ちたいんだ！！大魔導士プレシア・テストロッサの娘は…こんな所で立ち止まれないっ！！」

その、言葉に籠められた、

「へえ…」

真意と真理をナルカナが理解しない訳が無い。

「ま、いいわ…今の所は見逃してあげる」

瞬時に鋭くなった眼光を和らげ、相手から得た情報を漏らさずに平静を装う。

ささやかな対抗心からの手落ち。それすらも手札に仕舞い込むその手管は、流石の手練と言うべきか。

「……アルフ」

「…わかったよ」

次の瞬間に二人は飛び上がり、飛行魔術を展開してその身を隠した。

「……さてと、後は望なんだけど……」

ボ  
オ  
ン  
！  
！

聞き慣れた、しかし聞き慣れない奇妙な破裂音がナルカナの耳に飛び込んで来た。

第22章 くスキマを継ぐモノく（後書き）

……実は結構切実に感想に飢えています…。

### 第23章 く黎明の黄昏く（前書き）

書きたい話の時の筆の進み方は異常（挨拶）

まさかの7月投稿に相成りました。  
しわ寄せは来ます。絶対に。

では、お楽しみ下さい。

### 第23章 く黎明の黄昏く

「…やった……のか？」

ライトバーストの光に眼を閉じていたレーメが、恐る恐ると相手を確認する。未だに採光機能が麻痺した視界ではそれもままならないが。

徐々に取り戻し始めた視力で、先ず捉えたのは黒い塊だった。

「これは……」

丸く、円く、黒い。黒焦げになりながらも認識できるそのゴツゴツとした表面は、間違いなく樹のそれだろう。

この有様を見る限り、動き出しそうにはなかった。それを看取ったレーメが視線を巡らせる。そして、レーメの視界に見慣れた青い衣服を捉えた時、我知らずと声を掛けていた。

「ノゾム！」

咄嗟にこの塊を作り出したであろう己が主の名前を叫び、駆け寄ろうとする。しかし名前を呼ばれた望は、レーメに見向きもしない。

「ノゾム、どうした「近寄るな！」」

刹那、

ポ  
オ  
ン  
！  
！

望の一喝にレーメが身を縮ませるより疾く、黒い塊から光を反射させる程に瑞々しい肉の塊が溢れ出した。

「な!？」

驚愕に眼を見開くレーメの眼前に、肉の暴流が押し寄せる。

「ツチ！」

が、警戒を解かなかった望がそれに反応してレーメを小脇に抱え、その場から離脱した。

「馬鹿が、お前も最近弛んだんじゃないのか!？」

望が珍しく罵倒の言葉を口にする。返す言葉も無いレーメは、そのままなだれるしかなかった。

だが、此処である疑問が鎌首をもたげる。何故あの肉塊がまだ動く事を望が悟っていたのか、レーメは気になった。

「ノゾムは……何故まだ終わっていないと解つたのだ？」

「肉の灼ける匂いが全くしなかった。それだけだ」

その問への答は、至極簡潔な物だった。そんな初歩的な事も気付けなかった自分を、改めて恥じる。

ある程度の距離を取った所でレーメを降ろし、望はジュエルシールドに向き直る。

「……？」

何かが、おかしい。

樹の部分を根こそぎ焼き尽くされ、余計に生々しい蠢動を見せる肉塊。望にはその動きが、先程とは違う物に映っていた。

「……レーメ、“オーラフォトンバリア”の出力を限界まで引き上げる。最悪パーマネントウィルが破損しても構わない」

首筋に感じた悪寒の銘ずる儘に、望がレーメに指示を飛ばす。

「んなっ…!？」

言われたレーメが咄嗟に声を荒げようとしたが、望の余りにも真剣な表情に口を噤む。指示に従おうとマナを練り上げようとした瞬間、横合いから二人に話し掛ける声が上がった。

「…それよかさあ」

視線を移すまでもなく、その声の主はナルカナ。此処に来たという事は、恐らくフェイト・テスタロッサの説得に成功したのだろう。そうアタリを付けた望は、黙ってナルカナの言葉を促す。

「私が此処で防御に専念して、望達が二人がかりで行った方が良いわよね。先刻までは無理だったけど私が手隙になったからその作戦でも大丈夫よ？」

先程とは状況が違い、今此処に護衛すべき対象は無い。

躊躇う理由は何処にも無かった。

「レーム、パーマントウィルを返還するぞ！」

「うむ！」

先程とは逆の軌道を描き、望の胸元から現れたパーマントウィルがレームへと吸い込まれていく。その作業を行っている間に、ナルカナは“イミニティー”の展開を終えていた。

「ナルカナ！嫌な予感がする……絶対に気を抜くなよ！？」

「誰にモノ言ってるのよ！」

望の言い様にナルカナが不敵に笑う。この分なら心配は要らないだろうと踵を返す……

「……んっ……！……！？」

した瞬間、全くの不意打ちでナルカナに唇を奪われる。ほんの一瞬の出来事だったソレは、しかし望が動揺するには十分すぎた。そして、ナルカナは望の耳元で囁く。

「貴方の………伴侶なんだから……」

これ以上なく赤面した望が慌ててジュエルシードに向き直る。レーム

メからのじつとりとした視線にも気付かない辺り、余程に切羽詰ま  
っているようだ。そんな望の様子をひとしきり堪能したナルカナが、  
改めて望達に大声で告げた。

「さ！チャチャッと終わらせなさい！」

~~~~~

ポチユツ！！！！

ジュエルシードを中核とした、醜悪な肉の塊。  
その塊から白い弾丸が発射される。  
いや、弾丸ではない。その白い物体は良く見れば骨の形をしていた。

「ふっ！」

迫る骨の弾丸を、紙一重で躲す。続けざまに二連射、こちらは黎明  
で軌道を逸らした。

ガン！！

軌道を逸らす一瞬の隙を狙い、肉の裂け目から鮮血を撒き散らして

大きく湾曲した骨を突き立てる。  
その形態から推察するに恐らくは肋骨か。

ガゴツ、ボギン！！

しかし、その狙われた一撃すら望には届かない。もう片方の手に握られた黎明を振るい、肋骨の一撃を妨害。

その間に構え直した黎明を肋骨に宛てがい、アタカ恰もハサミで物体を無理矢理に振り切るかの様に肋骨を折り砕いた。

ジュエルシードの戦い方が、着実に変化している。

それまでの無闇矢鱈な威力行使から、追い込みをかけて仕留めに掛かる。そんなジュエルシードの『成長』を、望は感じ取っていた。  
ふと、骨を叩き折った瞬間に肉塊の動きが止まる。

「……………」

様々な疑問を思考の隅に追いやり、戦う事に専念していた望も思わず疑問に顔を強張らせる。それまでの動きが実戦に重きを置いた成長を見せていた分、その疑念にも一層の深みがある。

うじゅる……………グずつ……………

動く。

これまでの攻撃に備えた予備動作やフェイント、それらを欠片も感じさせない無秩序なる蠕動。震え、膨らみ、捻れ、伸びる。

その形状は華を思わせ、花弁にあたる部分は薄い皮膜で形作る。

そして、

ガパあ……………

その花弁から一斉に、口のような物が現れた。

「「！！！！！！」」

望とレーメがその思惑に気付く瞬間、

光の華が、咲き乱れる。

~~~~~



これだけの悍ましさと不快感を煽る音だ。決定打にはなりえないが、それこそ相手の気を散らせる等のサポートとしては十二分に威力を發揮するだろう。

何が起こるか分からないとはいえ、余りに闘いの定義から外れている。

或いは、それすら策の内なのか。

「……………望…っ！」

言い知れぬ焦燥に駆られ、思わず敵と相対している己の主の名を呟く。

ただ、想いだけを籠めて。

~~~~~

「……………！！！」

突如、望がくしゃりと顔を歪める。悲痛さすら籠ったその表情に、レーメが怪訝な面持ちをした。

「どっしたのだ？」

そう尋ねるも返答は無い。レーメが疑念を抱くその表情には次第に憤怒が交わり、狂暴さすら伺わせる険しさを覗かせる。

その顔を見てしまったレーメが思わず身体をビクリと強張らせ、続けざまに発しようとしていた言葉を飲み込んだ。

「……………後で話す。レーメ…『星宮の妻』と『クウルトクウル界の稲穂』……………後は『天翼剣レオンダート』を」

ボソボソとした僅かな声でそれだけを告げると、レーメからのアクションを待つだけの体勢に入った。

レーメが慌ててパーマントウィルの譲渡を行うと、望が静かにグローブを嵌め直す。その所作一つひとつに凄まじい怒りを感じ取るレーメは、気が気では無かった。

やがて、望が黎明の柄を力強く握り締める。

「レーメ」

「…なんだ？」

不意に、柔らかい声が掛けられた。望の優しさを一点に集めた様な、そんな声。

全身の緊張を一気に解されたような感覚に襲われたレーメは、返事をするだけがやっとだった。

「…少し、離れててくれ」

その、言葉に。

「これから」

その、声音に。

「ちょっと」

その、佇まいに。

「馬鹿な事、するからさ」

レームは、全てを悟る。

「ナルカナも聞こえてるだろ？」

剣を交えたからこそ理解できる、

「ちょっとだけ……」

敵の、正体。

「……耳、塞いでてくれ」

これから斬るべき、その相手。

「……行くぞ……!!」

レーメが見上げた空に、暗雲が立ち込めて来ていた。

~~~~~

ガッゴオ!!!

踏み込みと呼ぶには、余りにも荒々しすぎるその一歩。アスファルトを砕き、その下地になっているコンクリートすら凹ませ、ジュエルシールドとの距離を零にする。

「ッらああ!!!!」

ジュエルシールドの発する、隙間を極限まで削られ死角が無きに等しい、全方位への光線照射。望はその砲撃の嵐に対して“オーバードライブ”の攻撃マナを刀身

全体に集中、そのフォースを鏡の様に利用し、その身に迫る砲撃を強引に反射、相手の懐に潜り込むという荒業をやつてのけた。

チユガガガガガガガガガガッ！！！！

やがて反射された光線はビリヤード現象を引き起こし、ただでさえ死角無しに見えた光の放射が、更に無軌道な動きを見せる。

外へと向かう光の筋は、ナルカナの“イミニティー”が残らず火花に昇華させる。

地面に向かう光は、赤く焼けた跡を遺し、光に応じた大きさをした穴を刻み込む。

そして、

チユガッ！！

ビギヤアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！！！

そしてまた、ある光は発したその身を焼き焦がし、その肉の一部を削ぎ落とす。

ジュエルシードが一際大きな悲鳴を上げ、更に光線を撒き散らせる。しかし、それは己が身を更に灼く行為に他ならない。体組織の二割程度を焼き払い、ジュエルシードはやっと光を収めた。肉の華を仕

舞い込み、今一度塊に収斂させる。

「疾ッ！！！」

その決定的な隙、見逃す愚は犯さない。

華の茎に相当する部分を、二刀で切り上げ支えを奪う。自由落下までの僅かな滞空時間、渾身の蹴りをかまして更に空中へと飛ばす。

「乾坤一擲……！」

黎明を握る右手を左の腰溜めに、抜刀術の様な構えを取る。左手は右の肩口に親指を触れさせ、黎明の峰を背中に預けさせた。左足を軽く引き、膝を軽く曲げて突撃の体勢を整える。転瞬、

「ブレードラッシュ」！！！」

限界まで引き絞った筋肉を、爆発させる。

たった二振りの剣によって起こされるそれは、嵐と呼ぶに相応しかった。外周の肉を三ヶ所同時に切り落とし、返す刀で膨らみかけの部分を斬り飛ばす。

敢えて剣筋を変え、斬り辛い状況を作る事で相手に黎明が刺さったままにさせ、それを振り上げる時に肉塊を丸ごと持ち上げる。次の瞬間には刺さっていた部分の肉を丸ごと斬り飛ばし、その動きを全方位から仕掛ける。傍目には、謎の塊が血を吹き続けている様にか見えない。

やがて三メートルはあった肉塊が一メートル前後までサイズダウン

する。膨らもうとした分の肉も含め、周囲は血肉の海としか表現できない様相を呈していた。

「……………」

返り血でその身を余す事なく染め上げた望が無言で近付く。しかし、所々から骨を覗かせ、静かに転がるジュエルシードに動きは無いし、その兆候すら見せない。再生できない程に消耗したのか、それとも何が起こったのかを未だに理解していないのか。

「……汝、その存在を縛れ！」

望が腕を振り、“グラスプ”を展開する。この世界に到着した直後に見せた物とは違う、真正正銘の出力でだ。

ギヂイイ……………！！！！

肉の表面が完全に隠れる。光の帯が肉塊を締め上げ、その光条の間から血がボタボタと零れ落ちる。

宙に漂い流れながら、血を滴らせる光球。

この上なく不気味であり、同時に神秘的でもあるその光景に、だがしかし感慨を覚える観客は居ない。

「……………ごめんな」

たった一言、望の懺悔が響く。今にも泣き出しそうな儂い表情を湛え、光球に眼を向けた。慈しみを以て黎明を構え、ジュエルシード

に向き合ひ。

「……稲穂を撫でるは、夜半ヨロの風」

言葉を発した瞬間、望の眼は戦士のそれと化していた。

「帝に捧げし、星の麦」

そこに一切の容赦は無く、

「我、導くは」

そこに一片の曇りもない。

「其の御霊」

ギイイイイン……！！

右手に構えた黎明が輝きを放つ。その白い鏢に埋め込まれた紅の宝玉が橙の輝石へとすげ替わり、更に刀身が力強く輝いた。

「汝の息吹に祝詞を給い」

輝きが最高潮に達し、望の右腕に巻き付けられたベルトが一本弾け飛ぶ。

「息災願いて」

腰を落とし、黎明の切っ先を下げる。溜めに溜めた力の渦が、望を取り囲む。

そして、

「夜を穿つ……！！」

その叫びと同時に、望が黎明を光球に突き立てる。否、突き立てるなどという表現では足りない程に、その一撃は激烈過ぎた。

ブクウツ！ボゴベゴツ！！！！

ボパアアアアン！！！！！！

肉塊を縛り上げていた光条は、余りの余波にその戒めを緩め、標的とされた肉塊は血を滴らせる余裕もなくその身の大部分を吹き飛ばす。

ビキッ！！

突如、望の手元から罅割れる音が鳴る。見れば、橙の輝石……………パ  
ーマネントウィル『星宮の麦』が、その輝きを失って砕け落ちていた。

「…後は……………」

ゆっくりと歩を進め、ジュエルシールドへと近づく。

緩み、球状の檻を彷彿とさせる“グラスプ”をくぐり抜け、その眼前へと立つ。

蒼い輝きを放ち、横で一緒に漂う胎児と臍の緒によって繋がれた『滅亡の光』へと。

「謝りはする……赦して貰うつもりは無い」

望はそう言つて、胎児とジュエルシードを繋ぐ臍の緒を斬る。ゆつくりと光を失いながら落ちる胎児を己の胸へと抱き、空いた手で指を軽く弾く。パチンという微かな音を合図に、漂っていた光条が望を避けてジュエルシードに殺到。  
その封印を恙無く終わらせた。

「仕上げを、ご覧じろ。つてか……」

軽く自嘲めいた呟きを漏らし、その腕に抱いた赤ん坊を、両手で空高く掲げる。

「…翼を託せし、天の剣」

その言葉に応じ、望の周囲に蒼い光が踊り始める。

「憎み給え」

それは、誰への挑発か。

「赦し給え」

それは、誰への謝罪か。

「諦め給え」

それは、何への宣告か。

「裁きは此処に、救いは天に」

その言葉を皮切りに、蒼い光が望を伝って赤ん坊を包み込む。眠る

赤子を布で包む様にも、また死した赤子を火葬する様にも見えるその光景は、正しく『浄化』という言葉を体現していた。

「オーラフォトンレイジ」

その言葉を告げると共に、蒼い光が散滅する。望の降ろした両手に乗っていたのは、黒ずみ、腐食し、罅割れた、辛うじて骨であると認識出来る物体だけであった。

「……ノゾム……」

いつの間にか、レーメが背後に立っている。望は気にした風も無く、誰にともなく独白した。

「……重いなあ……」

「……っ」

息を、飲む事しかできない。

「こんなに小さいのに……持ち切れないよなあ……」

ただ、無言。しかしそれでも、レーメは己に為せる事を準備する。

「……女々しいって笑われても、これだけは変えらんねえ……な……」

笑っている、筈なのに。  
堪えている、筈なのに。

レーメにはその表情が見ていられなかった。

「…神の山にて音色識る」

レーメが、その言葉を紡ぐ。レーメの掌から溢れるその輝きが、黒ずんだ骨に降り注ぐ。

「汝に天への導きを……………“セレスティアリー”」

パツとした光が望の手から弾け、骨が融ける様に消え失せた。少し眼を見開く望に、ゆっくりと歩いて来たナルカナが声を掛ける。

「…この魂に、憐れみを。か……………なーんか…シリアス入っちゃってるわねえ……………」

気怠そうに告げた瞳は、間違い無く揺れている。それを知っているからこそ、望もレーメも、一言も言葉を発しなかった。

キィ……ン

「「「…!?!?」「」

突然、目の前の空間が揺らぐ。ビキビキと空間を侵食し、空気が結晶化していく。  
知っている、この現象は　！

パキィン　！

……パーマネントウィルの、顕現。そこに産まれた新たななる神秘を、望は思わず手に取っていた。

「……ッ……!!!!!!」

流れ込む、情報。

望まれなかった命。

棄てられた未来。

愛を識る、樹木。

生の喜び、死の概念。

そこに転がり込んだ、神秘。

そして、

「……………あ  
……………」

最後に告げられる。

「……………あ……あ……………」

産まれたての神秘の、

「……………うあ……あ……あ……………」

その名前。



「愚か者……幸せな死など、存在する訳が無かるう……」

だから、どうか……この涙だけは望に知られませんかように。

何時しか結界は失われ、大粒の雨が望達を叩く。

だが、今はこれで良いのだろう。

いま、この瞬間だけは……。

### 第23章 く黎明の黄昏く（後書き）

さて今回、パロディが4つ、最後の方に散りばめられています。

全て分かった方、感想板で先着一名様にメッセージにて特別短編をプレゼント！（誰がいるか）

今回の投稿を持ちまして、アンケートを締め切らせて頂きます。ご意見、ありがとうございます！

さて……今回の話ですが、随分と物議を醸すであろう事は既に覚悟しています。

ですので次回は再び、拙作のオリジナル設定を説明する例のコーナーを復活させる事を、予め宣言しておきます。

ではまた次回、

予定は未定ですがよろしく願います。

「アップルジャーク!!!」

「ぬがつ!?!ば、莫迦者お!いきなり耳元でがなり立てるな!」

「なーに呑気に寝言なんか言ってるのよ!どれだけ久々の登場か分かってるの!」

「…第壹章に出ておるではないか」

「望くんと絡みが無い出演に意味は無いわ!」

「断言するでない!そもそもが此処は作者の描写不足を補う貧乏クジなのだぞ!」

「そんなのスタメン落ちに比べたらナンボのもんじゃないの!?!とにかくアピールしないとこの前みたい忘れられるんだから、使える物は使い潰すわよ!」

「……このバイタリティだけは見習うべきだな…」

「さてっ!気を取り直して行くわ!」

「今回は事柄こそ少ないが、この作品を読む上ではかなり重要な説明だ。心して聞くが良い!」

「ついでに描写不足な点のフォローもいくつかするけど、そっちは話半分に聞くだけで構わないわ」

「こら、話半分では理解出来ぬ点多々あるう。しっかり説明せよ」

「無茶な事言わないでよー。今回このコーナーぶち上げる為に書き溜めた設定資料出したら、ノート三冊丸々になったのよ?」

「なにい!?!」

「しかもA・SとStSの資料までごっちゃにしてるモンだから、ダブリ設定と時系列の整理だけで三日作業。その所為でレポート忘れて教授に謝りに行ったんだっけ?」

「止めてやれ!作者のライフはもうゼロだあ!!!」

「しかも設定からそれたネタバレ文章構成を、寝ボケてそのまま投稿して半泣きになってるし」

「……マサキか!アンズなのだな!?!」

「何の話かしらー?さて、改めて説明タイムに入るわよ!次回、『城之内死す』デュエルスタンバイ!!!」

「うああー!サツキが壊れたあー!!!」

「さて、第23章でかなり大それた事をやらかしておるからな。まずは此処から始めねばなるまい」

「そうね。じゃあまずは大前提から説明するんだけど、この作品に於いてパーマネントウィルは『技の発動体』としての他に『神秘』を指し示す物として取り扱っているわ」

「もう少し正確に言えば『神秘の名称』だかな」

「うーん……その辺りを詳しく定義しちゃうと今後の説明がガツタガタになっちゃうから、とりあえずは漠然としたイメージだけ抱いておいて頂戴」

「そしてこのパーマネントウィルだが……吾らが技の発動をする為に解放をするのとは別に、もう一つ『概念そのもの』として解放する事が出来る」

「例えば『梢で眠る猫』だと……ほら、実際に寝てる猫がこうして出てくるわ」

「しかし、この猫はパーマネントウィルの概念ではない。故に寝息は立てておるが生きてはおらぬし、目覚める事も無い。あくまでも概念は概念でしか無いという事を胆に銘じよ」

「で、物質として成立するパーマネントウィルとは違って『コバタの森の風』や『クオルネ海の波濤』といった……此処では事象的概念とでも呼びましようか。その事象的概念を内包したパーマネントウィルは、名称として成立している事象が込められた匣が顕現するの」

「うむ。そしてこの匣と一緒に顕現された鍵を使って開けば……」

「その事象が出てくる。って訳よ」

「この作中ではその描写はまだ無いが、今後次第ではまだまだ考えられる。心の内に留めておくが良い！」

### パーマネントウィル 発動篇

「で、今回の説明の目玉なんだけど……あの時の望くん、一体何したの？」

「パーマネントウィルが壊れたあの一撃か？」

「そうそう。パーマネントウィルが壊れるなんて限界酷使以外に有り得ないでしょうし……回復させなかったの？」

「失念するでない。それも本作のオリジナル設定であろう」

「あら……ああ、そうだったわね！ごめんなさい。まずはパーマネントウィルの消費についてから説明するわ！」

「プレイした汝らならば理解出来るだろうが、それぞれのスキルにはそれぞれ発動回数が定められておる」

「で、本作はこの設定に一工夫入れて『スキル回数がゼロになっても後一回だけスキル発動が可能である』ってのを追加してるのよ」

「その場合はパーマネントウィルが限界を迎え、破壊されるのだ」

「複数あるパーマネントウィルならそんなに実害が無いけど……ワ  
ンオフ仕様のパーマネントウィルだったら結構な痛手になるのよね  
ー」

「で、スキル回数が消費されたパーマネントウィルだが……回復方  
法は既に作中で示されておるからな。ココは割愛させて貰うぞ」

「そんなこんなで本題ッ！何故、望くんのパーマネントウィルは  
たった二回の発動で壊れたのでしょうか？」

「うむ、それこそが今回の要、『クライシス』なのだ！」

「クライシス！？……って、ナニ？」

「大雑把に言ってしまうえば、パーマネントウィルで使用できるスキ  
ルを一撃に凝縮して撃つ。そんな技なのだ!!」

「……つまり？」

「あの時のオーバードライブの残り回数は十五回、つまりオーバ  
ードライブ十五発分の威力であるM：2700 F：4500のダメ  
ージと、追加効果である抵抗力150%ダウンがあの一撃に集約さ  
れた訳だな」

「…なによそれ！反動とかどうなってんの!？」

「反動に関してはパーマネントウィルが自身で引き受けて相殺、結果として通常のスキル発動と同じ反動まで落とせるのだ。その為にもパーマネントウィルを直接神剣に顕現させ、反動を吸収させる。その代わりに、パーマネントウィルは壊れてしまうがな」

「……にしたって破格過ぎるわよ。デメリットとか無いの？」

「……ま、当然と言うべきか……デメリットは存在する。まずは先に述べたパーマネントウィルが破壊される事だ」

「……よくよく考えてみれば、中々に難しい技よね……迂闊に使っちゃうと今後に響く上に残り回数に左右されるんだから、モノによつたらそんなに恩恵も受けられないし……」

「その通りなのだ！更にこの技には重大な欠点があつてな、発動の際には使用するパーマネントウィルに対する祝詞と呪文が必要になる」

「望くんが唱えてたヤツね？」

「うむ、発動までに時間が掛かる上に、基本的にその間は他のスキルが発動できない」

「あらら………って、普通にグラスプ発動してなかった？」

「黎明は二本あるのだ。忘れるでない」

「なるほど、あの時は代わりに防御スキルが使えなかった状況だね」

「うむ、普段であればさしたる問題も無いのだが……吾らが合体した時にこの問題は浮き彫りとなる」

「…そっか、そうなるわね……」

「まあ、以上の通りに使い所が難しい上に発動までのタイムラグ、更に状況を鑑みると……決して便利とは、言い切れぬな」

「なるほどねえ……あれ？でもレーメちゃん、クライシス使わない場面でも呪文唱えてなかった？」

「本来の用途から少し外れた方法だからな。その場合にも呪文を扱う必要があるのだ」

「なるほどね、力の方向性を変えるって訳ね？」

「うむ！」

強醒体

「……話さなきや、駄目？」

「全てで無くとも良い。ノゾムが何故あれ程までに固執するのか……それが伝われば多くは望まぬ」

「ま、イルカナに食って掛かったりパーマメントウィル壊してまで魂を送ったりしてるからねえ……触りだけよ？」

「構わぬ。吾は多くは語れんからな」

「まあ、話の大元はロウ・エターナルの急進派とカオス・エターナルの裏切り者が極秘に繋がりを持った所から始まるんだけどね？」

「ふむ」

「このロウ・エターナルが自分達の最終目標を楯にして、砕いた永遠神剣を幼い子供達にバラ撒いてまとめてエターナルにしちゃったのよねー……」

「……」

「で、エターナルになれば存在を忘れられて、当の本人達はまだ自分が何かすら理解出来てない子供。そこに神剣の記憶を流し込めば……」

「……その辺りでよい。その戦いの中に、ノゾムもいた……今は、それだけで良からう」

「でも、この事件でユーフォリアがロウ・エターナルの処に行っちゃったんだし……」

「それは結果論であり、話の本丸には関与しておらん。今は野暮になっってしまうぞ」

「……なんかちょっとヘビーな話題になっちゃったわね……」

「今回はかりは仕方あるまい。その代わりに、次を盛り上げれば良いのだ！」

「そっか……そうよね！よし、次はハイに行くわよー！！」

「…次があれば、だがな」

「ちよっ！？」



少し改稿しました。

伝わったかな？

第参章 　　Here comes the rain　　(前書き)

あれ？望ちゃんって三刀流できんじゃね？(挨拶)

就活死んでます。炭斗です。

今回の話は本来、第24章として投稿の予定でしたが、あまりにも本筋と温度差が違う為に分割投稿と致しました。

もうそろそろこの作品を見限った方々もいる様に思いますが、それでもまだ見て下さるのであれば不肖ながらも頑張らせて頂きたいと思えます。

第参章 〈Here comes the rain〉

「……あ……」

学校の宿題を手早く済ませたのはが、視線を上げた先の窓に付いた水滴に気付く。

「雨だ……」

その言葉と共に曇天を見上げる。すると、その行為に触発されたかのように、それまでポツリポツリとでしか滴っていなかった天からの雫。それらは勢いを増し、大地を一気に濡らし始めた。

「……雨、好きなの？」

「……ん……どうだろ……」

ユ一ノの問いに曖昧な答えを返したなのはは視線を窓の外に移すと同時に、そう答えた自分自身に驚く。

自分は、確かに雨が嫌いな筈だった。憂鬱な気分になるのが好きになれなかったし、何より単純に濡れるのが嫌だった。

いつからこうなったのかを考えようと思ったが、耳に入る雨音がそんな思考を掻き消す。

今は、この気怠さに浸りたい。

窓に浮かび始めた、湿度から来る結露を眺めながら、なのはは益体もない事を考えては打ち消した。

雨というモノは、見る者を憂鬱な気分になせると共に、その光景を見入らせる不思議な魅力を孕んでいる。

並んで窓の外を見遣る高町なのはとユーノ・スクライアもまた、その魅力に引き込まれていた。

「お二方」

ふと、後ろから声が掛かる。なのはが視線を巡らせた先には、半月盆を抱えたイルカナが立っていた。その盆から紅葉饅頭が盛られた小皿をなのはの前に置き、自らは緑茶を煎れ始める。

「なのはさんは何にしますか？」

「イルカナちゃんと同じヤツがいいな」

「ふふっ、了解しました」

そう言うと煎れたての緑茶をなのはの前にコトリと置く。淀みない仕種で二杯目を用意する様は、何処か堂に入ったようになのはには見えた。

そして雨音をバツクに、暫しの休憩を愉しむ。なのはは漠然と、こんな一時があるから雨も好きになったのかと思いついていた。

「……そうだ！」

「あつぢやあああ！！」

突然、弾かれた様になのはが立ち上がる。その際に急須を引っかけ、急須の中身をユーノが頭から引つ被ったのは完全なる余談だろう。そんなユーノなどお構いなしに、なのはがイルカナへと詰め寄る。

「望くん、傘持って行ってないよね!？」

「ええ、確かに持ってませんね」

「今からでも届けに行つてあげた方が良くないかな！」

「そうですねえ……………」

なのはの提案に、思考を張り巡らせる。ジュエルシードの危険性や不規則性を鑑みても、絶対なる安全を保障し得る場は無い。ならば、持つて行かせても問題は無いのではないかと、そう考えてしまう。

望やナルカナ達は、言うなればこの家の食客でしかない。

無論、謝礼を十二分に用意してはいるものの、それらは去り際に渡さなければ断られる事が明白。そうであるならば、今現在の自分達は完全にゲストであり、そんな異邦人の自分が家主の縁者を無下にする事はできない。

頭ではそう理解しているのだが、イルカナは許可を出せずにいた。

了承の旨を言葉に載せようとした瞬間、悪寒が背筋をなぞつたのだ。

イルカナがこの感覚に襲われると、事の規模に大きな違いはあれど、それらは須らく口クな結果を生み出しはしなかった。この感覚が喚

起された以上、大事を取ることには否はない。

「……望さん達が当たっている事がコトだけに、大事を取っておきましょう。もし、身体を動かしたいと言うのであれば、道場に行きましようか。お付き合いますよ？」

普段であれば高速で首を横に振っているのだが、一度動くと思った以上は雨の陰鬱さに辟易していた今のなのには渡りに船と言える。

「わかった、準備して待つてるねー！」

元気よく扉を開け、部屋から飛び出していく。イルカナは一つ息を吐き、軽く伸びをしながら自分も道場に行こうと一歩を踏み出す。

「イルカナさん」

その歩みを止めさせるのは、ユーノだった。

「少し……お尋ねしたい事があります」

「伺いましょう」

簡潔に答える事で、場の空気を握りにかかる。本来の情報戦であるならばそれは間違いなく必要な行為だろうが、生憎と相手はその辺りを知らない子供であり、この手法は徒勞に終わる。

「何故、なのはに訓練を？」

「…力を持つことはさしたる問題ではありません。誤った力を持たせない事を念頭に置けば、そういう意味じゃありません！」

イルカナの言葉をユーノの怒声が遮る。質問の意味を正しく理解し、それでも尚話題をはぐらかそうとしていたイルカナは内心舌を打ちながら、しかし表情には出さずににこやかさを保っていた。

そんなイルカナに、とうとう疑問をさらけ出したユーノが糾弾の言葉を投げ掛ける。

「最初の内はなのはに実力を付けさせる為かとも思いました。確かになのはも僕も、そのお蔭で随分と力を伸ばす事ができた！」

そこに恩義は感じているのだろう、ユーノの声にはこれから問う質問を認めたくないという自己葛藤の色が含まれていた。

「でも！貴女達はジュエルシードの回収すらも自分達が主導して行っている！――」

「ふむ、続きを」

「たまになのはに任せる事もありましたが、それはあくまでも安全を確保した上での事。多少のイレギュラーを除けば全て望さん達の思惑で動いている」

「正鵠を射てますね。流石に気付かれましたか」

余裕の表情を崩す気配が無い。その事に更なる疑問と焦りを抱えながらも、ユーノの言葉は止まらない。

「ジュエルシードが欲しければ、自分達だけで集めれば良い。衣食

住も、貴女達ならばどうとでも出来る筈……教えて下さい！わざわざなのはを鍛える事で貴女達が……望さんが得るメリットは何なんですか！？」

遂に、全てをぶちまけた。後悔もあるが、これをハッキリとさせない事には間違いなく今後に軋轢を生む事は目に見えている。緊張で以ってイルカナの返答を待つユーノ。

やがて、その唇が言葉を紡ぐ為に形を変える。

「戯れ、ですよ」

ユーノ・スクライアは一瞬、何を言われたのか理解が追いつかなかった。

「た……？」

「少々語弊はありますが、ね。」

上手く舌を回せないユーノから主導権をやりわりと奪い取り、イルカナはユーノに説明を続けた。

「望さんはとある『トラウマ』を抱えています。当然ながら易々と癒せるモノではありません。いざという時はその思考を切り離す事ができますが、日常までそのトラウマを切り離せば、緩やかな腐敗に繋がると自戒しています」

軽く扉に体重を預け、ユーノを正面から見据える。

「トラウマへの向き合い方は人それぞれ。たまたま望さんのトラウマへの向き合い方が、今回はなのはさんを鍛える事に繋がった……」

そこまで言葉を発すると軽く肩を竦め、何でもない事のように軽い調子で締め括りの言葉を言い放った。

「それだけです」

「んなっ……」

ユーノが食い下がろうとした瞬間、階下からイルカナを急かすなのはの言葉が聞こえて来る。澁々と矛を収めるユーノに、扉を開きながらイルカナが声を掛けた。

「安心して下さい。なのはさんを大切に思っている事は、紛れもない事実ですよ」

そう告げて、ウインクを一つユーノに送る。普段の理知的な様からは想像も付かないような無邪気な笑みに、この上無く似合うウインクひとつ。返答が無い事を了承と受け取ったのか、イルカナは今度

こそ道場にいるなのは元に急いだ。

「……僕も単純なのかなあ………」

一人残されたユーノはパタリとその場に倒れ込み、頭の熱を冷ます  
為に赤くなつた頬に手を添えた。

ユーノ・スクライア。

一目惚れの意味を初めて知った瞬間である。

第参章 　　Here comes the rain　　(後書き)

叢雲と黎明で三刀流か、叢雲で劍仙二刀か……

どっちが良いと思います？(割と真剣に)

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5298o/>

---

聖なるかな ~ A lyrical magical eternal ~

2011年11月13日16時17分発行